

仙台市文化財調査報告書第74集

宮城県仙台市

郡山遺跡 V

—昭和59年度発掘調査概報—

1985.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第74集

宮城県仙台市

郡山遺跡 V

— 昭和59年度発掘調査概報 —

1985. 3

仙 台 市 教 育 委 員 会



郡山遺跡（南上空より）

序 文

郡山遺跡が、認知されたのは大正3年当時、煉瓦工場による粘土採掘中において、土師器、須恵器などの発見があったり、訪諱神社北方には古瓦が密度高く散布していることに内藤政恒先生や伊東信雄先生方が注目しておられ、それぞれ平安時代中期、または平安時代初期を下降しない時期の名取郡衙の所在地ではないかと堆論されるなど、その学史は以外に古いのであります。

しかし、考古学的にこの遺跡の解明に着手されるに至るのは半世紀も遠く過ぎさらん昭和54年からのことなのであります。古代土器、円面鏡・木筒・鷲尾・古瓦など、また構木列・掘立柱建物跡等、検出される遺構群や出土遺物はこれまで定説とされてきた陸奥国の史実として、陸奥国の経営は多賀國府建設以降とされてきた歴史に対し、古代東北史を考る上で、学問的にも大きな見直しをせまるほどの考古学上の証となつたのであります。

昭和55年を初年度とする5ヵ年計画も最終年度を迎えたのでありますが、本書はそうした成果を検討し総括したものであります。しかし、この遺跡の総面積は72万m²と広大な規模をもっておりますが、これまでの調査面積は11,329m²と全面積の約1.5%にしか過ぎません。本遺跡の重要性を考えます時、検討すべき考古学上の課題は山積みしておりますことは言を待つまでもありません。

今後は学問上の補完すべき資料の蓄積を基調とした発掘調査は避けられないものと考えます。従いまして、次年度（60年）からは県・文化庁・調査指導委員会の御助言・御指導のもとに第2次5ヵ年計画を実施して参る所存であります。今後の調査の進展によっては、Ⅰ期・Ⅱ期官衙の中核部、政府跡の発見も時間の問題であります。

こうした事実認識のもとに本遺跡の保護、保存処置も重大な課題として受けとめねばならないものと存じますが、これまであたたかい御協力をいただきました地域住民の方々、土地所有者のみなさま方、そして、多くの市民の方々にはこれまで以上の御協力・御助言を御願い申し上げる次第であります。

最後に本書の公開にあたり、多くの地域住民や学識者の方々の地道な御力添えに対し、心から感謝を申し上げ序といたします。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は郡山遺跡の昭和59年度範囲確認調査の概報である。

2. 本調査は国庫補助事業である。

3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　　木村浩二……I、II、IV 1・3、V、VI、Ⅷ 1・3、IX、X、VI

金森安孝……III、VI

長島栄……IV 2・4、Ⅸ 2・4

松本清……IV 3、Ⅸ 3

佐藤甲二……IV 3

遺構トレス　　長島、大貫由美子、西條裕子

遺物実測　　木村、金森、松本、鈴木勝彦、佐藤淳、高橋綾子、鈴木和子、桜井　乾
鈴木雅文

遺物トレス　　谷津妙子、大貫、高橋

遺構写真撮影　木村、金森、長島、松本、神成浩志

遺物写真撮影　木村、金森、松本

遺物拓影　　赤井沢進、菊地宣之、赤井沢千代子、谷津、斎　和恵、小野ちひろ

遺物補修復元　赤井沢(進)、赤井沢(千)

石器実測・トレス　藤田　淳

編集は調査員全員がこれにあつた。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点 ($X=0$ 、 $Y=0$)
とし、高さは標高値で記した。

5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列跡・材木列　　S E 井戸跡　　S X その他の遺構

S B 建物跡　　S I 竪穴住居跡・竪穴遺構

S D 溝跡　　S K 土壙

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 繩文土器　　D 土師器(ロクロ使用)　G 半瓦・軒平瓦

B 弦生土器　　E 須恵器　　H その他の瓦

C 土師器(ロクロ不使用)　F 丸瓦・軒丸瓦　N 金属製品

8. 遺物実測図の中心線は個体の残存率がほぼ50%以上で実線、ほぼ25%~50%で一点鎖線、
これ以下は破線とし、網スクリントン貼り込みは黒色処理を示している。

9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

序 文		
例 言		
I はじめに	1	
II 調査計画と実績	3	
III 第43次発掘調査	7	
1. 調査経過	7	
2. 発見遺構	7	
3. 出土遺物	9	
4. まとめ	13	
IV 第44次発掘調査	15	
1. 調査経過	15	
2. 発見遺構	16	
3. 出土遺物	30	
4. まとめ	48	
V 第45次発掘調査	50	
VI 第46次発掘調査	52	
VII 第47次発掘調査	60	
VIII 第48次発掘調査	63	
1. 調査経過	63	
2. 発見遺構	63	
3. 出土遺物	72	
4. まとめ	75	
IX 第49次発掘調査	78	
X 総 括	80	
XI 5ヶ年調査の総括	84	
調査成果の普及と関連活動	94	
付章 標木材による年輪年代学の研究	奈良国立文化財研究所 光谷拓実	96
写 真 図 版	101	

I はじめに

1. 調査体制

昭和59年度は郡山遺跡範囲確認調査5ヶ年計画の5年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課

課長 阿部 達

主幹 早坂春一

文化財調査係 係長 佐藤 隆

主事 木村浩二、金森安孝、長島栄一

教諭 松本清一

文化財管理係 係長 佐藤政美

主事 岩沢克輔、山口 宏

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 伊東信雄（東北学院大学文学部教授 考古学）

副委員長 佐藤 巧（東北大工学部教授 建築史）

委員 佐々木光雄（宮城県多賀城跡調査研究所所長兼東北歴史資料館副館長 考古学）

工藤預樹（宮城学院女子大学教授 考古学）

桑原滋郎（東北歴史資料館研究部長 考古学）

須藤 隆（東北大工学部助教授 考古学）

発掘調査に際して、下記の方々諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

宮城県教育庁文化財保護課 藤沼邦彦

宮城県多賀城跡調査研究所 進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、
佐藤則之

文化庁記念物課 調査官 黒崎 直、佐久間豊

国立歴史民俗博物館 教授 岡田茂弘

助教授 平川 南

助教授 阿部義平

奈良国立文化財研究所 光谷拓実、山中敏史、大脇 潔、岩本正一

相模大学人文学部 教授 直木孝次郎

北海道大学 講師 横山英介

発掘調査および遺物整理にあたり次の方々の御協力をいただいた。記して感謝したい。

地権者

赤井沢久治、庄子 勇、斎藤助治

調査参加者

木皿与市、赤井沢進、神成浩志、今野富美子、小島美和子、小林てる、赤井沢きすい、工藤
系なよ、寺田ユウ子、板橋やす、鈴木勝彦、藤本智彦、菊地宣之、小林 充、阿部 宏、
昆野賢一、千葉利彦、平沢俊昭、豊村幸宏、皆原祥夫、桜井 乾、横山典昭、谷津妙子、
西條裕子、大貫由美子、安喰真由美、高橋綾子、鈴木和子、小野ちひろ、長江恭子、
支倉力衛、今野ちぎよ、小池房子、大友節子

整理参加者

赤井沢進、神成浩志、鈴木勝彦、藤本智彦、菊地宣之、小林 充、谷津妙子、西條裕子、
大貫由美子、斎 和恵、高橋綾子、鈴木和子、小野ちひろ、桜井 乾、鈴木雅文

II 調査計画と実績

昭和59年度の発掘調査は55年度から開始された「郡山道路範囲確認調査」の5ヶ年計画案にもとづく最終年次にあたる。発掘調査については国庫補助金額の内示（総経費1,500万円、国庫補助金額750万円、県費補助金額375万円）を得たことから、次のような実施計画（案）を立案した。

表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第43次	推定方四町官衙外郭南辺	150m ²	4月～5月
第44次	推定方四町官衙南地区	1,000m ²	5月～8月
第45次	推定方二町寺城中央地区	20m ²	6月
第46次	推定方四町官衙中央南地区	800m ²	9月～11月
合計	4地区	1,970m ²	4月～11月

第43次調査区は推定方四町官衙の外郭南辺にあたり、外郭南西コーナーに近い第7次・42次調査区に隣接する地区である。この地区で、外郭南辺上に住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、申請者菊地彦三郎氏と協議の結果、住宅が外郭線上に重ならない様、設計変更していただくことになり、外郭部分については緊急調査を実施した。調査の結果、推定線上で外郭の材木列ならびに大溝を検出した。材木列は材の遺存状況が良好で、延長12mの調査区の中に布掘りを伴って40本の材が密接して列をなすことを確認した。大溝の状況も過去に実施した第4次・7次・42次調査と同様の結果が得られた。また、材木列に切られるⅠ期官衙を構成すると考えられる掘立柱建物跡を1棟検出し、Ⅰ期・Ⅱ期の変遷を確認した。

第44次調査区は推定方四町官衙の南地区にあたり、南北中軸線にも極めて近い。昨年度まで実施してきた官衙内北地区には中軸建物群が存在していないことが判明したことから、官衙中軸は推定方四町の東西仮想中軸線より南に位置する可能性が高くなった。しかし、この一帯は東西方向に道路が通り、まとまった調査地区的確保が困難である。この第44次調査区も中軸部の想定地区よりやや南西側に片寄ってはいるが、中軸建物群の一角ないしは区画施設の存在が予想された。しかし、期待されたⅡ期官衙の遺構群は数棟の建物跡や土壙の検出にとどまり、Ⅰ期官衙の建物跡・堅穴住居跡・溝跡等の遺構が主体を占めた。また、官衙遺構検出面の下層から、弥生土器の包含層が確認された。

第45次調査区の推定方四町官衙と推定方二町寺院の中間にあたり、官衙の中軸延長線上に位置しており、官衙と寺院を結ぶ道路遺構の存在が想定される地区である。この地区で、住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。深さ1.5m程の盛土の下層に旧水田を確認し、水田下層で南北方向の溝跡を1条検出したのみで、道路遺構を確認することが

できなかった。

第46次調査区は推定方二町寺域のほぼ中央地区に位置し、56年度に調査し、版築基壇を検出した第12次調査区の真南にあたる。当初第45次調査として実施する予定であったが、緊急調査として前述の第45次調査を実施したので、この調査は第46次となった。擾乱が著しく、調査区も極めて狭かったことからも、寺院を構成したと考えられる遺構は検出されなかつた。しかし、上層の擾乱層中からは多量の瓦類が出土し、付近に瓦葺き建物が存在していたことをあらためて裏づけることとなつた。

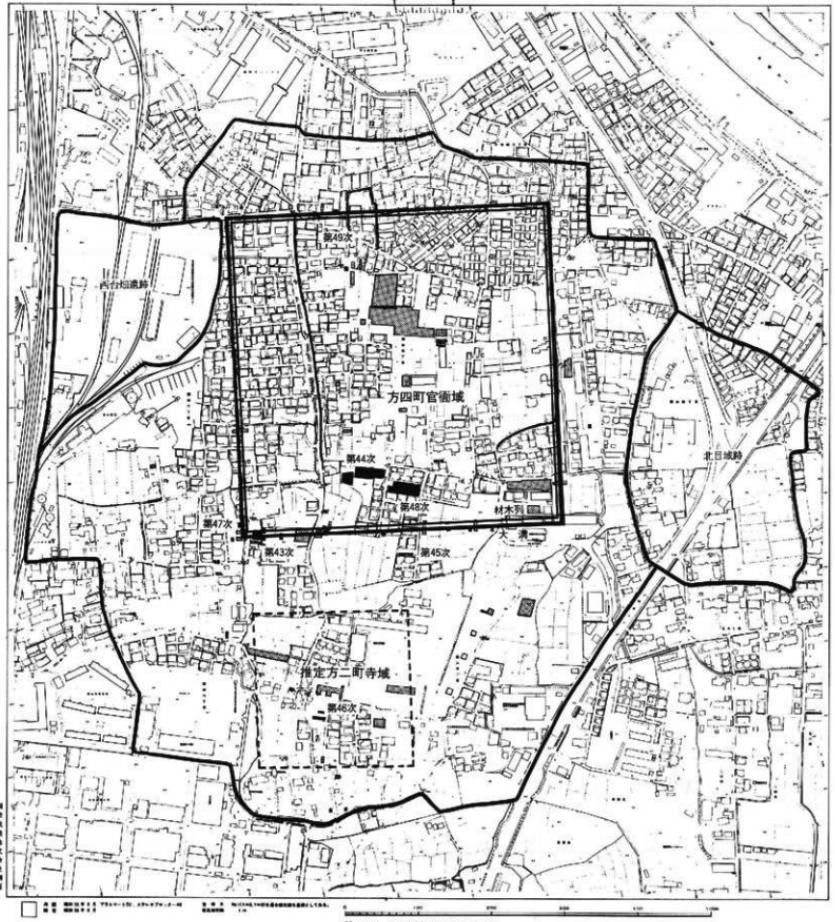
第47次調査区は推定方四町官術外郭の西辺にあたり、55年度に実施した外郭南西コーナーの第7次調査区の北側に隣接する地区である。この地区で、住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、申請者赤井沢正敏氏と協議の結果、住宅は西辺外郭大溝の西側（官術外側）へ建築する様、設計変更、また、外郭材木列にかかる堀の改修ならびに架橋は中止し、仮架橋とすることを諒解いただき、外郭大溝部分については緊急調査を実施した。調査の結果、推定線上で外郭の大溝を検出した。敷地内には1.5m程の盛土がなされ、遺構は全く破壊されないこととなつた。

第48次調査区は推定方四町官術の中央南地区にあたり、官術南北中軸線上に位置しており、当初46次調査として予定していた地区である。官城域内でも南辺寄りの一角であり、中軸線上でもあることから、推定外郭南門から官術中枢部に至る南北中央大路の想定される地区であった。土置場の関係から2回に分けて調査を実施した。調査の結果、道路遺構も含めてⅡ期官術を構成する遺構は極めて少なく、Ⅰ期官術を構成する建物跡・竪穴住居跡・材木列が主体を占めた。特に材木列は2列平行しており、新旧関係は明らかでないが、聯の立て替が行なわれたことを示し、Ⅱ期官術外郭材木列と同規模のものである。

第49次調査区は推定方四町官術の西1町を南北に通る線と推定北辺を二度にわたって横断するコの字線の水道本管施設工事に伴う調査区で、両線あわせて総延長450mに及ぶものであるが、掘削幅が70cmと狭く、殆んど擾乱層の中に新管が入る様、掘削時にチェックし、隨時、新管を曲げていく工法をとった。一部、土壤や柱穴を検出した。推定北辺上では一方の横断箇所で推定線より約4m南の位置で大溝と材木列の痕跡を確認した。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第43次	推定方四町官術外郭南辺	150m ²	4月23日～4月28日
第44次	推定方四町官術南地区	1,000m ²	5月10日～9月13日
第45次	推定方四町官術南外地区	40m ²	6月18日～6月25日
第46次	推定方二町寺域中央地区	60m ²	7月18日～8月29日
第47次	推定方四町官術外郭西辺	50m ²	9月10日～9月19日
第48次	推定方四町官術中央南地区	800m ²	9月11日～11月30日
第49次	推定方四町官術西・北地区	315m ²	6月26日～8月3日
合計	7地区	2,415m ²	4月23日～11月30日



第1図 郡山遺跡現況平面図

III 第43次発掘調査

1. 調査経過

仙台市郡山二丁目11-17、菊地産三郎氏より郡山六丁目212-2において、住宅新築のため、昭和59年1月12日付けで発掘届が提出された。同敷地内の東辺部については、宅地造成工事に伴った擁壁工事に先行し、昭和58年12月、遺構確認のための発掘調査（第42次調査）を実施し、推定方圓町宮衙域の外郭となるSA33材木列とSD35溝跡を検出した。その結果、擁壁と建物の工事工法について関係者と協議し、遺構の現状保存を指導した。今回の調査では、宮衙域の外郭南西コーナー東側部分の遺構確認を目的とし、敷地の南側に東西12m、南北13m、約150m²のほぼ方形の調査区を設定した。

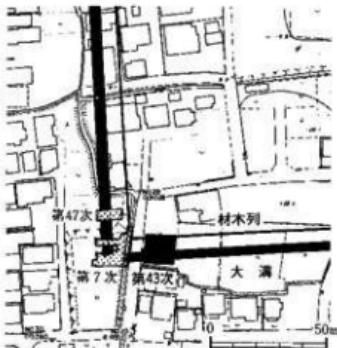
重機を用いて盛土、旧耕作土を排除し、IV層掲げないし明黄褐色シルト質粘土（地山）上面で遺構検出を行い、材木列・溝跡・掘立柱建物跡・上塙・ピットを検出した。

2. 発見遺構

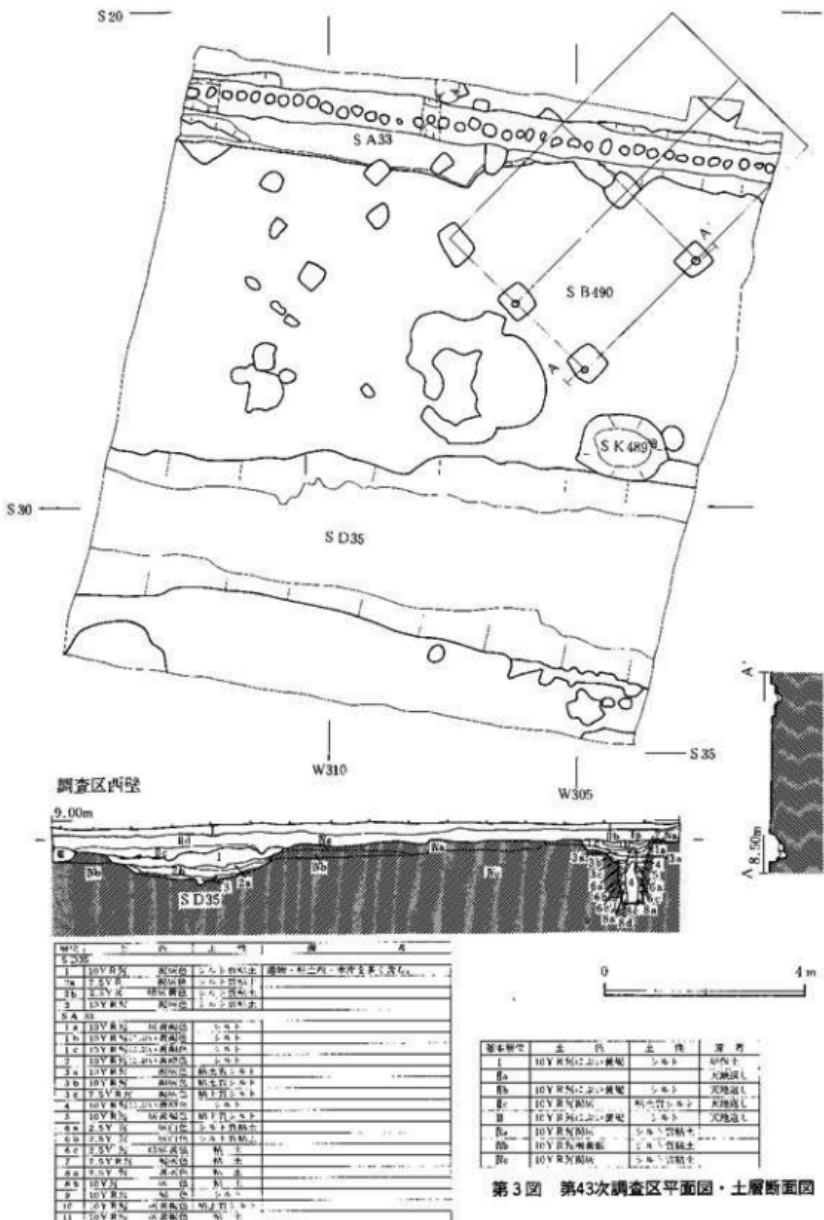
今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、材木列1列、溝跡1条、上塙1基、ピット20である。これらは耕作土下層の地山上面で発見された。遺構を検出した標高は、天地返し等により、調査区北側で8.5m、南側で8.2mと差異がみられた。

S B 490建物跡 桁行2間以上（柱間寸法280~320cm）、総長6.0m以上、梁行2間（柱間寸法170~200cm）、総長3.7mの南北棟建物跡で、桁柱列の方向はN-38°Eの総柱建物である。柱穴は一辺50~80cmの方形ないしは長方形で、堆積土は暗褐色ないしにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は直徑12~17cmである。南側梁列の延長上に、一辺が50~70cmのほぼ方形のピットが東側と西側に各々1つずつみられ、廻付建物の可能性もある。SA33材木列に切られている。

SA33材木列 真東西方向に、約12mにわたって検出した。幅60~80cm、深さ110~120cm程の布掘りの中央に、直徑25cm程のクリ丸材が、心々間隔30cm程で40本、密接して立て並べてあった。布掘りは南側壁上端部分が直立して立ちあがらず、幅110~150cm程に広がり、深さ10~30cm程でテラス状に段を形成する。検出面からの布深さの深さは120~150cmを計り、基底面の標高はほぼ7.300mである。材木は基底面より70~80cm程木質部が遺存している。材木痕跡は、検出面で全てが明瞭に認められた訳ではないが、土層断面の観察で検出面まで立ちあが



第2図 第43次調査区位置図



第3図 第43次調査区平面図・土層断面図

ることが確認できた。材木にはイカダ穴をくりぬいたものもあり、材2本の下端5cm程を年輪測定資料としてサンプリングした。丘掘り埋土は、にぶい黄橙色ないしは褐灰色の粘土質シルトで基底部には、暗灰黄色粘土が見られる。調査区西寄りでは、鉄滓を多く出土した。S B 490建物跡を切っている。

S D 35溝跡 真東西方向の溝で、上幅は260~410cm、深さは40~70cm、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底形を呈する。溝の最深部からS A 33材木列中心線までほぼ8.8mを計る。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は褐灰色シルト質粘土で遺物を多く含み検出面には火山灰を斑状に含んで、2層は褐灰ないし暗灰黄色粘土、3層は褐灰色シルト質粘土である。S K 489土壤を切っている。

S K 489土壤 長径1.9m、短径1.2m、深さ20~30cmである。平面形は橢円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、堆積土は褐色シルトで、S D 35溝跡に切られている。

3. 出土遺物

出土した遺物は、土師器壺・甌・高壺・臺・甕、須恵器蓋・壺・高台付壺・皿・平瓶・瓶・壺・甕、瓦、磁器、壺、フイゴ羽口、布片、炭化材、鉄滓等である。

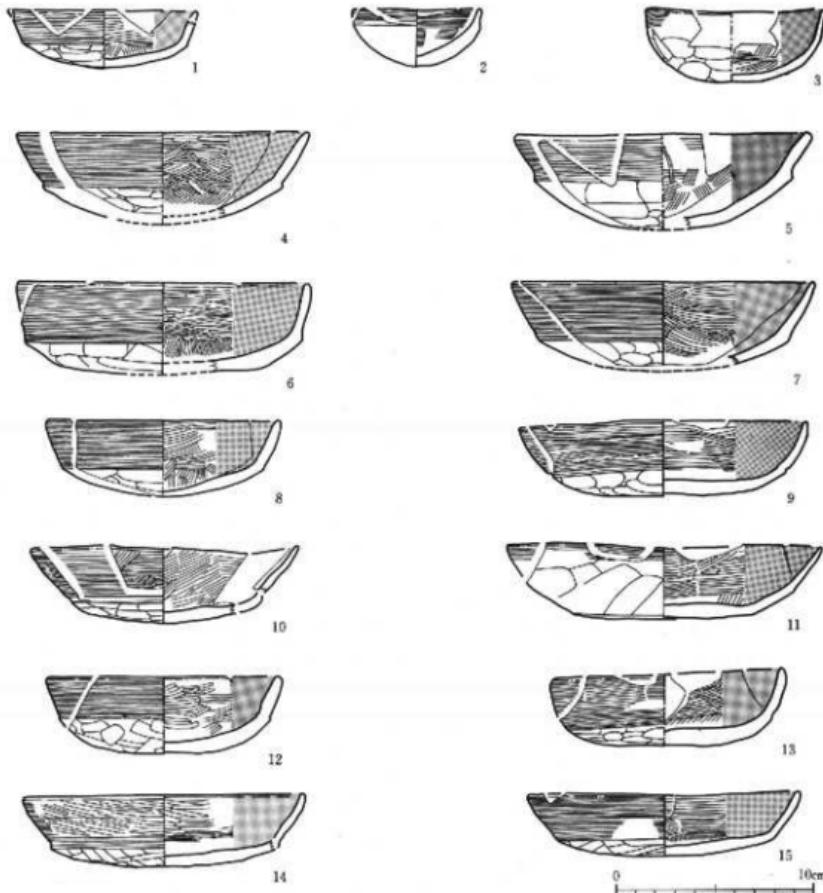
以下、遺構ごとに出土遺物を略述する。

S B 490建物跡 柱穴掘り方埋土から、土師器壺・甕を出土した。

S A 33材木列 材木列掘り方埋土から、土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕、瓦、フイゴ羽口、鉄滓を出土した。

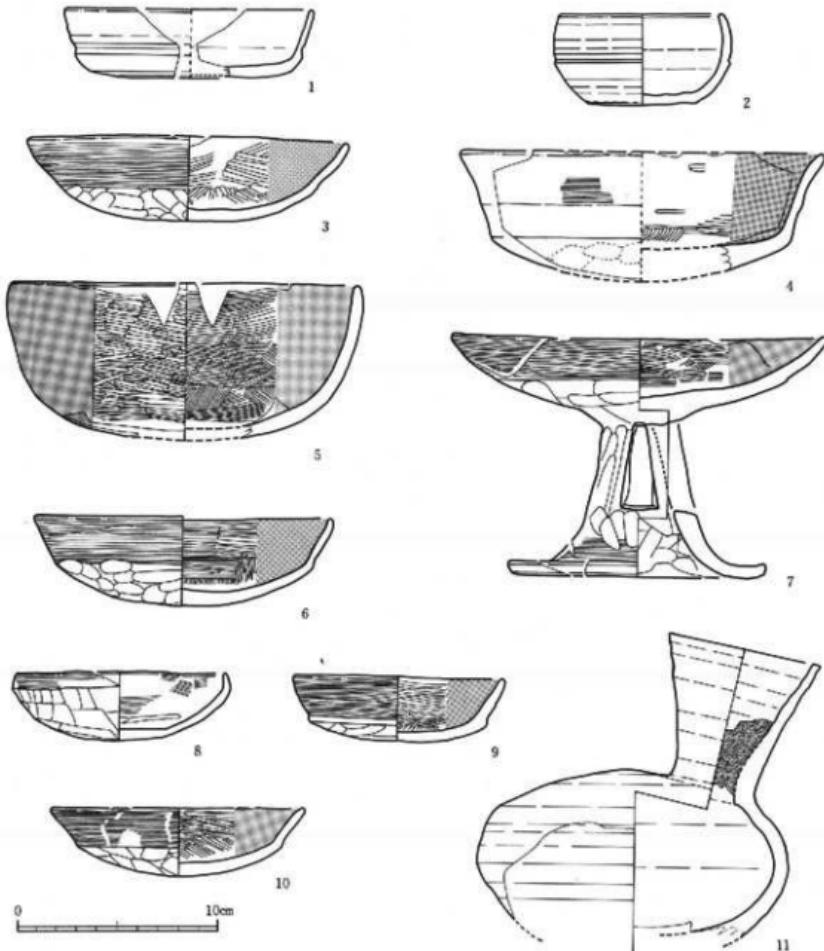
S D 35溝跡 検出面で出土した土師器C-488壺(第4図13)は、体部中位に段を有する丸底の壺である。

堆積土1層から出土したC-492壺(第4図2)は、体部上位に段を有する丸底の小型壺である。C-479・481・482・483・485・489・491・495・496・497・498・487・494壺(第4図9・5・12・1・14・10・6・4・8・7・3、第5図3・4)は、体部中位ないし下位に段または稜を有する丸底の壺である。C-480壺(第4図11)は、体部が外傾して立ち上がる平底の壺である。C-493壺(第6図2)は、体部中位に稜を有する大型の壺である。C-484・486甌(第5図5、第6図1)は、体部が内寄気味に立ち上がる丸底の甌である。C-499高壺(第5図7)は、内寄気味に立ち上がる有段の壺部と、脚部に三角形の透し窓を3個もつ高壺である。須恵器E-223壺(第5図1)は体部中位に段を有する平底の壺で、体部は外傾気味に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリが施されている。E-224壺(第5図2)は、体部中位に段を有する平底の壺で、体部は内寄している。体部下半に回転ヘラケズリ、底部に手持ちヘラケズリが施されている。C-506・508・509甌(第6図4・3・6)は、体部が球形で、頸部で弱い段がつき、外反気味に口縁部へ立ち上がる甌である。E-222甌(第6図5)は、肩の張つ



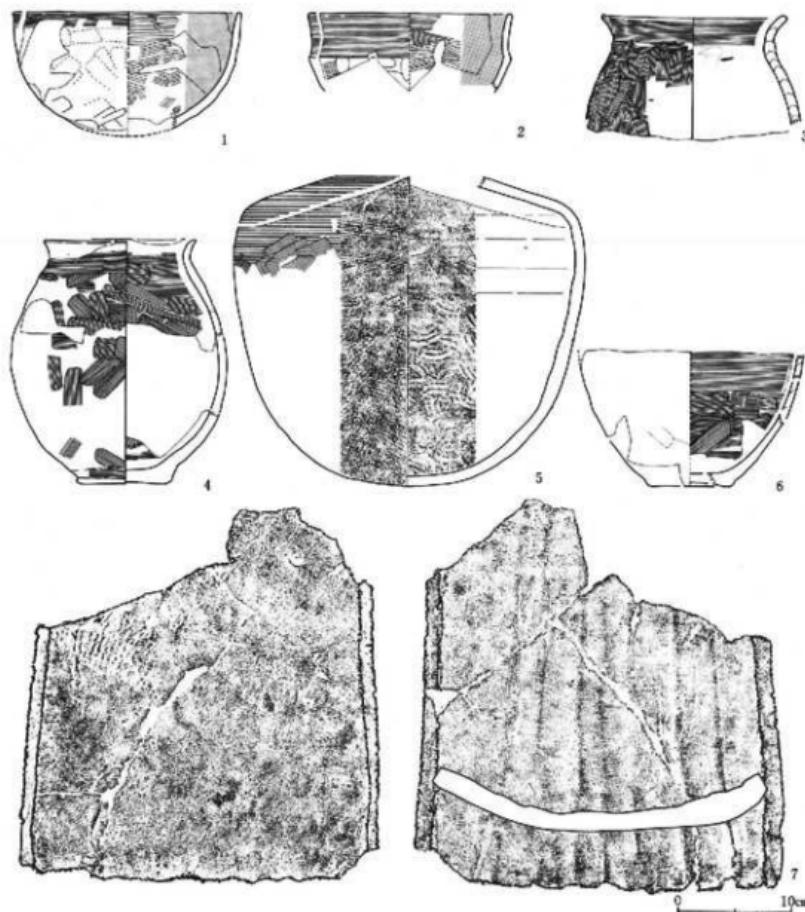
第4図 第43次調査区出土遺物

番号	登録番号	種別	目別	出土遺物	位	外 備		内 備		器 特		種	年 代		
						11	12	備	底	蓋	口 縁	底			
1	C-482	土師壺	15	S.D38	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	2.9cm	9.8cm	5	33-2
2	C-482	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ナ デ	ナ デ	2.9cm	6.7cm	完形	33-5
3	C-488	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	3.5cm	9.1cm	5	33-8
4	C-495	土師壺	15	S.D39	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	4.0cm	10.0cm	5	34-3
5	C-481	土師壺	15	S.D38	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	4.9cm	15.2cm	5	34-2
6	C-491	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	4.7cm	14.6cm	5	33-10
7	C-497	土師壺	15	S.D38	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	5.0cm	13.4cm	5	33-17
8	C-496	土師壺	15	S.D38	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	5.0cm	11.0cm	5	33-3
9	C-475	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	5.8cm	14.6cm	5	33-1
10	C-480	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	5.8cm	13.7cm	5	34-6
11	C-480	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	4.6cm	16.0cm	5	32-9
12	C-482	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	3.0cm	12.0cm	5	33-6
13	C-486	土師壺	15	S.D35	複合	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	4.0cm	12.0cm	5	33-4
14	C-485	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	3.0cm	14.3cm	5	32-11
15	C-503	土師壺	15	S.D35	# 1	ヨコナギ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	中色地質	ヘラサズリ	ハセヒロ	3.1cm	13.8cm	注定形	33-3



番号	出土地点	種類	形状	出土遺物	外 壁 構 造		内 壁 構 造		法 尺	堆 積 高	写 真		
					部	作	施	施					
1	E-223	土器	盆	S D35 # 1	口クロナギ	ロクナギナギ	内壁ナギ	ロクナギナギ	ロクナギナギ	13.5cm	12.8cm	6cm	写真
2	E-224	土器	盆	S D35 # 2	口クロナギ	ロクナギナギ	内壁ナギ	ロクナギナギ	ロクナギナギ	4.5cm	8.2cm	5.7cm	写真
3	C-485	土器	盆	S D35 # 1	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	4.3cm	16.6cm	5.3cm	写真実物
4	C-494	土器	盆	S D35 # 1	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	18.4cm	12.2cm	5cm	写真
5	C-494	土器	碗	S D35 # 1	ヘリコナギ	ヘリコナギ	内壁ナギ	内壁ナギ	内壁ナギ	19.4cm	12.2cm	5cm	写真
6	C-592	土器	盆	S D35 # 2	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	ハラナギナギ	4.5cm	15.3cm	5cm	写真
7	C-499	土器	碗	S D35 # 1	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギ	ヘリコナギ	ヘリコナギ	12.3cm	12.0cm	13.1cm	写真
8	C-500	土器	碗	S D35 # 2	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギ	ナギ	ナギ	3.5cm	11.3cm	5cm	写真実物
9	C-501	土器	碗	S D35 # 2	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギ	ナギ	ナギ	3.3cm	15.7cm	5cm	写真
10	C-511	土器	碗	S K408 # 1	ヨコナギ	ハラナギナギ	ハラナギ	ナギ	ナギ	3.5cm	12.8cm	5cm	写真
11	E-225	土器	手桶	S K408 # 1	ヨコナギ	ハラナギナギ	ロコナギ	ロコナギ	ロコナギ	7.5cm	无	无	写真付

第5図 第43次調査区出土遺物



番号	経緯	種別	器形	出土遺物	層段	外面調査			内面調査			法			堆存 状況
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	高さ	口径	底径	
1 C-486	土耕作	灰	S D35	£ 1		ヨコナギ ハラゲツリ ハラゲツリ		ヘラケバリ	ヨコナギ ハラゲツリ ハラゲツリ		ヘラケバリ	20.0cm	54	54-1	
2 C-493	土耕作	灰	S D35	£ 1		ヨコナギ ハラゲツリ			ナガ	黑色點斑	ヘラケバリ	18.5cm	54	54-6	
3 C-508	土耕作	灰	S D35	高砂城古窯	£ 1	ヨコナギ ハラゲツリ			ヨコナギ	ヘラケバリ		16.3cm	54	54-8	
4 C-206	土耕作	灰	S D35	£ 1		ヨコナギ ハラゲツリ	木 置 備	ヨコナギ	ヨコナギ	ヘラケバリ		23.7cm	13.0cm	7.0cm	54-7
5 E-222	土耕作	灰	S D35	£ 1		ヨコナギ ハラゲツリ ハラゲツリ	中耕作付		ヨコナギ	ヨコナギ	ヘラケバリ	16.0cm	10.0cm	5.0cm	54-12
6 C-509	土耕作	灰	S D35	£ 1						ヘラケバリ	ヘラケバリ		7.5cm	54	54-10
7 G-22	灰	平灰	S D35	£ 1		複数骨片後	ナギ	曲とタ	ヘラケバリ			堆積層	赤褐色	漆界面	54-11

第6図 第43次調査区出土遺物

た球形で丸底の壺である。体部上半に最大径をもち、回転カキ目が施され、下半には平行叩き目がみられる。内面下半には、青海波文のあて道具痕が残る。G-22平足（第6図7）は開口に布目痕・糸切痕がみられ、模様幅も観察でき、小口面に棒状の圧痕が残る。P-12フイゴ羽口は、残存長9cm、残存径5.5cm、穴径3cmを計り、先端に鉄滓が付着している。この他、漆の付着した土師器壺、須恵器蓋・高台付壺・皿・平瓶・瓶・壺・布片などが出土した。

堆積土2層から出土した土師器C-500壺（第5図8）は、体部上位に棱をもち、口縁部にむけて内傾する丸底の壺である。C-501・502・503壺（第5図9・6、第4図15）は、体部下半に段または棱をもつ丸底の壺である。

S K 489 土壙 土師器C-511壺（第5図10）は、体部中位に段を有する丸底の壺である。E-225平瓶（第5図11）は、底部を欠損しているが、体部は内導気味に立ち上がり、体高12cmで最大径を示し、上半は緩やかな丸味をもっている。内面に漆が付着している。この他、土師器壺、須恵器壺を出土した。

また、土師器C-510壺の、底部から体部にかけての破片を表面採取している。

4. まとめ

今回の調査では、推定方四町官衙域の南辺を区画する材木列と大溝を検出し、第4・7・42次調査と同様の結果を得た。材木列は、布掘り北側上端が削平されてはいたが、第4次調査A区で検出した二段布掘りと極めて類似した状況を呈している。布掘りの深さ、基底面の標高等の数値もほぼ一致し、この地区でも上部が1mないしはそれ以上にわたって擾乱を受けたことが確認された。材木は地上面上に上部を出していたものと考えられ、大溝最深部との間隔は8.8mを計り、これまでの調査結果と一致する。

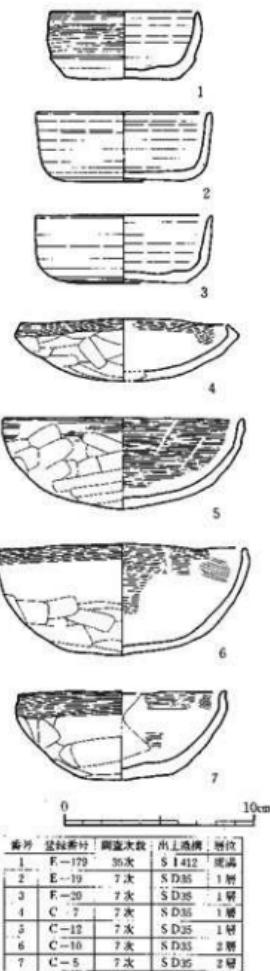
また、S A 33材木列に切られる掘立柱建物跡 S B 490は、柱列方向がN-38°-Eを示し、Ⅰ期官衙建物群とやや角度のずれがみられるが、Ⅱ期官衙に先行するⅠ期官衙の存在を裏付ける。

外郭大溝の堆積土は、他の地区とほぼ同様に、大別して3層に分けられ、出土遺物が1層中に集中している点も類似している。大溝からの出土遺物について、特徴的な点を上げてみると、土器類は土師器、須恵器壺・高杯が主体を占めている。土師器壺は丸底で、外面に段・棱を有するものと、段・棱がないものがあるが、口縁部は外反せず、緩やかにやや内導気味に立ち上がり、内面はヘラミガキ・黒色処理を施しているもので、東北南半における土師器型式編年（註1）上では、古墳時代後期とされる第5型式（栗巻式）から、奈良時代とされる第6型式（国分寺下層式）にかけての特徴をもつもので、第5型式の壺は口縁部が外反して立ち上がる特徴としていることからすれば、この外郭大溝土器群の中にはそれがみられず、むしろその後出的要素が認められることから、ここでは第6型式（国分寺下層式）の中でも初期段階のものとみておきたい。

須恵器E-224 坂は、第35次調査S-412 穫穴住居跡出土のE-179 坂と類似するもので、S-412 穫穴住居跡はⅠ期官衙を構成するもので、7世紀後半代のものとみられるが、第7次調査におけるS-D35大溝第1層出土の須恵器E-19・20・21・22坂（註2）と共に関係にあり、第7次調査出土のこれらの須恵器坂は7世紀後半代とみられるE-179 坂より後出するものとみられることから、7世紀末葉から8世紀初頭段階と考えられ、共伴する土師器の年代観とも矛盾しない。

また、2層中より出土した土師器C-500 坂は、赤褐色、内面ナデ調整の上器で、内面ヘラミガキ・黒色処理を施す在地の坂と区別され、これまで関東系土師器坂としてきた一群の中に含まれるものであろう。第7次調査で大溝から出土した関東系土師器坂はC-5・7・10・12の4点で、C-7・12は1層出土、C-10は2層出土、C-5は3層出土であるが、共伴遺物からみて1～3層の出土土器の中にはあまり時間的隔差が認め難いことから、ほぼ一型式のものとみておきたい。C-500はC-7とC-10の中間的形態を示しており、3層出土のC-5は名取市清水遺跡出土第V群土器土師器坂第3類（註3）と類似しており、清水遺跡ではこれを「群馬県南部から埼玉県西北部に分布する鬼高式土器の後葉のものと近似している」としており、年代的には栗沢式の中で新しい段階のものとしている。C-7は志波姫町御駒堂遺跡第1群上器Ⅲ2C類（註4）に類似しており、7世紀末から8世紀初頭としている。

これらのことから、大溝3層には7世紀後半代、1・2層には7世紀後半から8世紀初頭の土器が混在しているとみられ、土器群の最終年代から、この外郭大溝は8世紀の初頭頃に廃棄され、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。しかし、外郭材木列の検出状況からみて、上部1m前後は擾乱もしくは削平されたことは前述の通りで、大溝の上部も擾乱を受けているとみられることから、土器群が一括して出土する第1層も大溝堆積土の最上層ではなく、中層位と考えられることから、大溝が上面まで人為的に埋め戻されたものかは不明である。



第7図 第7・35次調査出土遺物

IV 第44次発掘調査

1. 調査経過

第44次調査は、郡山五丁目1-5、2の約1,000m²を対象として実施した。この地区は推定方四町のⅡ期宮衙域内でも南側に位置し、これまで広範囲の調査が殆んど実施されなかった地区である。昭和58年度まで行なってきた第24・35次調査により宮衙城内の北側には宮衙中心施設が存在していない可能性が濃くなかったことから、中心施設は宮衙城内南側に存在していたことが想定されるに至った。調査対象地区は現況地目の関係から、南北中軸線よりやや西に位置する畠地に選定せざるを得なかつたが、

中心施設の区画施設=内郭の存在が予想された。現状は畠地で、標高は10.2m、外郭南辺材木列より北に55~85mに位置している。

発掘調査に先立ち調査区の設定と土層観察のため、5月9日に1×1mの試掘ピットを10ヶ所あけ、調査を行った。その結果、現地表面より70cm程度まで耕作による擾乱を受けていることが明らかになり、5月10日から重機によって表土、耕作土の排除を行った。その際、調査区西側に畠地境界が南北方向にあったことから、これを畦状に残し、便宜上、西区と東区にわけて調査を行った。耕土後、遺構検出作業を行ったが、竪穴住居跡、上塙、溝跡などが存在することはわかるものの、耕作時の天地返しによる擾乱が調査区全面に及んでおり、遺構の規模や重複関係は判然としなかつた。よって天地返しによる溝状の擾乱を掘り下げた後、再び遺構の検出作業を行ったため、本格的な遺構調査に入ったのは6月初旬以降であった。調査区内からはN-30°E前後の基準方向による掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡などのⅠ期宮衙遺構群が多く検出され、真北方向を基準とするⅡ期宮衙の遺構は掘立柱建物跡が1棟検出されたのみであった。また、宮衙遺構群が検出される面の下層中より弥生土器片が数多く出土し、弥生時代の遺物包含層が存在することが確認された。当初予想したⅡ期宮衙中心施設はこの地区まで広がっておらず、今後の調査の課題となつた。調査は9月8日に終了し、9月18日に埋め戻し作業を完了した。



第8図 第44次調査区位置図

2. 発見遺構

今回の調査によって発見された遺構は掘立柱建物跡5棟、竪穴住居跡6軒、竪穴遺構1基、溝跡14条、土塙40基、性格不明遺構1基、小柱穴・ピット約130などである。官街に伴う遺構のうちほとんどは、N-30°-E前後の基準方向によるⅠ期官街のものである。これらは耕作上下層のⅢ層あるいはⅣ層上面で発見されたものであるが、本来はこの上層で検出可能な遺構である。しかし耕作の為、削平されて殆んど残らないのである。

S B 507 建物跡 桁行5間（柱間寸法185～205cm）、総長10m、梁行2間（柱間寸法200～232cm）、総長4.5mの南北棟建物跡で、桁行柱列方向はN-31°-Eである。柱穴は一辺60～115cmの長方形で、深さは50～70cm、柱痕跡は直径10～26cmである。柱穴内より土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器壺片、羽口、鉄津を出土している。S I 568を切っており、SK 510、SD 499-524に切られている。

S B 527 建物跡 南北2間（柱間寸法171～201cm）、総長4m、東西2間（柱間寸法179～220cm）、総長4mの建物跡で、東西柱列方向はN-35°-Eである。柱穴は一辺25～70cmの隅丸長方形のものが多く、深さは30～40cm、柱穴の中には直径5～20cm程の河原石が入っているものがある。柱痕跡は直径15～25cmである。柱穴内より土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器壺、甕片を出土している。P 130に切られている。

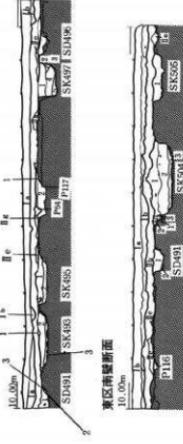
S B 528 建物跡 桁行4間（柱間寸法153～180cm）、総長6.7m、南北2間（柱間寸法175～191cm）、総長3.6mの東西棟建物跡で、桁行柱列方向はN-32°-Eである。柱穴は一辺35～70cmの正方形で、深さ30～50cm、柱痕跡は直径15～20cmである。柱穴内より土師器甕、弥生土器片を出土している。S I 568を切っており、SK 516・523に切られている。

S B 534 建物跡 桁行3間（柱間寸法240～(247)cm）、総長7.3m、梁行2間（柱間寸法216～233cm）、総長4.5mの東西棟建物跡で、桁行柱列方向はN-36°-Eである。柱穴は一辺40～60cmの正方形のものが多く、深さ10～45cm、柱痕跡は直径12～28cmである。柱穴内より弥生土器片、須恵器蓋片を出土している。S I 520・568、SK 531を切っており、S I 565に切られている。

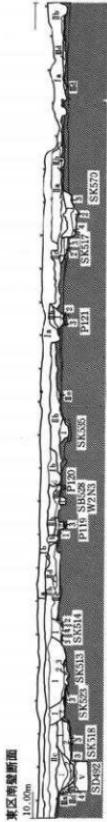
S B 526 建物跡 桁行3間以上（柱間寸法252～274cm）、総長6.9m以上、梁行2間（柱間寸法243～249cm）、総長4.9mの南北棟建物跡で、梁行柱列方向からN-3°-Eである。柱穴は一辺70～111cmの隅丸長方形で、深さ50～65cm、柱穴埋土は、褐色シルトとにぶい黄褐色粘土質シルトが互層をなす。柱痕跡は直径20～28cmである。柱穴内より土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器壺（蓋？）、甕片を出土している。P 131に切られている。

S I 498 竪穴住居跡 東西長2.5m、南北長2.4mのはば正方形で、北辺方向はN-61°-Eである。壁は直立気味に立ち上がり、壁上端から床面まで16～19cm、掘り方底面までを含めると

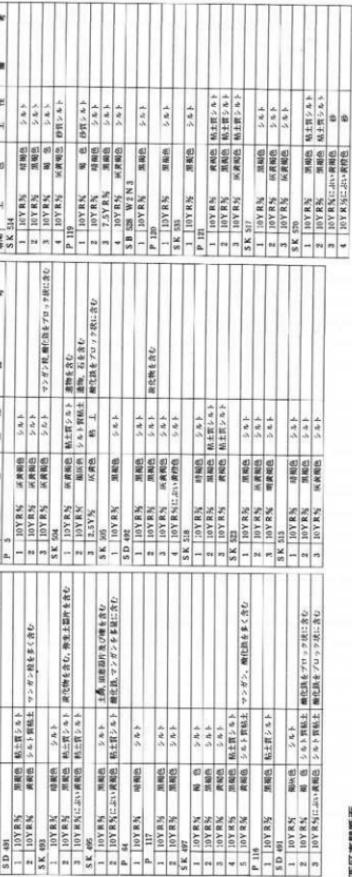
東区東面断面



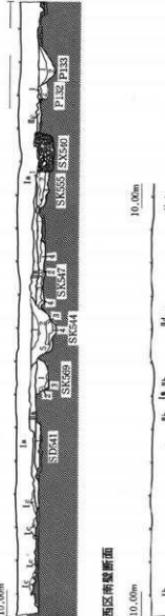
東区南面断面



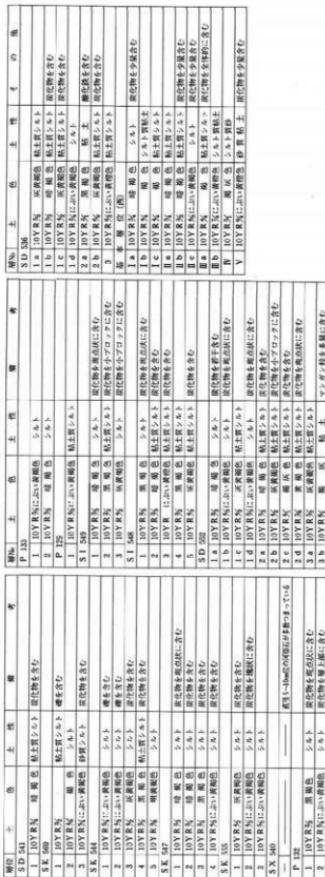
東区西面断面

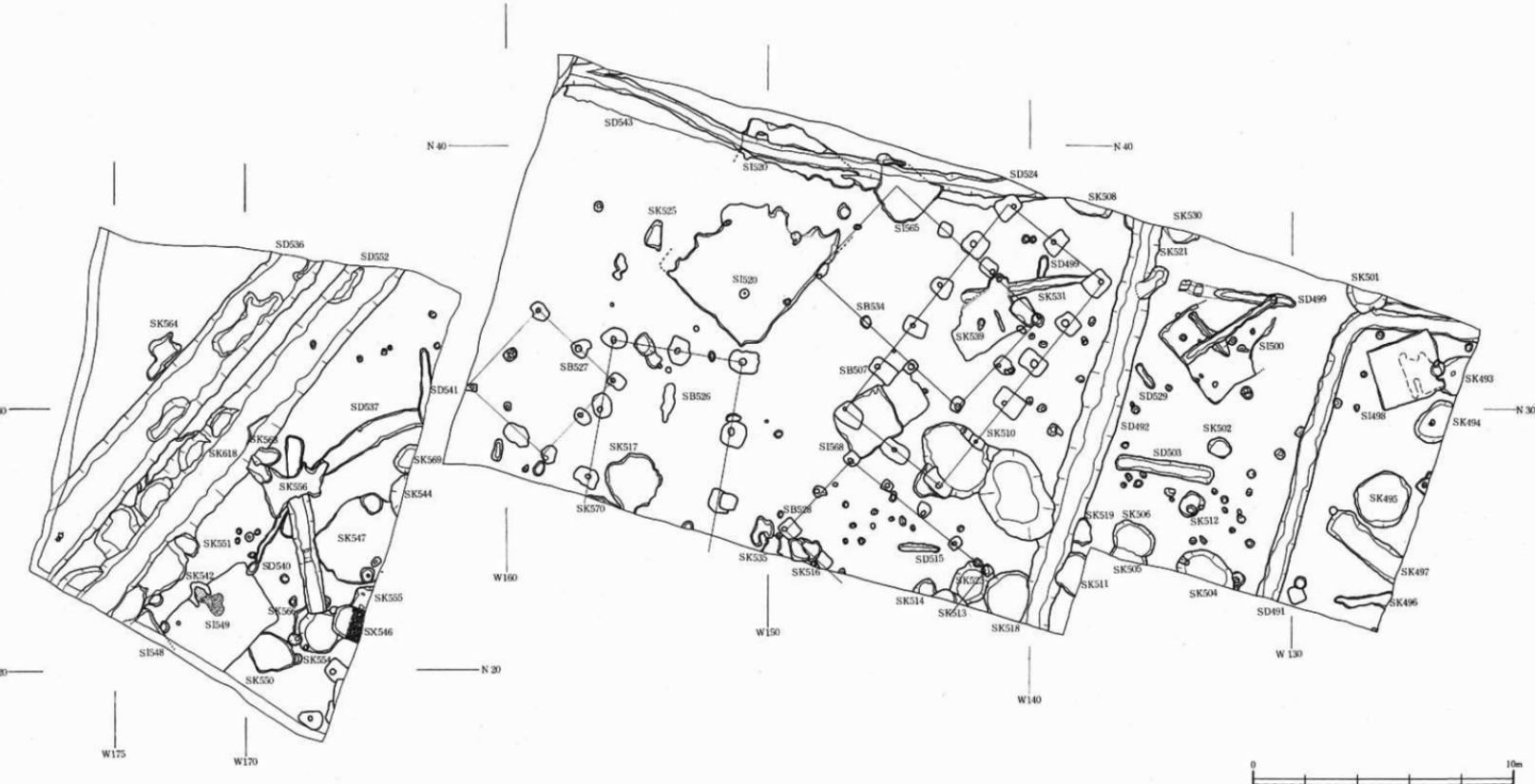


西区東面断面



西区南面断面





第10図 第44次調査区平面図

17~26cm程残存している。周溝、主柱穴などは検出されず、床面はにぶい黄褐色粘土の貼床で、東半中央付近のみに見られる。カマドは東壁南寄りに施設され、カマド内中央には支脚の石が残っている。堆積土は暗褐色シルト質粘土、黒褐色粘土で、堆積土中より土師器壺、甕片、弥生土器片が、床面上より土師器壺が出土している。SK 493、SD 491に切られている。

S I 500 壁穴住居跡 長辺4.3m以上、短辺3.5mの長方形と推定され、短辺方向はN-44°-Eである。上部削平が著しく、全体のうち西南部分のみ残存している。床面、周溝などは検出されず、カマドの位置も不明である。住居跡内よりP-1、2が検出されたが、主柱穴となるかどうかについては判然としない。掘り方底面には、上幅25~60cm、深さ20~40cmの溝が直交している。掘り方埋土は灰黄褐色粘土質シルト、シルト質粘土、暗褐色シルト、粘土などで、土師器壺、甕片、須恵器壺、甕片を出土している。SD 499に切られている。

S I 520 壁穴住居跡 東西長4.8m以上、南北長7.5mほどの長方形と推定され、南辺方向からN-35°-Eである。上部削平が著しく、全体のうち西辺と北半の一帯が失われている。床面、周溝などは検出されず、カマドの位置も不明である。主柱穴は1つ検出され、直径90cm、深さ45cmである。掘り方底面には凹凸があり、掘り方埋土は黒色粘土質シルト・シルト質粘土、黒褐色粘土質シルト・シルト質粘土、灰黄褐色粘土質シルトなどである。埋土中より土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器壺、甕片を出土している。SB 534、SD 524・543に切られている。

S I 548 壁穴住居跡 調査の南隅で住居跡の一部を検出したが、詳細は不明である。規模は2m以上×1m以上で、墻は直立気味に立ち上り、壁上端から床面まで15cm、掘り方底面までを含めると27~40cm程残存している。床面は黒褐色粘土質シルトの貼床である。堆積土は暗褐色、黄褐色、暗黃褐色、黒褐色シルト、黒褐色粘土質シルト、掘り方埋土は黄褐色、黒褐色、褐色シルト、暗褐色粘土質シルトなどである。床面上より土師器甕片、弥生土器片、掘り方埋め土中より土師器甕、弥生土器片を出土している。SI 549、SD 552を切っている。

S I 549 壁穴住居跡 東西長4m以上、南北長2.6mの長方形で、南辺方向はN-36°-Eである。上部削平のため、一部床面が露出している。床面は黒褐色粘土質シルトの貼床で、厚さは2~3cmである。周溝、主柱穴等は検出されなかった。カマドは北辺に施設され、前面に炭化物の分布が見られる。堆積土は暗灰色、灰黄褐色シルトである。床面上とカマド内から土師器壺、甕、弥生土器片を出土している。SK 550を切っており、S I 548、P 101・102・107に切られている。

S I 565 壁穴住居跡 調査区の中央北端で検出されたが、削平が著しく、カマド、周溝などの詳細は不明である。しかしSD 524溝跡の賦断面を観察すると、にぶい黄褐色シルトによる厚さ2~4cmの貼床があり、堆積土は、黒褐色、暗褐色シルトで、掘り方埋め土は褐色、にぶい黄褐

色シルト、にぶい黄褐色砂質シルトである。堆積土中よりは、土師器壺、甕片、弥生土器片を出土している。S D 524・543に切られている。

S I 568 溝跡 長辺3.5m、短辺2mの長方形で、北半がややせばまる。東辺方向はN-46°-Eで、6層上面で灰白色火山灰が薄く堆積し、その下に炭化物が広がっている。凹凸があり住居跡の床面とは考えにくい。堆積土は褐色、黄褐色、暗褐色、にぶい黄褐色シルトである。尚この遺構は6層上面まで調査にとどめた。S B 507・528に切られている。

S D 491 溝跡 長さ13.5m以上、上幅65~85cm、下幅40~60cm、深さ25~35cm、横断面形はU字形を呈し、方向はN-10°-Eである。堆積土は褐灰色、にぶい黄灰色シルト、褐色シルト質粘土で、土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器蓋、甕片、平甕片、磁化木を出土している。S I 498、S K 501を切っている。

S D 492 溝跡 長さ16m、上幅100~145cm、下幅40~80cm、深さ55~65cm、横断面形は逆台形を呈し、方向はN-10°-Eである。堆積土は、黄褐色、黒褐色、灰黃褐色、にぶい黄褐色シルトで、土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器壺、蓋、壺、甕片、陶器片、小玉石、鉄洋を出土している。S K 510・511・518・519・521・530を切っている。

S D 496 溝跡 長さ2.2m以上、上幅25~70cm、下幅15~55cm、深さ10~20cm、底面は凹凸があり、横断面形は舟底形を呈している。

S D 499 溝跡 長さ13m程で、上幅20~40cm、下幅20~30cm、深さ10~20cm、横断面形は扁平逆台形を呈し、東西方向に平行している。堆積土は、褐色、黄褐色、灰黃褐色粘土質シルトで、土師器壺、甕片を出土している。S I 500、S B 507、S K 539を切っている。

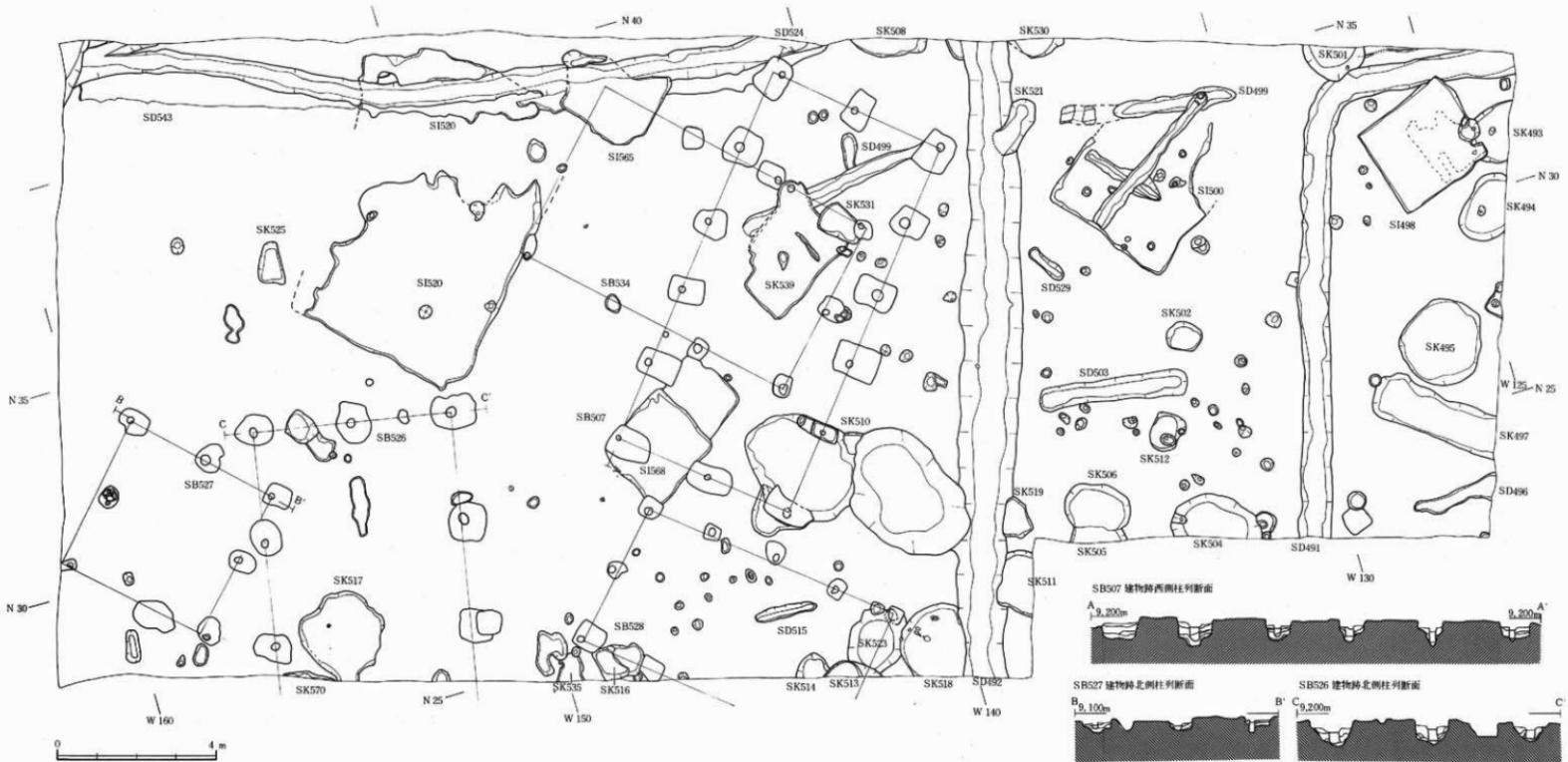
S D 503 溝跡 長さ4m、上幅50~60cm、下幅20~40cm、深さ10~15cm、横断面形は扁平なU字形を呈し、方向はE-2°-Sである。堆積土は暗褐色粘土質シルトで、土師器甕片を出土している。

S D 515 溝跡 長さ1.5m、上幅20~30cm、下幅10~15cm、深さ5~10cm、横断面形は舟底形を呈し、方向はN-3°-Wである。堆積土は、暗褐色、黒褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

S D 524 溝跡 長さ19m以上、上幅50~80cm、下幅20~50cm、深さ10~30cm、横断面形は舟底形あるいは扁平なU字形を呈し、方向は東西方向に平行している。堆積土は暗褐色シルト、褐色、にぶい黄褐色粘土質シルト、褐灰色シルト質粘土、褐色粘土などで、土師器壺・甕片、弥生土器片を出土している。S I 520・565、S D 543、S B 507を切っている。

S D 529 溝跡 長さ1m、上幅25~30cm、下幅は12~20cm、深さ5cm、横断面形は逆台形を呈し、方向はN-37°-Wである。堆積土は、褐色、暗褐色シルトである。

S D 536 溝跡 長さ16m以上、上幅180~200cm、下幅120~160cm、深さ40~70cm、横断面形



第11図 第44次調査区(東) 平面図

は逆台形を呈し、底面に凹凸がある。方向はN-34°Eである。堆積土は3層に大別され、第1層は褐色、黒褐色、にぶい黄褐色シルト、第2層は黒褐色、灰黄褐色粘土など、第3層は灰黄褐色粘土である。堆積土中よりは土師器壺片、弥生土器片を出土している。SD 552を切っている。

SD 537 溝跡 長さ8m以上、上幅20~100cm、下幅10~80cm、深さ5~15cm、横断面形は扁平な逆台形を呈し、底面に凹凸がある。堆積土は暗褐色、褐色シルトで、土師器壺片を出土している。SD 540、SK 556を切っている。

SD 540 溝跡 長さ7.8m、上幅60cm、下幅20cm、深さ7~20cm、横断面形は逆台形を呈し、方向はN-15°Wである。堆積土は暗褐色シルト、シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器壺、壺片、弥生土器片、須恵器壺、蓋、壺片を出土している。SK 556を切り、SD 537に切られている。

SD 541 溝跡 長さ3m以上、上幅30~40cm、下幅20~30cm、深さ3~15cm、横断面形は扁平な逆台形を呈し、方向はN-8°Wである。堆積土中より土師器壺片、弥生土器片を出土している。SD 537を切っている。

SD 543 溝跡 長さ19m以上、詳細は不明であるが溝の底面のみが残り、方向はほぼ東西方向である。堆積土はにぶい黄褐色シルトで、土師器壺、弥生土器片を出土している。SD 524に切られ、SI 520・565、SD 507を切っている。

SD 552 溝跡 長さ19m以上、上幅180~360cm、下幅80~140cm、深さ50~80cm、横断面形は逆台形を呈するが、調査区南半においては、壁ぎわが土壤が重複したように乱れている。方向はN-33°Eである。堆積土は3層に大別され、第1層は暗褐色、褐色シルトなど、第2層は褐色、黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色砂質シルトなどで、さらに第3層は灰黄褐色粘土である。堆積土中よりは、土師器壺、高壺、壺片、弥生土器片、須恵器壺、蓋、壺、平瓶、皿、瓦片、羽口を出土している。SI 548、SK 563・618を切り、SK 551・SK 542、P 108に切られている。

SK 493 土壙 1.9×1m以上、深さ30cmの不整円形で、底面はやや凹凸があり、横断面形はU字形である。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器壺片、須恵器蓋(?)、壺片を出土している。

SK 494 土壙 1.7×1m以上、深さ20cmの楕円形で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器壺片、須恵器壺片を出土している。

SK 495 土壙 2.1×2.1m、深さ25cmのほぼ円形で、底面はやや凹凸があり、断面形は扁平な逆台形である。堆積土は、褐色、暗褐色シルト、黒褐色、暗褐色粘土質シルトで、径10~20cmの河原石を含む。堆積土中より、土師器壺、高壺、壺片、須恵器壺を出土している。

S K 497 土壙 1.1×3.3m 以上、深さ35cmの長方形で、底面は凹凸があり、壁は直立する。方向はN-32°-Eである。堆積土は、褐色、黒褐色、黄褐色シルト、黒褐色粘土質シルト、黄褐色シルト質粘土で瓦層をなし、土師器环、甕片を出土している。

S K 501 土壙 1.5×0.8m 以上、深さ50cmの円形で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色シルト、あるいは粘土質シルトで、土師器环、甕片を出土している。S D 491 に切られている。

S K 502 土壙 0.9×0.7m、深さ15cmの楕円形で、底面はやや凹凸があり、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色シルト、粘土質シルト、褐色砂質シルト、粘土質シルトで、土師器甕片が出土している。

S K 504 土壙 2.3×1 m 以上、深さ80cmの楕円形で、断面形は扁平なU字形である。堆積土は灰黃褐色粘土質シルト、褐灰色シルト質粘土、灰黄色粘土で、土師器环、甕片、弥生土器片、須恵器甕、瓶片を出土している。

S K 505 土壙 1.4×0.4m 以上、深さ20cmで、平面形は不明である。断面形は扁平なU字形で、堆積土は黒褐色シルトである。堆積土中より、土師器甕片、須恵器甕片を出土している。S K 506 を切っている。

S K 506 土壙 1.6×1.1m 以上、深さ25cmの不整楕円形で、底面はやや凹凸がある。堆積土は、暗褐色、黄褐色粘土質シルトで、土師器甕片、須恵器甕片を出土している。S K 505 に切られている。

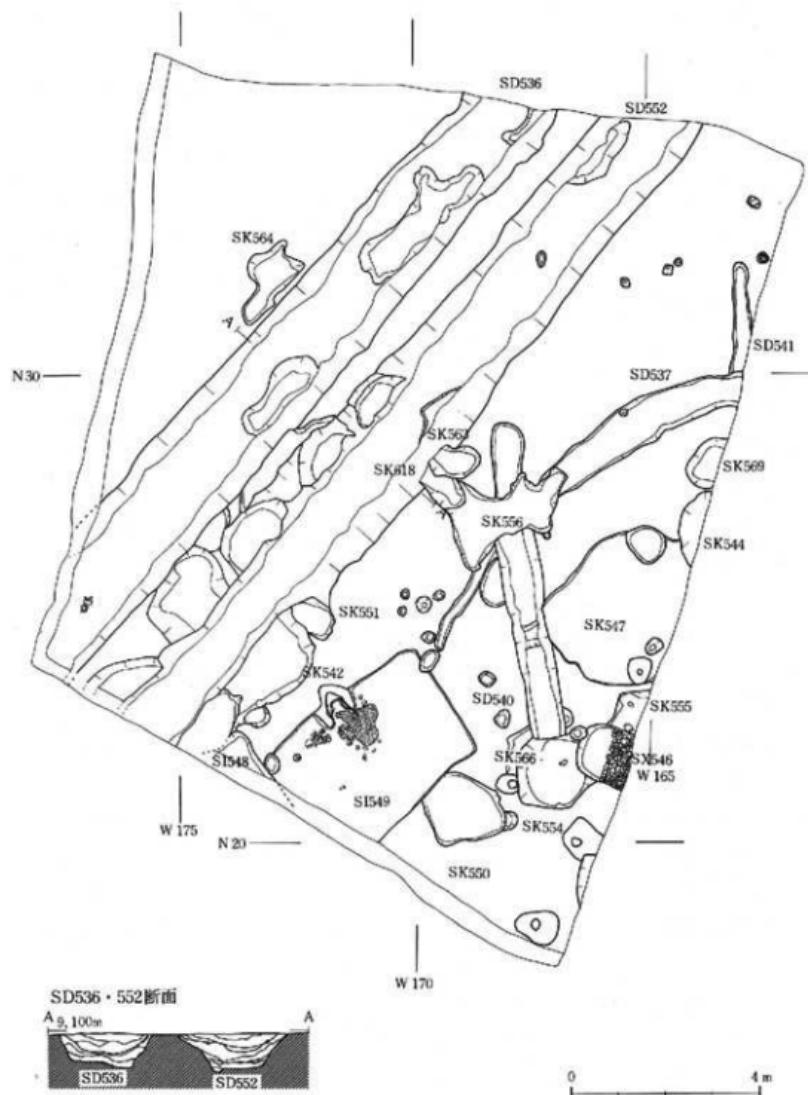
S K 508 土壙 1.9×0.4m 以上、深さ5~13cmで、平面形などの詳細は不明である。

S K 510A・B 土壙 3×2.3m、深さ90cmの楕円形(A)と3×2.3m、深さ60cmの楕円形(B)の2基の土壙が重なり合った状況を呈している。A、Bとも底面に凹凸があり、断面は逆台形を呈している。堆積土は3層に大別され、第1層は暗褐色、黄褐色シルト、褐色粘土質シルト、暗褐色シルト質粘土、第2層は黒色粘土、黒褐色シルト質粘土など、第3層は灰黃褐色粘土である。堆積土中より土師器环、甕片、須恵器甕片、鉄製品、小石などが出上している。

S K 511 土壙 1.6×1m 以上、深さ20cmで平面形は不明である。断面形は扁平な逆台形である。堆積土は暗褐色、にぶい黄褐色、灰黃褐色シルト、黒褐色粘土質シルトで、土師器环、甕片を出土している。S D 492 に切られている。

S K 512 土壙 0.7×1 m、深さ12cmの不整形、断面形は扁平U字形である。堆積土は黒褐色、にぶい黄褐色、灰黃褐色粘土質シルト、黄褐色、にぶい黄橙色シルト質粘土、にぶい黄橙色シルトで、土師器环、甕片を出土している。P 13・14に切られている。

S K 513 土壙 2.1×0.4m 以上、深さ60cmで平面形は不明である。断面形は扁平U字形であ



第12図 第44次調査区(西)平面図

る。堆積土は暗褐色、黒褐色、灰黃褐色シルトで、土師器壺、甕片を出土している。SK514・523を切っている。

SK 514 土壌 0.6×0.6m 以上、深さ40cmで、平面形などの詳細は不明である。堆積土は暗褐色、黒褐色、褐色シルト、灰黃褐色砂質シルトである。七師器甕片を出土している。SK513に切られている。

SK 516 土壌 1.2×0.8m、深さ22cmの不整方形で、底面は凹凸があり、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色シルト、褐色粘土質シルトで、土師器壺、甕片、弥生土器片、須恵器壺、蓋、甕片を出土している。SB 528を切っている。

SK 517 土壌 2×2.2m 以上、深さ20cmの不整円形、断面形はきわめて壁の立ち上りが緩いU字形である。堆積土は黒褐色、灰黃褐色、暗褐色シルト、黒褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器甕片、弥生土器片、須恵器甕片を出土している。SK 570に切られている。

SK 518 土壌 1.6m 以上×1.8m 以上、深さ40cmで平面形は不明である。堆積土は暗褐色シルトで、土師器壺、高壺、甕片、須恵器甕片、小玉石、網片石器を出土している。SK 523、SD 492に切られている。

SK 519 土壌 1×0.8m 以上、深さ10cmで平面形などの詳細は不明である。堆積土は褐色、暗褐色シルト、黒褐色、黄褐色粘土質シルトで、土師器甕片を出土している。SD 492に切られている。

SK 521 土壌 0.6×1.3m 以上、深さ55cmの長辺円形である。堆積土は黒褐色シルト、粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、砂質シルトで、土師器壺、甕片を出土している。SD 492に切られている。

SK 523 土壌 1.3×1.6m 以上、深さ30cmの不整円形で、底面には凹凸があり、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色、灰黃褐色、明黃褐色シルトである。SK 518、SB 529を切り、SK 513に切られている。

SK 525 土壌 0.65×1m、深さ10cmの不整方形である。堆積土は褐色、灰黃褐色シルト、暗褐色粘土質シルトで、土師器甕片を出土している。

SK 530 土壌 平面形、規模などは不明であるが、深さは15cmである。堆積土は灰黃褐色シルトで、土師器甕片を出土している。SD 492に切られている。

SK 531 土壌 1.1×0.75m、深さ20cmの長方形で、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色、黄褐色粘土質シルトで、土師器甕片が出土している。SB 534に切られている。

SK 535 土壌 0.6×0.7m 以上、深さ30cmの不整形で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色シルトである。

SK 539 土壌 2.6×1.9m、深さ4~20cmの不整形で、底面は凹凸がある。堆積土は黄褐色、

暗褐色シルトで、土師器壺、甕片、弥生土器片を出土している。

S K 542 土壤 4×1.1m、深さ15cmの不整横円形で、断面形は東西方向で逆台形である。堆積土は黒褐色、暗褐色粘土質シルトで、土師器壺、甕、高壺、須恵器高壺を出土している。

S K 551・S K 552 を切っている。

S K 544 土壤 2.1×0.5m以上、深さ70cm以上で、平面形などの詳細は不明である。堆積土はにぶい黄褐色、灰黄褐色、明黄褐色シルト、黒褐色粘土質シルトである。S K 547・569 を切っている。

S K 547 土壤 3.4×2.5m以上、深さ10~30cmの不整円形で、底面は凹凸がある。堆積土は暗褐色、黒褐色、にぶい黄褐色シルトで、土師器壺、高壺、甕片、須恵器壺、甕片を出土している。S K 555、P 134 を切り、S K 544 に切られている。

S K 550 土壤 1.5×1.5m以上、深さ25cmの不整方形、底面は凹凸があり、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色、にぶい黄褐色、黒褐色シルト、にぶい黄褐色砂質シルトなどで、土師器壺、甕片、須恵器甕片を出土している。S I 549 に切られている。

S K 554 土壤 1.5×1.5m、深さ40cmの不整方形で、底面より7cm上で炭化物の分布が見られる。堆積土は灰黄褐色、褐灰色、黄灰色粘土質シルトで、土師器甕、甕片、須恵器甕片、鉄滓を出土している。S K 566 を切り、S D 540、S X 546 に切られている。

S K 555 土壤 0.9m以上×0.6m以上、深さ30cmで、平面形などの詳細は不明である。堆積土は灰黄褐色、にぶい黄褐色シルトで、土師器甕を出土している。S X 546、S K 547 に切られている。

S K 556 土壤 2.6×2.4m、深さ20cmの不整形で、底面に凹凸がある。堆積土は黄灰色、暗灰黄色、にぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器甕片、須恵器甕片、弥生土器片、磨製石斧を出土している。S K 618 を切り、S D 537・550 に切られている。

S K 563 土壤 0.6×0.9m以上、深さ15cmの不整長円形で、断面形は逆台形である。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。S K 618 を切り、S D 552 を切っている。

S K 564 土壤 1.7×1m、深さ3~10cmの不整形で、断面形は扁平な逆台形で、底面には凹凸がある。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器壺、甕片を出土している。

S K 556 土壤 平面形、規模などは不明であるが、深さは10cmである。堆積土は暗褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルトである。S K 554、S D 540 に切られている。

S K 569 土壤 1.1×0.5m以上、深さ40cmで、平面形は不明である。断面形は逆台形で、堆積土は褐色シルト、黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器甕片を出土している。S K 544 に切られている。

S K 570 土壤 平面形、規模などは不明であるが、深さは40cmほどである。堆積土は黒褐色

粘土質シルト、にぶい黄褐色、にぶい黄橙色砂である。SK 517 を切っている。

S K 618 土壌 0.6×1m 以上、深さ10cmの不整長円形である。SK 556・563 に切られている。

S X 546 性格不明遺構 1.2×1.1m 以上、深さ55cmの長方形で、径3~20cmの河原石が詰まっている。上師器坏、甕片、須恵器甕片、平瓦片を出土している。

3. 出土遺物

第44次調査による出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、金属製品、土製品などである。なお、S I 526 住居跡や S D 552 溝跡からは、比較的多くの遺物が出土した。

以下、遺構ごとに出土遺物を略述する。

S I 498 住居跡 堆積上中より弥生土器片、土師器坏、甕片、カマド前面より体部中位に段を有し、口縁部まで直線的に外傾する在地系の土師器C-536 坏（第13図6）が出土している。

S I 500 住居跡 堆積上中から、土師器C-538 甕（第16図4）や坏、甕の破片が出土し、坏片には関東系のものも数点含まれる。また須恵器の甕、蓋片もわずかに出土している。

S I 520 住居跡 堆積土中から土師器坏・甕片、須恵器坏・甕片の他、弥生土器B-39蓋・B-41（第20図44）・44広口壺もしくは甕・B-42鉢、掘り方埋土より土師器坏・甕片、須恵器甕片の他、弥生土器B-40甕（第21図54）・B-43（第22図73）・B-45蓋（第19図24）・甕や鉄滓、剝片が出土している。

S I 548 住居跡 堆積上中より土師器坏、甕片の他、弥生土器B-38広口壺（第20図41）が出土し、掘り方埋土より土師器甕片、弥生土器片が出土している。

S I 549 住居跡 床面から土師器C-525 坏（第16図1）・C-534 甕、弥生土器B-46深鉢（第18図9）の他、土師器甕・坏片が出土、カマド内より土師器甕片が出土している。

S B 507 建物跡 東1北3柱穴掘り方より土師器C-515 坏（第13図8）、東3北2柱穴掘り方より関東系の特徴をもつC-544 坏（第13図7）、その他、土師器坏・甕、須恵器坏、弥生土器片やフイゴ羽口、鉄滓などが出土している。

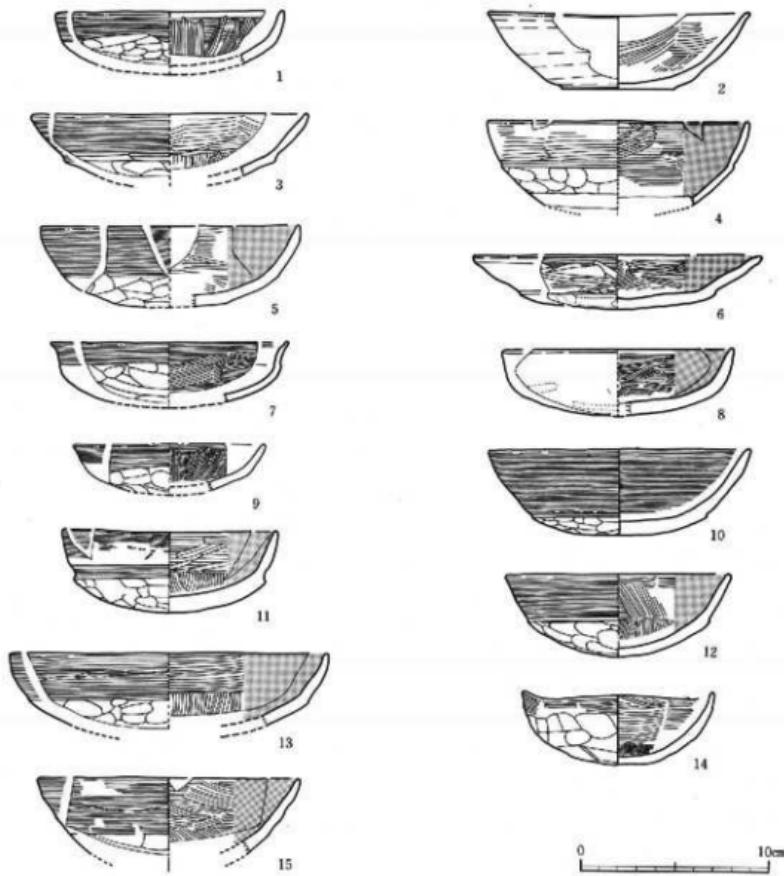
S B 526 建物跡 弥生土器B-8 甕（第21図46）や土師器坏・甕片、須恵器坏・甕片、弥生土器片、鉄滓、剝片などが出土している。

S B 527 建物跡 弥生土器B-9 鉢か蓋（第19図17）や土師器坏・甕片、須恵器坏・甕片が出土している。

S B 528 建物跡 弥生土器B-10 甕（第21図52）や土師器甕、弥生土器片が出土している。

S B 534 建物跡 上師器の坏・甕片、須恵器蓋が出土している。

S D 491 溝跡 堆積土中より弥生土器B-20 甕（第21図58）、須恵器E-237 甕（第15図8）土師器坏・甕片、須恵器坏・蓋・甕片、平瓦片が出土している。



番号	出土地名	種類	基材	出土状況	層位	外観測定			内観測定			比 例	参考 範囲
						口幅	底 基	高 度	口 縁	底 部	底 面		
1	C-546	土器	16	底盤	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	2.6cm	12.2cm	3	52-27		
2	D-1	土器	16	底盤	ロアの調査	ロアの調査	ハラカズリ	1.1cm	13.4cm	1.8cm	51(ロア調査)	54-4	
3	C-550	土器	16	底盤	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	14.8cm	2.2cm	1.8cm	57-11		
4	C-552	土器	16	底盤	ココナツの芯	ココナツの芯	ハラカズリ	14.0cm	2.2cm	1.8cm	57-14		
5	C-557	土器	16	底盤	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	13.8cm	2.2cm	1.8cm	57-15		
6	C-558	土器	16	底盤	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	2.9cm	15.4cm	3	55-10		
7	C-564	土器	16	S.B.507 E.1N2	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	ナ	ナ	ナ	52-12		
8	C-565	土器	16	S.B.508 E.1N3	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	ナ	ナ	ナ	52-11		
9	C-567	土器	16	S.D.606 E.1	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	10.3cm	10.3cm	10.3cm	58-13		
10	C-588	土器	16	S.D.607 E.1	ココナツの芯	ココナツの芯	ハラカズリ	4.5cm	14.0cm	3	56-3		
11	C-589	土器	16	S.D.608 E.1	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	4.4cm	12.0cm	3	56-2		
12	C-590	土器	16	S.D.602 E.1	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	4.5cm	12.0cm	3	56-1		
13	C-591	土器	16	S.D.603 E.1	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	17.0cm	1.8cm	1.8cm	56-4		
14	C-592	土器	16	H.S.525 無柄土	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	1.9cm	10.1cm	3	52-2		
15	C-593	土器	16	S.D.602 E.1	ココナツ	ココナツ	ハラカズリ	13.8cm	3	56-5			

第13図 第44次調査区出土遺物

S D 492 溝跡 堆積土中より内面に放射状のミガキが見られる関東系の土師器C-547 环（第13図9）の他、朱塗りの関東系环片を含む土师器环片・甕片・須恵器环・蓋・甕・壺片・陶器片・鉄滓などが出土している。

S D 499 溝跡 土師器环・甕片がわずかに出土している。

S D 536 溝跡 土師器C-535 甕（第16図2）弥生土器B-13 蓋（第19図27）B-15 鉢（第18図12）やB-14・16 鉢の他、弥生上器片を多数出土している。

S D 543 溝跡 弥生土器B-18 蓋（第20図40）・B-19高环か鉢（第19図19）その他土師器片・弥生土器片が少量出土している。

S D 552 溝跡 堆積土1層中より、関東系の土師器C-524 环（第13図10）の他、内面に漆の付着した环やC-519・522・514・523 环（第13図11・12・13・15）、C-540・539 高环（第14図7・9）、須恵器では、E-233 环（第15図6）内面に漆の付着したE-231 平瓶（第15図5）、E-229 甕（第15図11）、E-230 提瓶（第15図10）などの他、土师器环・甕・高环片・須恵器皿・环・蓋・平瓶・甕・甕片・瓦片・羽口片・剝片などが出土している。堆積土2層中より土師器C-518 高环（第14図8）の他、土师器环・甕片が出土している。また、1・2・3層中より弥生土器片が多数出土している。

またS D 503・537・541からも土师器片のみの出土である。S D 511からは須恵片、S D 524からは須恵器片・弥生土器片、S D 540からは、須恵器片・弥生上器片・剝片が出土している。

S K 495 土壙 関東系の特徴をもつ土师器环片を含む土师器环・高环・甕片や須恵器甕片が出土している。

S K 510 土壙 内面ナデ調整で口縁部が外反する土师器C-543 环（第14図6）、口縁部がほぼ直立するC-548 环（第14図2）や、口縁部に朱が付着する环片の他、土师器环・甕片・須恵器甕片・弥生土器B-31 蓋（第22図62）や土师器・注口・小玉石・鉄製品を出土している。

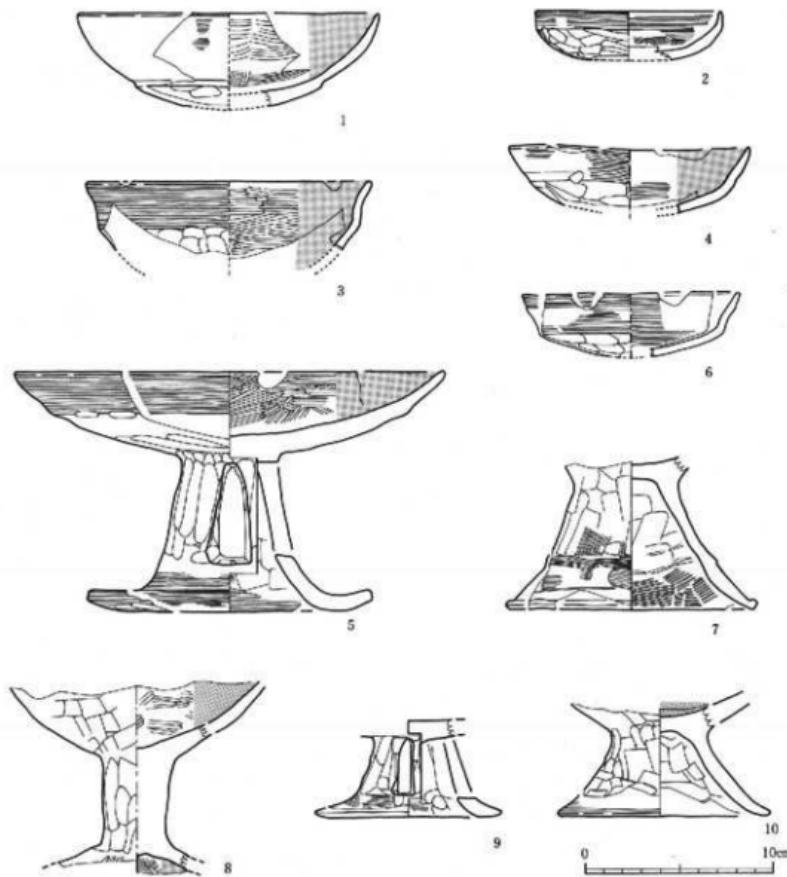
S K 516 土壙 弥生土器B-28 鉢や土师器环・甕・須恵器环・甕・蓋などの破片が出土している。

S K 517 土壙 弥生土器B-34（第22図77）・B-35 蓋・36深鉢・37鉢（第20図38・18図6・18図4）、B-58長頸甕（第18図2）の他、土师器・須恵器甕片が出土している。

S K 518 土壙 土师器C-532 高环（第14図5）の他、土师器环・高环・甕片や須恵器甕片・石器K-13スクリーパー（第23図1）が出土している。

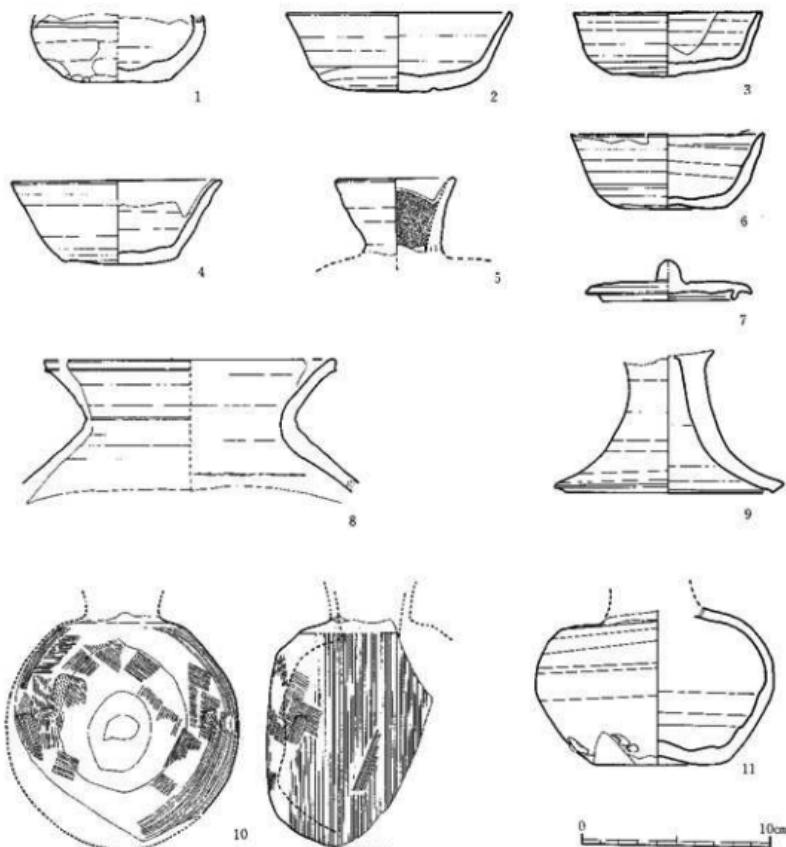
S K 523 土壙 七師器C-529 环（第13図14）が出土している。

S K 542 土壙 土师器C-531 环（第14図10）、脚部のみの須恵器E-241 高环（第15図9）の他、土师器环・甕片が出土している。



番号	登録番号	種別	形態	出土遺物	所位	外觀測量			内部測量			法星		参考
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	
1	C-528	土師器	鉢	SK504	ヨコナメ ヘラケドリ	ヘラケドリ	ハラケドリ	ハラケドリ	ヨコナメ	ナメ	ナメ	16.2cm	16	57-9
2	C-548	土師器	鉢	SK509	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ナメ	ナメ	ヨコナメ	ナメ	ナメ	10.0cm	16	57-6
3	C-539	土師器	鉢	SK507	ヨコナメ ヘラケドリ	ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	15.2cm	16	57-1
4	C-527	土師器	鉢	SK506	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	12.6cm	16	57-3
5	C-538	土師器	鉢	SK505	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	14.0cm	16	57-2
6	C-537	土師器	鉢	SK504	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	13.8cm	16	57-4
7	C-549	土師器	鉢	SK510	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	11.8cm	16	57-5
8	C-550	土師器	鉢	SK506	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	13.0cm	16	56-9
9	C-518	土師器	鉢	SD502	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	13.0cm	16	56-7
10	C-539	土師器	鉢	SD503	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	10.0cm	16	56-8
	C-531	土師器	鉢	SK540	ヨコナメ ヘラケドリ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	11.2cm	16	

第144図 第44次調査区出土遺物



番号	出土地名	種類	器形	地質	測定値			法	規	年
					高さ	幅	厚さ			
1	E-240 沿地帯	中	鉢形土器	砂岩	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	4.0cm
2	E-240 沿地帯	中	鉢形土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	3.8cm
3	E-240 沿地帯	中	S.D.47 鉢形土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	3.4cm
4	E-240 山腹部	中	P-150 土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	4.6cm
5	E-233 沿地帯	中	S.D.52 土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	4.0cm
6	E-233 沿地帯	中	S.D.52 土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	4.0cm
7	E-252 沿地帯	中	浅鉢	砂岩	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	2.1cm
8	E-252 沿地帯	中	S.D.51 土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	3.5cm
9	E-252 沿地帯	中	縦縫目	砂岩	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	3.5cm
10	E-252 沿地帯	中	縦縫目	砂岩	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	3.5cm
11	E-252 沿地帯	中	S.D.52 土器	ロクロナギ	1.5cm	12.5cm	0.5cm	ロクロナギ	ロクロナギ	3.5cm

第15図 第44次調査区出土遺物

S K 545 土壙 土師器壺片を多数、环、フイゴ羽口、鉄滓なども出土している。

S K 547 土壙 土師器C-530环(第14図3)、須恵器E-242环(第15図3)、弥生土器B-29蓋(第20図36)、B-30甕か壺の他、土師器环、高环、甕片、須恵器甕、环片が出土している。

S K 554 土壙 上師器C-527・528环(第14図4・1)の他、土師器环、甕、須恵器甕片、鉄滓が出土している。

S K 555 土壙 ほぼ完形の土師器C-537甕(第16図3)のみ出土している。

S K 556 土壙 石器K-12大型蛤刃石斧(第23図6)のみを出土している。

その他、S K 512・514・519・521・525・530・531・561・567・568・569土壙から、七師器环、甕片をS K 513では関東系の土師器环片を、S K 505・506・550では上師器、須恵器甕片を出土している。

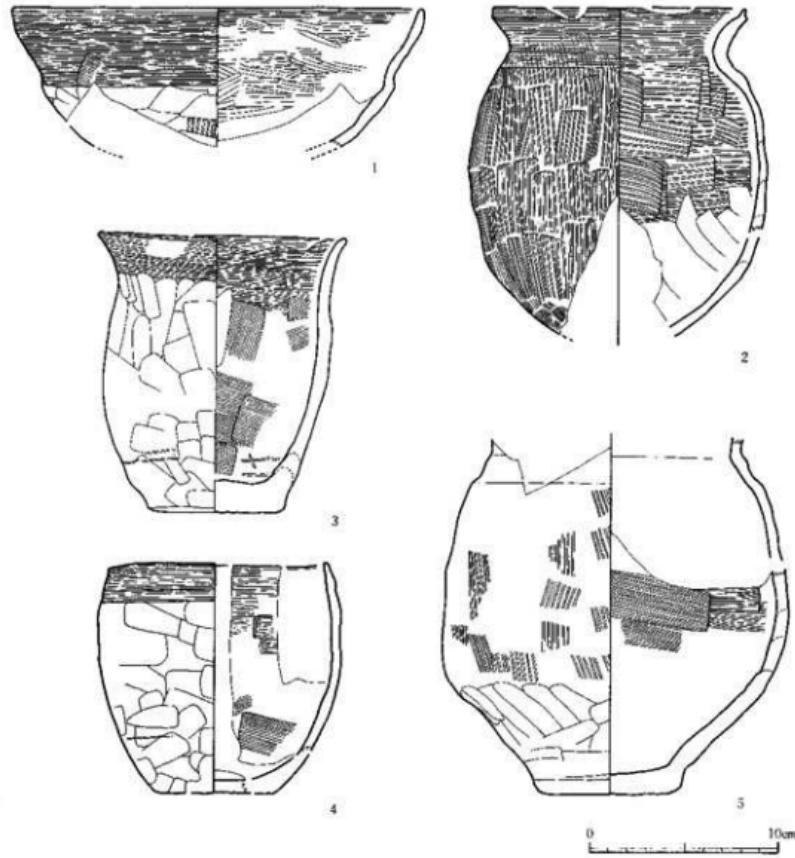
S X 546 性格不明遺構 七師器环、甕、須恵器甕、平瓦片が出土している。

その他ビット130からは、須恵器E-243环(第15図4)、土師器环、甕、弥生土器片を出土し、その他のビットからも上師器片、弥生土器片が出土している。

耕作上中からは、土師器ではロクロ成形、回転糸切り無調整の土師器D-1环(第13図2)、須恵器ではE-244环(第15図2)、E-245蓋(第15図1)や、内面にカエリのある蓋、弥生土器ではB-48高环(第19図21)、B-65鉢？(第19図16)、B-53・59深鉢(第18図8・7)、B-54蓋(第19図25)、B-95広口蓋(第18図1)、B-64甕(第22図60)、B-69深鉢(第20図42)、B-70蓋(第22図72)、B-86鉢(第20図34)、B-68・74・77・80・85甕(第22図64・第21図45・47・51・第22図61)、B-82深鉢か広口蓋(第20図43)、B-91蓋(第20図37)、B-63高环か浅鉢(第18図3)、B-106甕(第21図53)、B-100甕(第22図70)が出土し、石器ではK-15ポイント(第23図4)、K-16剥片石器(第23図2)、K-17スクレイバー(第23図5)の他、関東系の土師器片を含む七師器环、高环、甕、須恵器环、蓋、壺、甕や、平瓦、丸瓦、陶器、磁器、フイゴ羽口の破片、鉄滓などが出土している。

造構検出面からは、土師器C-520・521・567环(第13図3・4・5)、須恵器は内面にカエリのあるE-252蓋(第15図7)、B-49高环か环(第20図30)、B-52高环(第19図20)、B-61蓋(第18図5)、B-66鉢(第20図35)、B-67深鉢(第18図14)、B-87蓋(第18図13)、B-71高环(第20図31)、B-73・79・84・83甕(第21図57・48・36・第22図63)、B-72・99壺(第22図67・68)、B-97深鉢(第18図10)、B-60鉢(第20図32)、石器K-14剥片石器(第23図3)などの他、土師器环、高环、甕、須恵器环、蓋、壺、甕や、平瓦、弥生土器、陶器、磁器の破片や剥片、小玉石、鉄滓などが出土している。

また、表面採集資料として、土師器C-545环(第13図1)や弥生土器B-89壺、B-56蓋



番号	登錄番号	種類	目次	出土場所	形状	外観・構造			内面・底面			法式			様式	年代
						輪郭部	体部	底部	輪郭部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C-525	土師器	H	S 1549	平底	リニアテ 一輪テ	ハラケメ	リニアテ 一輪テ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	71.8cm	35.5cm	32.5cm	32-13	
2	C-535	土師器	堅	S D536	42	ココナツ	ハラケメ	ココナツ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	13.5cm	5cm	4.5cm	36- 5	
3	C-337	土師器	壺	K K555	板張上	リニアテ	ハラケメ	本體部	カリナテ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ 15.0cm	13.2cm	7.0cm	若形	37- 10
4	C-528	土師器	壺	S 1500	-	ココナツ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	12.3cm	6.2cm	4cm	35- 8	
5	C-529	土師器	壺	S 1549	平底	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	ハラケメ	7.7cm	3.5cm	2.5cm	35- 9	

第16図 第44次調査区出土遺物

(第19図18) の他、土師器、須恵器、弥生土器の細片がある。

弥生土器は平箱（テンバコ32）に2箱強出上している。これらは施文、施文具、部位により、以下の第I類から第V類に分類される。（第17～22図）

第I類（1～13）：一本引きの沈線により文様が構成されるもので、文様が横位に連続しないもの。これらはさらに、施文具により以下A・Bに分類される。

A（1～11）：太い沈線のもの。器種には壺（1・2）、高坏 or 浅鉢（3）、鉢（4）、蓋（5）深鉢（6・7？・8～11）がある。文様を完全に復元出来るものはないが、溝（2）、三角（3～6・8）に横位直線が組み合わさるものがある。深鉢には口縁部が外反するもの（6）、内湾するもの（8・9）があり、外面に炭化物が付着するものが多い。沈線間には充填繩文（LR, RL - 11）、擦糸文（R-1）が施こされている。

B（12・13）：細い沈線のもの。器種には壺（13）、鉢？（12）がある。13には弧の連続によつて、いわゆる描形文が描かれている。沈線間は充填繩文（LR）、擬似繩文が施こされている。

第II類（16～20）：一本引きの沈線により文様が構成されるもので、三本一組の幾何学文が横位に連続するもの（横位直線文も含む）。これらはさらに、施文具により以下のA・Bに分類される。

A（16）：太い沈線のもの。16は鉢？で、口縁部に沈線文A1が描かれ、沈線間の繩文を掠り消している（狭義の掠消繩文。以後文中の掠消繩文とは狭義を示す）。

B（17～20）：細い沈線のもの。器種には高坏（19？・20）、鉢？（17）、蓋（18）がある。文様にはA1（18）、C'1a₂（20）、D2b（17・19）がある。地文を持たないもの（19・20）、掠消繩文のもの（LR-17）、刷目（or ヘラナデ）を地文とし、沈線間を磨り消し、掠消繩文と同様の効果を作り出すもの（18）がある。

第III類（14・15・21～44）：一本引きの沈線により文様が構成されるもので、二本一組の幾何学文が横位に連続するもの（横位直線文も含む）。これらはさらに地文の有無、沈線間の施文方法により以下のA～Dに分類される。鋭利な施文具による沈線が一般的で、I B・II B類の沈線に類似する。

A（21～23）：磨消繩文にするもの。器種には高坏（21）、蓋（22）、壺（23）がある。文様にはA'1（21-口縁部内面）、A2（22）、C1a₂（21）、D2b₂（23-外面口縁部と体部）がある。地文は斜行繩文LRである。

B（24～41）：充填繩文にするもの。器種には壺（24～29・41）、高坏（30・31）、鉢（32～35）、蓋（36～40）がある。文様にはA1（30-口縁部内面・35）、B1a₂ or 2a₂（26）、B2b₁（28・29？）、C2a（32）、C'2a（30）（他に31・37・40が沈線文Cに含まれる）、D2b₁（34・39？）、D2a₂（33）、（他に38が沈線文Dに含まれる）、E1（24）がある。充填される繩文は、LR・RL（31・35）の斜行繩文の他、付加条繩文（38）、擬似繩文（24～28・30・32・36・39・41）がある。尚、斜行繩文のものは、外

沿沈線に沿って連続刺突が加えられる例(29)がある。

C (14・15)：地文上に文様を描くもの。器種が明確に判るものには、口縁部内凹した深鉢(15)がある。14は口縁部が外反する器形を呈するが、器種は不明である。ただし、外面の炭化物の付着と内面の調整より、深鉢or壺の可能性がある。文様にはB2 b₁? (14)、C1a₁ (15)が認められる。地文にはR Lの斜行繩文(14)、擬似繩文(15)がある。

D (42~44)：無文上に文様を描くもの。これらは全て、外傾する口縁がやや内弯する器形で、壺or広口壺のいずれかと考える。文様は全て口縁部文様であるが、内外面とも沈線文Aが施文されている。(A 1-外面44・内面42、A 2-外面42・43)

第IV類 (45~66)：地文のみのもの。器種は全て壺である。ほとんどが外面に炭化物を付着している。これらは地文区画文の有無により以下のA・Bに分類される。

A (45~64)：口縁部と体部の境、あるいは体部上端に地文区画文を持つもの。これらはさらに施文の種類により、a・b・cに分類される。

a：押し引き連続刺突 (45~53)。これらは押し引き刺突面が長く尾を引くもの-a₁(45~50)、尾を引かないもの-a₂(51~53)に分れる。b：斜位連続刺突 (54~63)。いわゆる列点刺突である。刺突の方向により、右から左への刺突-b₁(55~61)、左から右への刺突-b₂(54・62・63)に分れる。C (44)：横位沈線。64では二条横位沈線が引かれている。

以上A類の口縁部は、強く外反するものが多いが、48・52~54のように弱く外反する例もある。口唇部のほとんどは地文と同様な施文が加えられている。体部地文にはL (49)、LR、RL (45・56)の斜行繩文の他、擬似繩文(51・57・62・64)がある。遺存状態が良好であった為、調整・施文行程が明確であった。観察結果では口縁部内外面横ナデ→体部地文→地文区画文→内外面ミガキ（内面は全て。外面は地文区画文上の体部と体部下端。口縁部の横ナデが粗雑な場合は口縁部まで。）という行程が認められた。

B (65・66)：体部上端に地文区画文を持たないもの。これは口縁部形態でa・bに分類される。

a：口縁部が内弯するもの(66)。b：口縁部が外反するもの(65)。Aと同様な器形を呈する。

第V類：その他のもの。破片資料の為に、IV類までのいずれに所属するか不明なもの、あるいはそれ以外のものを第V類とした。これらは部位により以下のA~Dに分類される。

A (67~72)：口縁部資料。これらはa：口縁部に地文をもつもの(67~70)とb：無文のもの(71・72)に別れる。器種には壺(67・68?・71・72)、蓋(69・70)がある。壺には72のように口縁部下端に突帯が一条めぐるものがある。

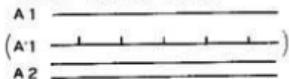
B (73~76)：体部資料。斜行繩文(L、LR、RL)、付加条繩文(第一種、73・74)、擬似条文(75)、擬似繩文、条痕文(76)のものが認められる。

C (75)：底部資料。底部外面には無文(研磨)、木葉痕(75)、網代痕のものが認められる。

D (77)：脚部資料。77は横走L R縦文が施文されている。二次加熱を受けており、高杯の脚としての可能性は薄い。

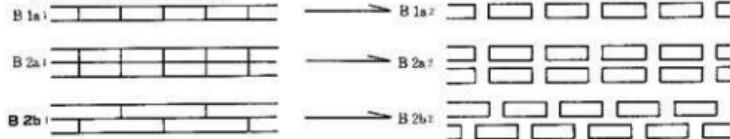
以上I類から第V類の内、第IB、II B、III A・B、IV b類は従来の概形圓式の範囲に入るものである。しかし、第IA、II A、III C、IV Ba、VA b(71)・B(76)類は、従来の樹形圓式よりは前形成の様相を示し、第III D類は後続形式の様相を示す。しかしこれらの土器群が直徑約20mの範囲よりまとまって出土したことを考慮すれば、一時期の所産一樹形圓期の古い段階の可能性は十分有り得る。しかしこの資料は、全資料を通したものではなく、抽出資料によるものである。この問題は後日の本報告に委ねたい。今後整理が進むにつれて、資料中には完形に近い形に復元されるもの、今回の分類内に収まらないものや補足されるものも当然出てくると考えられる。抽出文様A～E内の想定文様中にも、今後当資料中に同一文様が見い出せる可能性もあり、また増加することも考えられる。

沈線文A (横位直線→縱位直線)

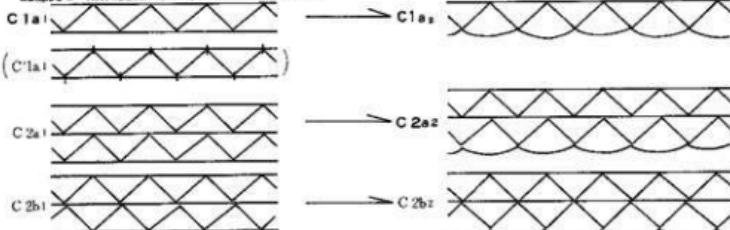


これら文様は第II、III類を中心として抽出した文様である。二本引き、三本引きのものも一条の文様として表現した。補助線的な役割を演ずる縱位直線は省いた。縱位直線が加わったものは「文様」とした。尚、太字の文様は当資料中に存在するもの。細字の文様は想定文様である。

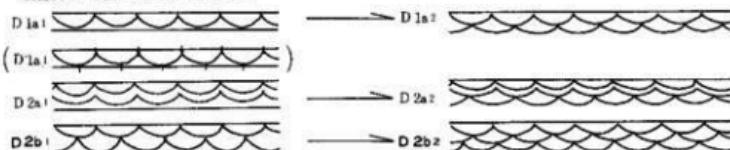
沈線文B (横位直線→縱位直線)



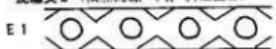
沈線文C (横位直線→弧→斜位直線→縱位直線)



沈線文D (横位直線→弧→縱位直線)

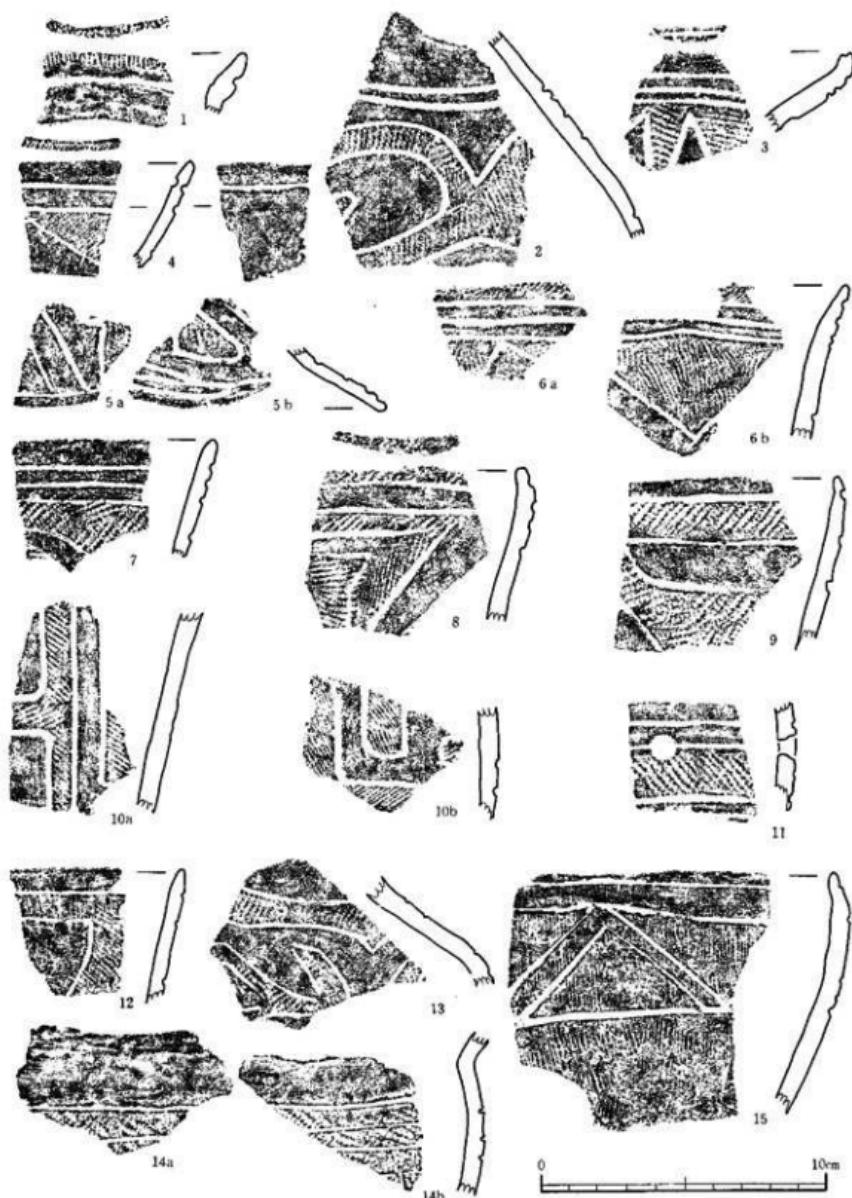


沈線文E (横位直線・円・斜位直線)

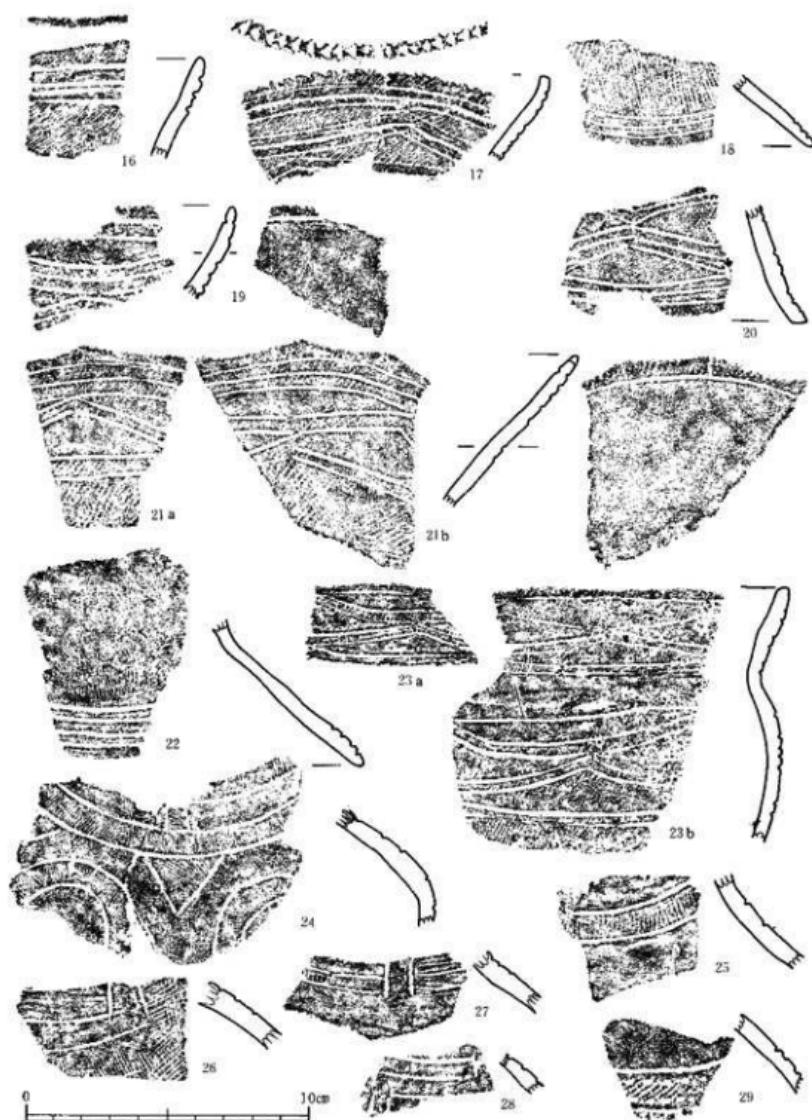


これらは前形式の文様を踏襲し、後続形式へと連続される文様もある。今後、この時期のものにおいて、補填及び修正される文様はより多く存在するものと思われる。

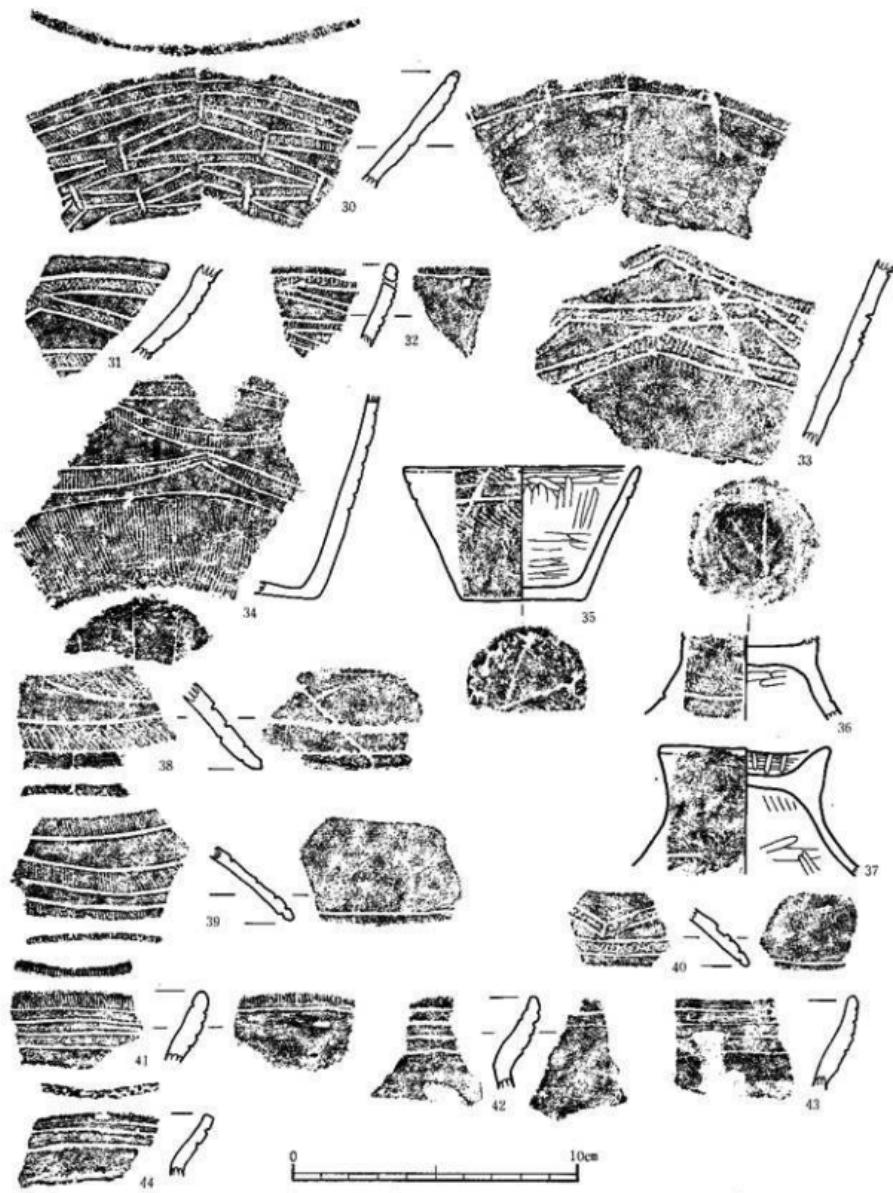
第17図 第44次調査出土弥生土器抽出文様模式図



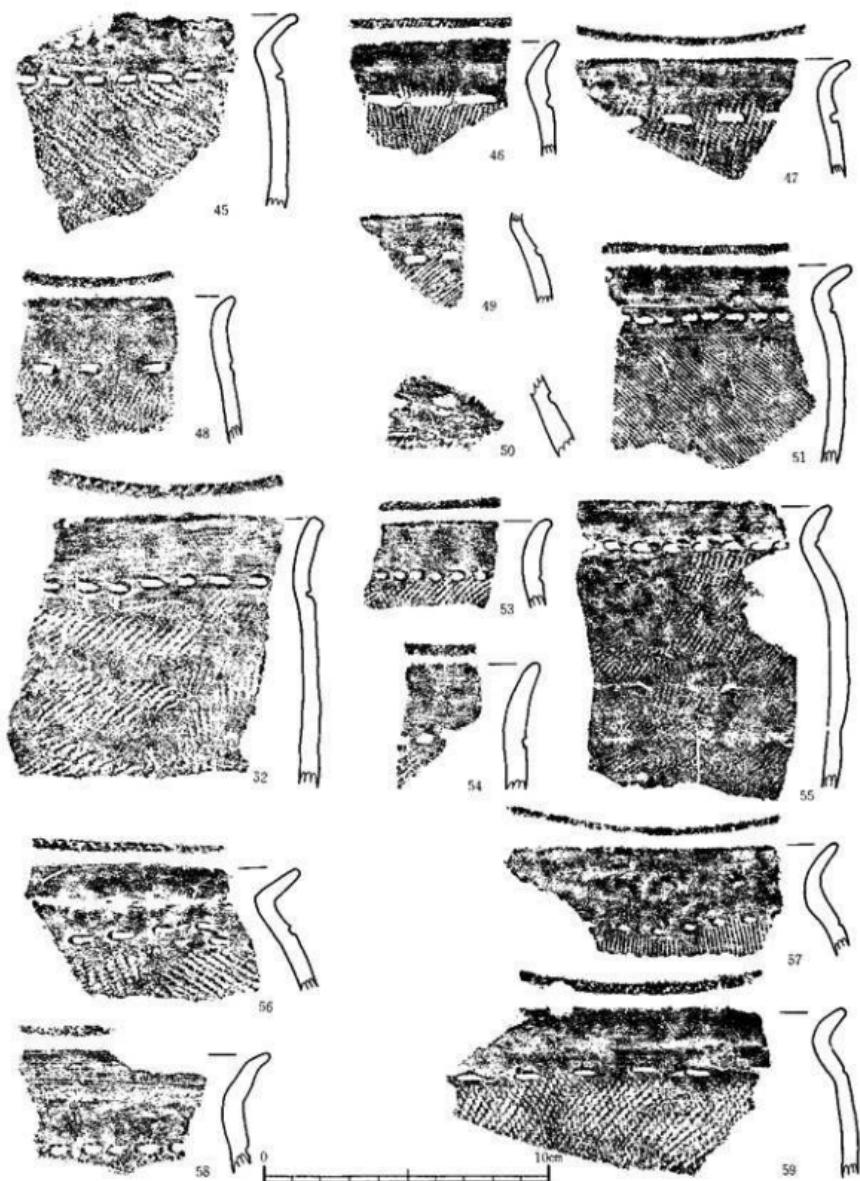
第18図 第44次調査区出土生土器拓影



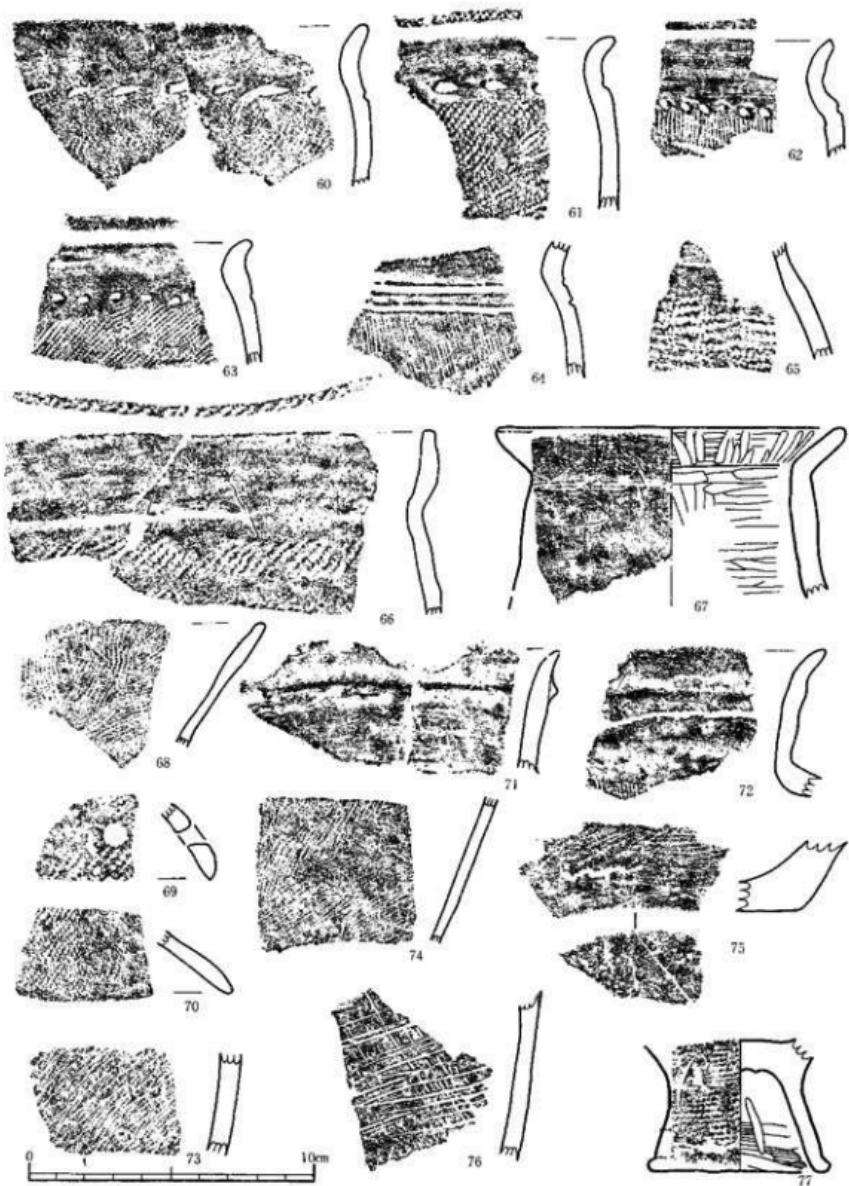
第19圖 第44次調查區出土新石器拓影



第20図 第44次調査区出土弥生土器拓影



第21図 第44次調査区出土赤生土器拓影

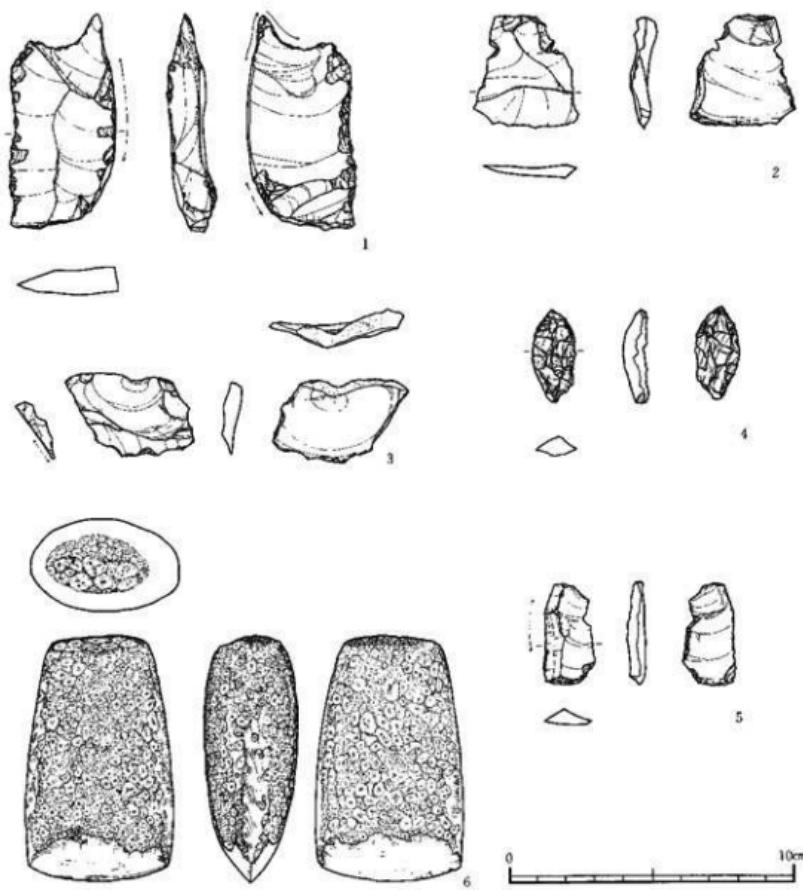


第22图 第44次调查区出土弦纹土器拓影

弥生土器観察表

番号	測定No.	出土地名	層位	断面	基	形	文	理	型	分類	備考
1	B-95	耕作土	—	出土物	口縁	直筒	施文無地	施文ナメ(施文無地直筒)→施文(直筒)	施ナメ(施文直筒)	IA	—
2	B-95	SK517	埋蔵物	長圓筒	筒下部~底	—	施文文(施文直筒)	施文ナメ(施文直筒)	施ナメ(施文直筒)	IA	施文直筒無手柄。
3	B-93	耕作土	—	器	器	口縁	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	施文直筒无手柄。
4	B-97	SK517	—	器	筒上部~中	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	施文直筒无手柄。
5	B-81	遺構	—	器	筒	口縁	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	施文直筒无手柄。
6	B-36	SK517	—	器	筒	口縁	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	施文直筒无手柄。
7	B-29	耕作土	—	筒状?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	内面施文付。
8	B-33	耕作土	—	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	施文直筒無手柄。
9	B-46	S1549	未	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	内面施文付。
10	B-97	遺構	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	施文直筒。
11	B-71	SD526	—	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	内面施文付。
12	B-13	SD526	—	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IA	内面施文付。
13	B-87	遺構	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IB	内面施文無手柄。
14	B-67	遺構	—	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IC	施文直筒多条。
15	B-24	SD526	—	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IC	内面施文付。
16	B-55	耕作土	—	筒狀?	筒上部~中	横裂口	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	ID	施文直筒。
17	B-9	SK517	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	ID	口縫部の内面施文。
18	B-56	遺構	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	ID	口縫部の内面施文。
19	B-19	SD548	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	ID	内面施文付。
20	B-32	遺構	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	ID	—
21	B-48	耕作土	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIA	内面施文付。
22	B-33	SK517	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIA	内面施文付。
23	B-22	SD526	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIA	内面施文付。
24	B-45	S1529	未	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIA	内面施文付。
25	B-34	耕作土	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	—
26	B-96	SK547	2号室	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	—
27	B-15	SD526	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	—
28	B-27	SD552	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	—
29	B-112	SD526	E1	筒	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	施文直筒無手柄。
30	B-49	遺構	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	施文直筒。
31	B-71	遺構	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	施文直筒。
32	B-00	遺構	—	筒狀?	筒	口縫~中	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	施文直筒。
33	B-32	SK506	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	施文直筒。
34	B-06	耕作土	—	筒狀?	筒	—	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	施文直筒。
35	B-66	遺構	—	筒狀?	筒	口縫~中	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	内面施文付。
36	B-29	SK547	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	内面施文付。
37	B-97	耕作土	—	筒狀?	筒	口縫	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	内面施文付。
38	B-35	SK517	—	筒狀?	筒	口縫~中	施文(直筒)	施文(直筒)	施文(直筒)	IIB	内面施文付。

番号	物語名	出土地名	層	鉢	器種	形	陶			分類	備考	
							外	内	面			
39	B-23	S D552	—	蓋	口縁~鋸	輪底孔縫文	浅腹文△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣB	外側表面凹。	
40	B-18	S D543	—	蓋	口縁~鋸	輪底孔縫文	浅腹文△±L±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣB	外側表面凹。	
41	B-38	S 1548	—	広口壺	口縁~鋸	輪底孔縫文	浅腹文△±L±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣB	外側表面凹。	
42	B-09	耕作土	—	壺	口縁~底上半	三足	浅腹文△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣD	—	
43	B-82	耕作土	—	壺	口縁~底上半	三足	浅腹文△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣD	外側表面凹。	
44	B-41	S 1520	—	壺	口縁~底上半	三足	浅腹文△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣD	外側表面凹。	
45	B-74	耕作土	—	壺	口縁~底上半	三足	浅腹文△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
46	B-8	S B526	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
47	B-77	底上	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
48	B-79	底	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
49	B-03	S D450 N2	生土	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。
50	B-103	S D552 #1	壺	底上半	—	—	横手△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
51	B-40	耕作土	—	壺	口縁~底上半	輪底孔縫文	口縁~底上半	輪底孔縫文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
52	B-10	S B528	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
53	B-106	耕作土	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
54	B-40	S 1520	耕作土	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	ⅣAa	外側表面凹。	
55	B-78	底	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
56	B-64	底	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
57	B-73	底	—	壺	口縁~底上半	輪底孔縫文	口縁~底上半	輪底孔縫文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
58	B-20	S D450	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
59	B-11	S D65	底上	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。
60	B-64	耕作土	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
61	B-85	耕作土	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
62	B-31	S K510	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
63	B-83	底	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
64	B-66	耕作土	—	壺	口縁~底上半	—	—	—	—	ⅣAa	外側表面凹。	
65	B-105	S K564	—	壺	底上半	—	横手△±D±1	脚部周文	輪底孔+足	ⅣB	—	
66	B-12	S D452	底	—	壺	口縁~底上半	操作工具痕文	口縁~底上半	操作工具痕文	ⅣB	輪底孔+足。	
67	B-72	底	—	壺	口縁~底	輪底孔	口縁~底	輪底孔	輪底孔+足	ⅣAa	大型圓底+足是斜	
68	B-99	底	—	壺	口縁~底	輪底孔縫文	口縁~底	輪底孔縫文	輪底孔+足	ⅣAa	—	
69	B-21	S D552	—	蓋	口縁~底	操作工具痕文	口縁~底	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
70	B-100	耕作土	—	壺	口縁~底	操作工具痕文	口縁~底	操作工具痕文	輪底孔+足	ⅣAa	外側表面凹。	
71	B-104	S 1548	耕作土	—	壺	口縁~底	—	—	—	ⅣAa	外側表面凹。	
72	B-70	耕作土	—	壺	口縁~底上半	輪底孔	—	—	—	ⅣAa	外側表面凹。	
73	B-43	S 1520	輪底	不規	壺	—	操作工具痕文(第1種)	—	輪底孔+足	ⅣB	—	
74	B-110	S 1520	—	蓋	口縁~底	操作工具痕文(第1種)	—	操作工具痕文(第1種)	輪底孔+足	ⅣB	外側表面凹。	
75	B-11	S D452	底	蓋?	口縁~底	操作工具痕文(第1種)	—	操作工具痕文(第1種)	輪底孔+足	ⅣC	—	
76	B-107	S K569	—	蓋?	口縁~底	操作工具痕文(第1種)	—	操作工具痕文(第1種)	輪底孔+足	ⅣB	—	
77	B-34	S K512	—	不規	底下盤	—	操作工具痕文	操作工具痕文	操作工具痕文	ⅣD	輪底孔+足是斜。	



番号	資料番号	器種	出土遺構	層位	技 法	幅	深さ	石材	写真回数
1	K-13	スクレイバー	S KS18	地盤上	7.7cm	3.6cm	1.3cm	真紅	61- 9
2	K-16	刮片石器		耕作土	3.9cm	3.5cm	0.7cm	真紅	61-13
3	K-14	刮片石器		真 紅	3.0cm	4.5cm	0.6cm	真紅	61-12
4	K-15	オイント		耕作土	3.3cm	1.6cm	0.8cm	白雲	61-10
5	K-17	スクレイバー		耕作土	3.6cm	1.8cm	0.6cm		61-11
6	K-12	大型給刃石斧	S K446	E Z	8.7cm	5.2cm	2.3cm		57-13

第23図 第44次調査区出土石器

4. ま と め

発見された遺構は掘立柱建物跡 5 棟、竪穴住居跡 6 軒、竪穴遺構 1 基、溝跡 14 条、土壙 40 基、性格不明遺構 1 基、小柱穴・ピット約 130 などである。本調査区からはⅡ期官衙の政府に係る遺構の検出を目指していたが、それらの遺構は検出されなかった。発見された遺構のうち官衙に伴うと考えられるものは、基準方向が N-33°-E 前後振れたものがほとんどである。このようなⅠ期官衙の遺構を整理すると、

掘立柱建物跡 S B 507 (N-31°-E) , S B 527 (N-35°-E) , S B 528 (N-32°-E)
- E) , S B 534 (N-36°-E)
竪穴住居跡 S I 520 (N-35°-E) , S I 549 (N-36°-E)
溝 跡 S D 536 (N-34°-E) , S D 552 (N-33°-E)

となり、N-31°-36°-E の範囲内におさまる。これは、第24次、第35次調査で検出したⅠ期官衙の遺構群 N-30°-34°-E と比較すると、角度の振れかたがやや大きいようである。また掘立柱建物跡に関しては S B 507 を除いて、柱掘り方の規模が小さいという違いが見られる。

直接的な遺構間の重複関係を見ると、S D 552 → S D 536 が観察されるのみであるが、S B 507 、S B 534 、S B 528 などが同時に建っていたとは考え難く、新旧関係があると考えられる。また S B 507 と S I 520 は、ほぼ同方向で並行し、床面積も近似している。このような関係は、第35次調査で検出した S B 432 A・B と S I 443 の様相に類似するものである。S I 443 のあり方は、方向、床面積の点で S B 432 A・B とはほぼ同じであること、並立する掘立柱建物群の柱列方向にそって建てられているなど、官衙内の建物群を構成する 1 つであった。S I 520 も同様の可能性がある。

竪穴住居跡については S I 520 と S I 549 を方向性からⅠ期官衙の遺構と考えたが、他の住居跡についても検討しておきたい。S I 500・548・565 については、遺存状況が悪く方向性や出土遺物についての検討を加えることが、はなはだ困難である。ただ S I 498 に関しては、床面上より出土した土師器坏が、体部中位に段を有し口縁部まで直線的に外傾する在地系のものである。現状では、Ⅰ期官衙の出土と比較して、時期的な差異を指摘できるものではない。住居跡の方向性から検討すれば、第24次、第35次調査の成果から見た遺構の変遷にあてはめると、第2段階に入れてさしつかえないものである。ここでは住居跡がⅠ期官衙の營まれた段階、もしくはその前の段階のもののいずれかであろうが、判断することは難しい。

溝跡については、S D 536 と S D 552 が方向性や出土遺物からⅠ期官衙に伴う区画施設と考えられるが、両溝跡とも延長線上の第4次調査から検出されないことから、途中で屈曲するか、消滅していると考えられる。土壙については不明なものが多いが、S K 497 は底面に凹凸があり壁が直立するもので、堆積上も互層となり、方向は N-32°-E である。このような状況は、

第24次調査区 S K 280 と第35次調査区の S B 279 西側の上層と、形態的にも類似するもので、掘立柱建物跡とともに同時に存在する可能性がある。ここでは全体の規模や、周辺に掘立柱建物跡の存在など不明な点が多いため、その可能性を指摘するにとどめておく。

Ⅱ期官衙の遺構について、S B 526 (N-3-E) の一部を検出したのみで、当初予想された政庁の区画施設などは検出されなかつた。

出土した遺物については、これまでの調査区と比較すると復元可能なものがきわめて少い。まとまって遺物の出土した遺構は、S I 549、S D 552 などである。S D 552 から出土した遺物は、土師器壺・高杯の他、須恵器の長頸壺・平瓶など特異なものを含み、一般集落のものとは違った遺物と言えよう。

官衙に伴うと考えられる遺構、遺物については以上であるが、他に遺構検出時、各遺構の堆積土中より弥生土器片を出土していることについて述べておく。これまでの調査では、第13次調査区から天王山式期のものと考えられるものが少量出土していたが、本調査区のように多量ではなかった。土層観察等の結果、基本層位IV層灰色シルト質砂が、弥生土器の包含層となつており、各遺構の堆積土と埋土に混入したものと考えられる。S I 520 付近から西はIV層が遺構検出面となっているため、遺構検出時においても出土したのである。弥生土器の時期について細片のものもあるが樹形團式のものが半体を占めているようである。

V 第45次発掘調査

第45次調査区は推定方四町Ⅱ期官衙とⅡ期併行寺院跡との中間に位置し、官衙南北中軸線の南延長線上にあたる。

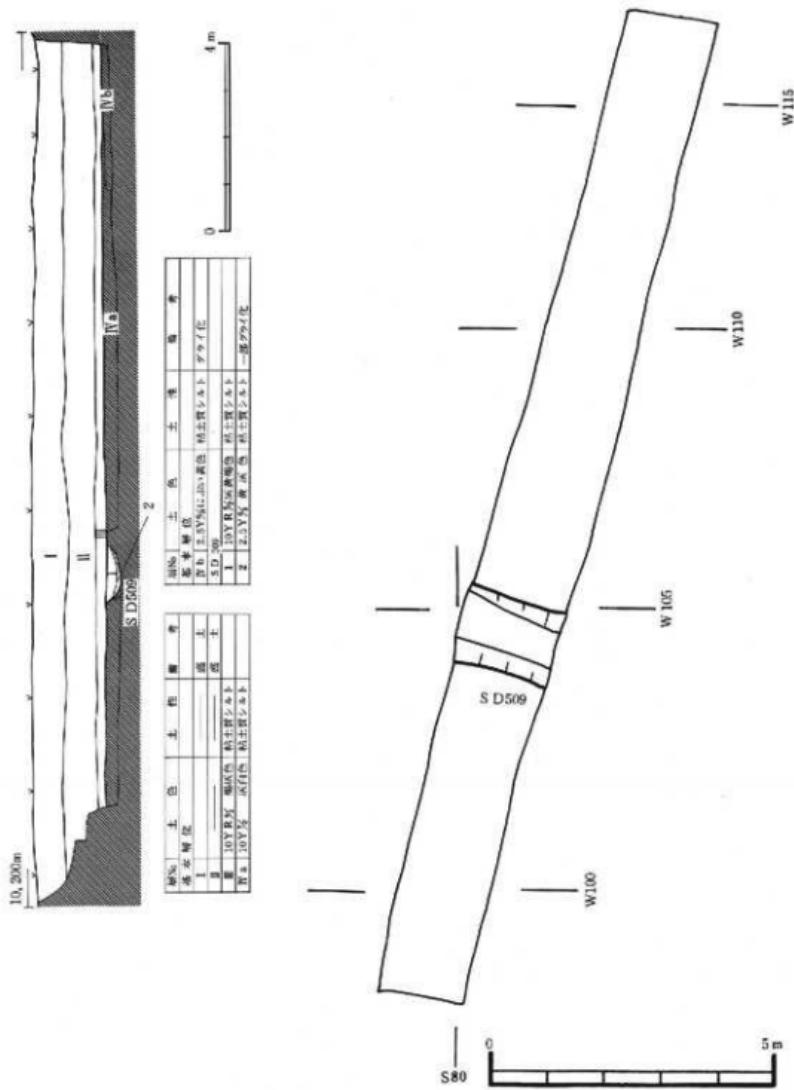
仙台市高松3丁目13-29遠藤敏夫・辰子氏より郡山五丁目42-3、43-7において住宅建築のため、昭和59年5月29日付けで発掘届が提出されたことから、昭和59年6月、敷地内の造構確認調査を実施した。

敷地の南側に東西幅2m、南北長18.5mのトレンチを設定し、盛土してあることが確認されたことから、重機を使用して盛土・表土を排除した。盛土は2回にわたって行なわれており、厚さ1.5m程に及んでいた。この盛土下層に旧水田耕作土層、水田床土層があり、標高8,400mの灰白色粘土質シルト層上面で精査を行い、南北方向に延びるSD 509溝跡を1条検出した。

SD 509溝跡は上幅130cm、下幅60~80cm、深さ30cmで横断面積形は逆台形を呈す。堆積土は大別すれば2層にわけられ、1層は灰褐色粘土質シルト、2層は黄灰色粘土質シルトである。堆積土中より土師器破片が少量出土している。方向はおおむね南北方向であるが、検出部分がわずかであるため、詳細は不明であり、造構の年代も明らかでない。



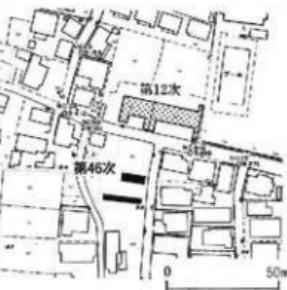
第24図 第45次調査区位置図



VI 第46次発掘調査

1. 調査経過

仙台市荒町175、佐藤みよ子氏より都山五丁目148-10において、貸家新築のため、昭和59年6月30日付けで発掘届が提出されたので、敷地内の遺構確認調査を実施した。調査区は、推定方二町寺城のほぼ中央で、第12次調査で発見した寺院の基壇跡の南前面20mの地点である。敷地の北側に3×10mのAトレンチ、南側に2×17mのBトレンチと、東西方向の2本のトレンチを設定し、重機を用いて表土と耕作土を排除した。トレンチ東側ではIV層明黄褐色シルト（地山）上面で、西側ではV層灰オリーブ色シルト質砂（地山）上面で遺構検出を行い、溝跡、墓壙、土壤、ピットを検出した。



第26図 第46次調査区位置図

2. 発見遺構

今回の調査で発見された遺構は、Aトレンチでは溝跡1条、ピット18、Bトレンチでは溝跡2条、墓壙1基、土壤6基、ピット11である。

S D 532 溝跡 幅1.4~1.6m、深さ50~90cm程の真東西方向に延びる溝である。断面形は下半部で直立気味に立ち上がり、上半部で緩やかに広がる。堆積土は大別して3層に分けられ、上層は暗褐色シルトで瓦を多量に含む。中層は黒褐色シルト、下層は暗褐色砂質シルトでグラウイ化している。調査区西側の検出面及び堆積土中からは多量の瓦が出土した。

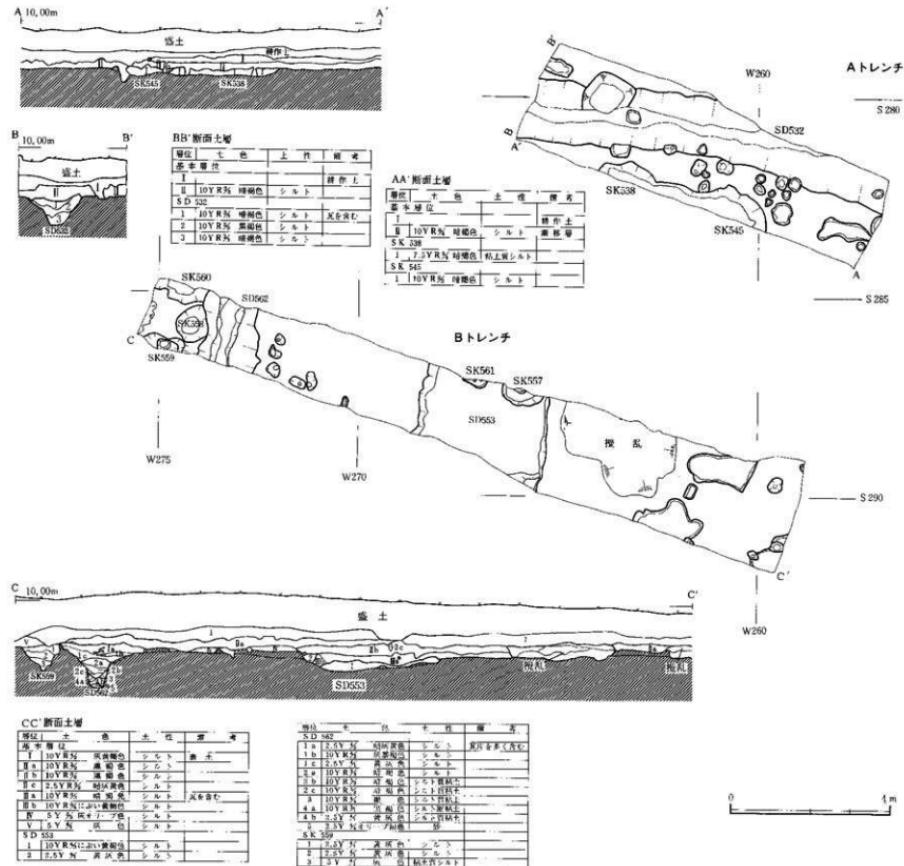
S D 553 溝跡 幅3.1~3.4m、深さ10~30cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、堆積土は単層でにぶい黄褐色シルトである。南北方向に延びるが、S D 532 溝跡までは延びない。

S D 562 溝跡 幅1.3~2.1m、深さ70~110cm程で、断面形は下半部で直立気味に立ち上がり、上半部で緩やかに広がる。堆積土は4層に分けられ、1層は黄灰色系シルトで瓦を多量に含む。2層は暗褐色シルト質粘土、3層は黄灰色シルト質粘土、4層はオリーブ褐色砂である。S K 558 墓壙に切られる。検出面および、この溝跡付近から大量の瓦が出土した。

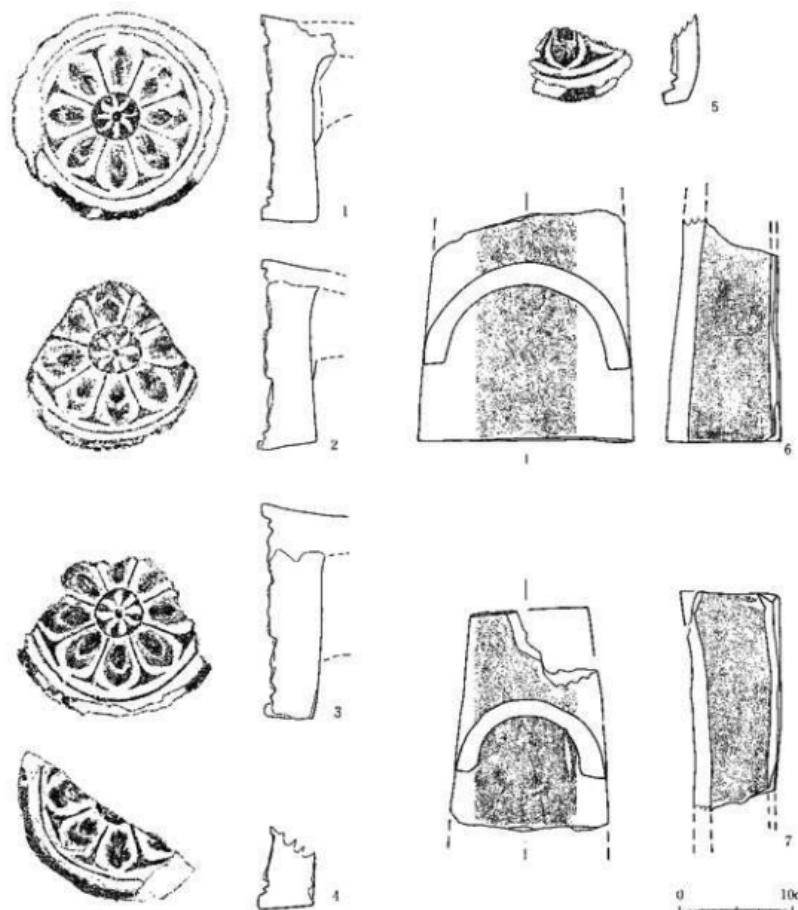
S K 558 墓壙 長径100cm、短径90cm、平面形は橢円形を呈する。深さは40cm程で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はリン分を含み、青白く螢光する。S D 562 溝跡を切っている。

S K 538 土壙 Aトレンチ南辺にかかる検出したが、全形・規模は不明である。深さは25cm程である。S K 545 土壙に切られる。

S K 545 土壙 Aトレンチ南辺にかかる検出したが、全形・規模は不明である。深さは30cm程である。S K 538 土壙を切っている。



第27図 第46次調査区平面図・土層断面図



番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器形	特徴		写真 図版
						凸面	凹面	
1	F-34	S D562	瓦	肝九瓦				58-6
2	F-33	S D563	瓦	肝九瓦				59-7
3	F-32	S D562	瓦	肝九瓦				58-8
4	F-31	S D562	瓦	肝九瓦				59-8
5	F-42	耕作土	瓦	肝九瓦				
6	F-30	直 線	瓦	神印き目、ナリ	瓦面、粘土板合せ目			59-5
7	F-29	耕作土	瓦	瓦	神印き目、ナリ	瓦面、手切り版		58-9

第28図 第46次調査区出土遺物

S K 557 土壙 Bトレンチ北辺にかかって検出したが、全形・規模は不明である。深さは80cmで、底面は平坦で、中央に円形と思われる底板が數いてある。トレンチ壁面の観察では、断面形はU字形を呈している。掘り方堆土は黒褐色シルトないしは褐灰色シルト質粘土で、ブロック状に堆積しており、瓦を出土する。底板の上の何らかの施設を置いたと考えられる部分の堆積土は、黒褐色シルトないしは黄灰色粘土質シルトで、水平に堆積している。S D 553溝跡を切っている。

S K 559 土壙 Bトレンチ南辺にかかって検出したが、全形・規模は不明である。深さは65cm程で、壁は急な立ち上がりを呈す。堆積土は大別して2層に分けられ、上層は黄灰色シルト、下層は灰色粘土質シルトである。瓦を出土する。

S K 560 土壙 Bトレンチ北辺にかかって検出したが、全形・規模は不明である。深さは45～55cmである。瓦を出土する。

S K 561 土壙 Bトレンチ北辺にかかって検出したが、全形・規模は不明である。深さは105cm、底面は平坦で、板材が數かれている。トレンチ壁面での観察では、壁は下半部で直立して立ち上がり、上半部で外側に広がる。堆積土は上層で黒褐色ないしは黄褐色シルト、または灰オリーブ色粘土質シルトで骨片を含み、下層は褐灰色シルトである。瓦を出土する。

3. 出土遺物

出土した遺物には、土師器壺・高壺・甕、須恵器蓋・壺・高台付壺・皿・長頸壺・甕、瓦、鶴尾、古錢等である。

以下、造構ごとに出土遺物を略述する。

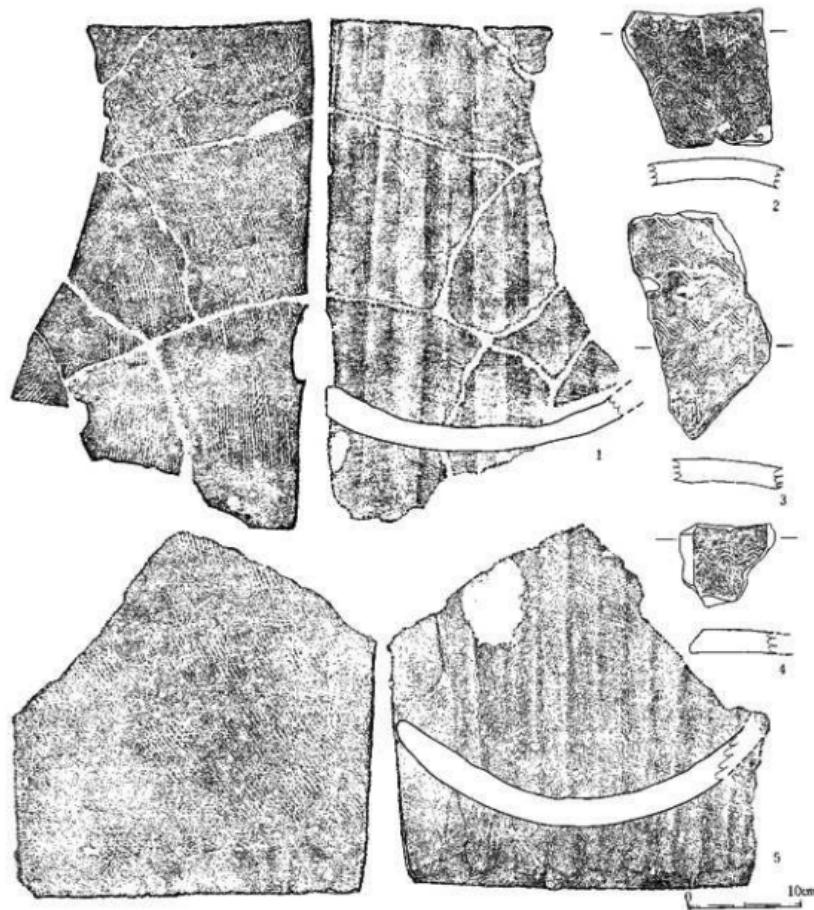
S D 532 溝跡 検出面でF-30丸瓦（第28図6）は、粘土板巻作りの二分割によるもので、焼き垂みがある。G-23平瓦（第29図5）は、凹面は布目痕が残り、周縁はヘラケズりされ、凸面は綱目痕がナデ消されている。H-9鶴尾は、胴部の破片で、内面の一部に格子状叩き目が残る。

堆積土からは、多量の瓦、土師器壺・高壺・甕、須恵器長頸壺・甕などが出土した。

S D 553 溝跡 土師器壺・甕、須恵器壺、瓦を出土した。

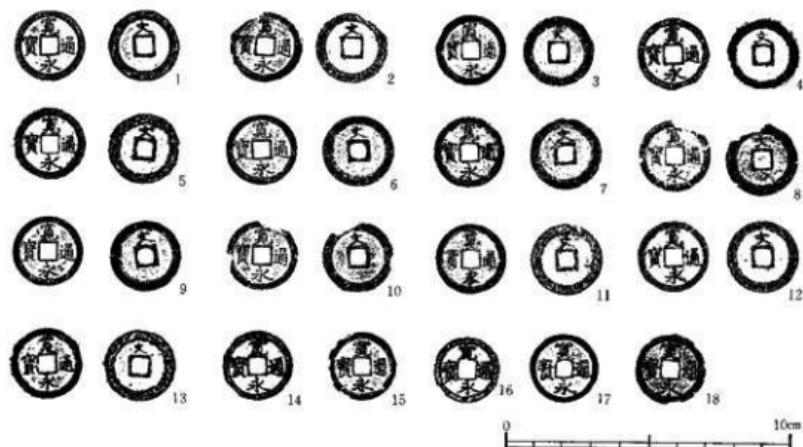
S D 562 溝跡 堆積土1層から出土したF-32軒丸瓦（第28図3）は、周縁部欠損ではあるが、径4.6cm、5(1+4)個の蓮子をもつ中房を中心、8弁の花弁を配し、弁端は少し尖り気味である。F-31・33軒丸瓦（第28図4・2）も同様の瓦当文様である。G-24平瓦（第29図1）は、凹面に布目痕・横骨痕がみられ、凸面の綱目痕は一部ナデ消されている。G-26・27平瓦（第29図4・2）は、平瓦の破片で、凸面に4または5条の櫛描き波状文が施されている。この他、土師器壺・甕、須恵器甕、鶴尾H-13・14、多量の瓦片を出土している。

S K 558 墓壙 土師器甕、瓦、寛永通寶、鉄釘、板状木製品を出土した。N-9～26寛永通



番号	登錄番号	遺構・層位	種類	特	備	考
1	G-24	S D562	半瓦	鋸印き口 + ナテ → 凹状沈縫	布目柄、赤切り柄、柳井井頭	58- 7
2	G-27	S D562	平瓦	鋸印き口 + ナテ → 凹状沈縫	布目柄、赤切り柄、粘土版合せ口?	58- 3
3	G-28	未作上	半瓦	鋸印き口 + ナテ → 滑状沈縫	布目柄、赤切り柄、桙背板	58- 2
4	G-26	S D562	瓦瓦	鋸印き口 + ナテ → 凹状沈縫	布三孔、赤切り柄	58- 1
5	G-23	造 横	平瓦	鋸印き口 + ナテ、小口付辺はケズり	布目柄、赤切り柄、保美柄、小口及び側邊部分辺はケズリ	58- 5

第29図 第46次調査区出土遺物



番号	登録番号	初鋳年(西暦)	法量(cm)			真面	裏面
			直径	中央穴の邊	縁幅		
1	N-9	寛文8年(1668)	2.5	0.6	0.25	文	新寛永銭
2	N-10	寛文8年(1668)	2.5	0.6	0.25	文	新寛永銭
3	N-13	寛文8年(1668)	2.5	0.6	0.25	文	新寛永銭
4	N-15	寛文8年(1668)	2.5	0.55	0.25	文	新寛永銭
5	N-16	寛文8年(1668)	2.55	0.55	0.25	文	新寛永銭
6	N-17	寛文8年(1668)	2.55	0.6	0.25	文	新寛永銭
7	N-18	寛文8年(1668)	2.55	0.6	0.25	文	新寛永銭
8	N-19	寛文8年(1668)	2.55	0.6	0.25	文	新寛永銭
9	N-21	寛文8年(1668)	2.5	0.6	0.25	文	新寛永銭
10	N-22	寛文8年(1668)	2.5	0.6	0.25	文	新寛永銭
11	N-23	寛文8年(1668)	2.55	0.55	0.3	文	新寛永銭
12	N-25	寛文8年(1668)	2.55	0.6	0.25	文	新寛永銭
13	N-26	寛文8年(1668)	2.5	0.55	0.3	文	新寛永銭
14	N-11	寛永14年(1637)	2.4	0.5	0.25	—	古寛永銭
15	N-12	寛永14年(1637)	2.4	0.55	0.25	—	古寛永銭
16	N-14	寛永14年(1637)	2.4	0.6	0.3	—	古寛永銭
17	N-20	寛永3年(1626)	2.4	0.5	0.25	—	古寛永銭
18	N-24	寛永14年(1637)	2.5	0.6	0.3	—	古寛永銭

第30図 第46次調査区SK559墓塚出土古銭拓影

寶（第30図1～18）は、初鉄年が寛永3（1626）年から寛文8（1668）年までのものである。

その他、表土、耕作土から、ロクロ使用の土師器壺D-2、須恵器蓋・高台付壺・皿、F-29丸瓦（第28図7）、F-34・42軒丸瓦（第28図1・5）や、器厚が0.7cmと薄い瓦G-25、凸面に櫛描き波状文のあるG-28平瓦（第29図3）、凸面に朱の痕跡の残るG-29平瓦、凹面に「十」のヘラ記号のあるG-30平瓦、凹面にし字状に2本の沈線のついたG-31平瓦、鶴尾の破片H-8・10・11・12を出土している。

4. まとめ

今回の調査区は、古くから瓦敷布地として知られ、推定方町守域のほぼ中央にあたり、第12次調査で発見した基壇建物跡に関連する遺構の存在が予測された。

調査の結果、古代の遺構と考えられるものは3条の溝跡である。このうち、SB 100 基壇建物跡の確認された版築から南に約20m離れて発見した真東西方向に延びるSD 532 溝跡は、南北方向に延びるSD 562 溝跡とともに、寺院に関わりのある溝であった可能性がある。また、溝跡の堆積土からの出土遺物には、軒丸瓦や鶴尾の他、瓦が多く、古代以降の遺物が全くないことから、溝の廃絶は、寺院が廃絶された後、あまり時間的な隔たりのない時期であろう。発見遺構には、寺院を構成したと断定し得る遺構はないが、耕作土からの夥しい瓦の出土は、調査区近辺の瓦葺き建物の存在を裏付ける。

出土遺物には、瓦が圧倒的に多く、出土破片数は7,000点を越える。平瓦は、糸切板、模骨痕が明瞭に観察される、粘土板巻き作り技法によるものである。丸瓦は、正線のない行基葺丸瓦で、粘土の合わせ目があり、粘土板巻き作りと考えられる。軒丸瓦は、範の大きさに多少の差がみられるが、瓦当の文様形態は全て同種である。文様の特徴は、花弁先端が少し尖り気味で、周縁の内側に1条の園線を巡らせている点で、この8弁の単弁の単弁蓮華文軒丸瓦と同系統の軒丸瓦は、多賀城政庁地区（註5）、仙台市大蓮寺塗跡（註6）、古川市名生館遺跡（註7）などから出土している。

出土した鶴尾の破片は12点を数え、小破片が多く、部位の判別できたものはないが、胴部と推定できるものが2点、その他2点は頭部もしくは鰐部であると考えられる。外側はヘラケズリまたはナデでていねいに平坦に調整されているが、内面の調整は荒く、ヘラ状工具により、ケズリ、またはナデ、オサエが施されている。内面の一部には格子状叩き目が残っている破片もある。色調、胎土、器厚から2個体の破片と考えられ、第12次調査出土の鶴尾H-1と同一個体の破片とみられるものもある。東北地方における鶴尾の出土例は、福島県福島市腰浜庵寺（註8）、同県相馬市黒木田遺跡（註9）が知られるのみである。

VII 第47次発掘調査

1. 調査経過

仙台市郡山2丁目4-3赤井沢正敏氏より、郡山2丁目11-16において住宅建築のため、昭和59年9月6日付けで発掘届が提出された。この住宅建設敷地は推定方四町Ⅱ期官街の外郭西辺大溝の位置にあたり、建築予定の住宅位置はこの外郭大溝上にあたっていたことから、申請者である赤井沢正敏氏と協議の結果、住宅位置を大溝にからぬ様、西側にずらして建築するという設計変更について承認が得られ、また1.5m程の盛土によって遺構が直接破壊をまぬがれるということから、大溝部分の遺構確認調査を実施した。

調査区は前述したとおりⅡ期官街外郭西辺にあたり、昭和55年度に実施した、外郭南西コーナーの第7次調査区の北側に隣接しており、外郭大溝の延長線上に位置している。

敷地の東側中央に幅3m、長さ9mで、東西方向の調査区を設定し、盛土・旧水田耕作土を重機で排除した。Ⅲ層暗褐色粘土質シルト層上面で遺構検出作業を行ない、推定位置で外郭大溝を検出した。また、調査区南壁際で大溝と重複する土壌を1基検出した。

2. 発見遺構・出土遺物

発見された遺構は、大溝1条、土壌1基である。

S D 35溝跡 上幅3.4~3.5m、下幅90~120cm、深さ50~60cmで、断面形は扁平逆台形を呈している。方向は検出部分が短いことから、ここでは計測できないが、ほぼ真北方向をとっている。堆積土は大別して4層に分けられ、1層は黒褐色シルトで上面に薄く堆積している。2層にはにぶい黄褐色・暗褐色シルトで、上面に灰白色火山灰を薄いブロック状に含む。3層は黒褐色粘土質シルト、4層はにぶい黄褐色シルト質粘土である。SK 571 土壌、櫛混溝に切られている。

出土遺物は1層より土師器C-565高壺(第34図1)、2層より土師器壺・高壺・甕、須恵器壺・甕・甕の破片がある。

SK 571 土壌 直径2.1m程、深さ1.2m程とみられるが、南半部が調査区外で全形・規模等の詳細は不明である。堆積土は大別して3層にわけられ、1層は暗褐色粘土質シルト、2層は灰黄褐色粘土、3層は黒褐色粘土である。S D 35溝跡を切っている。

出土遺物は2層より土師器C-569壺(第34図2)、甕片がある。

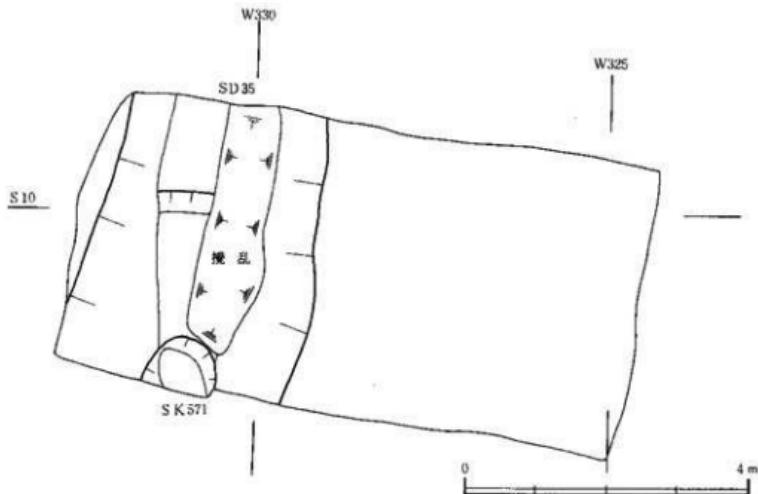


第31図 第47次調査区位置図

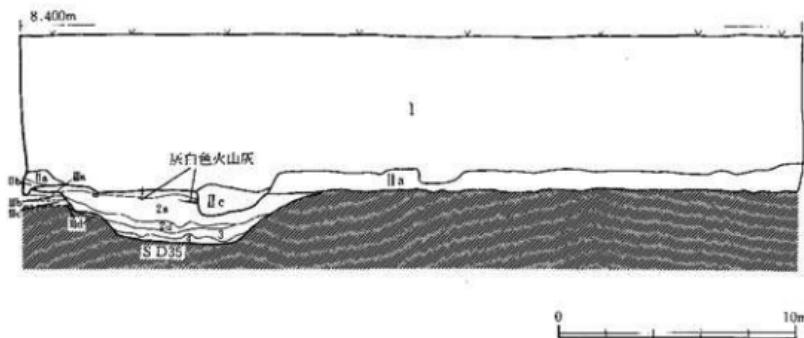
その他、SD35溝跡を切っている擾乱溝の中から、土師器C-564壺（第34図3）・高壙・甕、須恵器腹片などが出土しており、これらの遺物もSD35溝跡の堆積土中のものとみられる。

3. まとめ

第47次調査区は推定方四町Ⅱ期宮衙外郭西辺上に位置し、外郭材木列は調査区外であったが、調査の結果、大溝の位置・構造・規模等については、これまでの成果と同様のものであった。出土遺物は今回、極めて少なかったが、土師器壺・高壙にみられる特徴は第7次調査および第43次調査におけるSD35 1層出土のものと酷似し、これらはほぼ同一時期の一層とみてよいだろう。大溝の堆積土層はこれまで大別すれば3層に分けられていたが、今回の調査では、これまで1層とみていた最上層の上にさらに黒褐色シルト層が確認され、大別して4層にわけられることが明らかになった。しかし、上部がどの程度削平されたものが不明なことから、最終堆積状況は判然としない。出土遺物はこの外郭南西コーナー付近では1～2層（第7次調査における1層）からの出土量が多い。

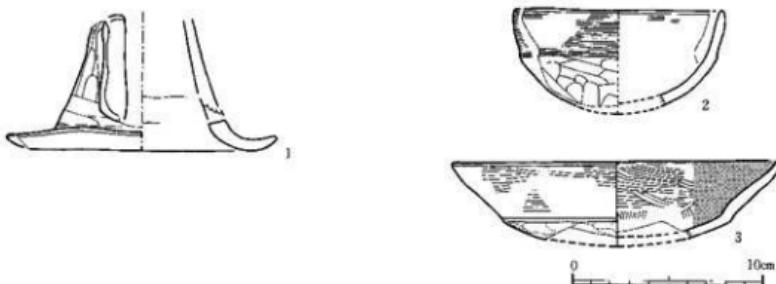


第32図 第47次調査区平面図



番号	上色	土性 調考	番号	土色	土性 調考
基 条 件			SD 35		
I 10YR 5% 明褐色	砂質シルト (盛土) 磨を多く含む	1 10YR 5% 明褐色		シルト	
IIa 5YR 4% ブラック	シルト (水田耕作土) 塗化鉄を鉄状に含む	2a 10YR 5% ない黄褐色		シルト	层白色火山灰が若干埋積する
IIb 5YR 5% 黒 色	粘土質シルト (水田耕作) 小礫をわずかに含む	2b 10YR 5% 暗褐色		シルト	
IIc 10YR 5% 黑褐色	粘土質シルト (堆 土)	3 10YR 5% 暗褐色		粘土質シルト	
IIIa 10YR 5% 暗褐色	粘土質シルト (地 山)	4 10YR 5% ない黃褐色		シルト質粘土	
IIIb 7.5YR 5% 明褐色	粘土質シルト (地 山)				
IIIc 7.5YR 5% 黑 色	シルト (地 山)				
IIId 10YR 5% 明褐色	粘土質シルト (地 山)				

第33図 第47次調査区断面図



番号	登錄番号	種 別	器 形	名前標	基 本	外 白 調 型	内 調 型	測 定	性 質			
1 C-365	土器部	器形	SD 35	2	白絞糸 体 壁	赤 色	口縁部	体 部	底 部	口 頭 頂 部	14.3cm	6C-1
2 C-369	土器部	器形	SD 35	3	赤土色	ヘラタギリ	白土色	ヘラタギリ	コトナリ		10.8cm	5B-4
3 C-364	土器部	器形	SD 35	4	赤土色	ヘラタギリ	白土色	ヘラタギリ	コトナリ	底 部	17.4cm	5B-5

第34図 第47次調査区出土遺物

VII 第48次発掘調査

1. 調査経過

第48次調査は、郡山三丁目26-1の約800m²を対象として実施した。この地区は本年度実施して第44次調査の東側に隣接しており、推定方四町Ⅱ期官衙域内南側、南北中軸線上に位置している。官衙の外郭南辺に付設された推定南門と推定中心施設を結ぶ、官衙の南北中央通路遺構の存在が予想された地区である。現状は東西に細長い畠地で、標高は9.8mである。

発掘調査に先立ち調査区の設定と上層観察のため、9月10日に1×1mの試掘ビットを15ヶ所あけ、調査を行った。その結果、現地表面より50cm程度まで耕作による擾乱を受けていることが明らかになり、9月11日から重機によって

表土・耕作土の排除を行った。この調査区は宅地ならびに道路に囲まれており、排土場が確保できなかったことから、対象地区を南北に2分し、2回に分けて調査を実施した。はじめに南半部の調査を行った後、排土場と調査区を折り返して北半部の調査を行った。耕作時の天地返しによる擾乱が調査区全面に及んではいたが、西端部を除いて、深度が浅く、黄褐色地山土の上面でほぼ遺構の検出をすることができた。調査区内からN=30°E前後の基準方向による掘立柱建物跡、材木列、竪穴住居跡などのⅠ期官衙を構成すると考えられる遺構群とN=40°E前後のⅡ期官衙ないしはそれ以前の段階のものと考えられる竪穴住居跡が検出された他、井戸跡や土壙、多数の小柱穴、ビット群が検出された。しかし、当初予想したⅡ期官衙を構成すると考えられる道路状遺構等の遺構は確認できなかった。南半部は9月11日～10月24日まで、北半部は10月25日から11月30日まで行い、12月4日まで調査区全域の埋め戻し、整地作業を終え、調査を完了した。

2. 発見遺構

今回の調査によって発見された遺構は掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡15軒、材木列2列、溝跡3条、土壙15基、井戸跡1基、小柱穴・ビット約380などである。この調査区からは明らかにⅡ期官衙に属すると考えられる遺構は発見されなかった。各々の遺構は耕作土下層のⅣ層上面で発見されたものであるが、本来はこの上層でも検出可能な遺構と考えられる。しかし耕作



第35図 第48次調査区位置図

の為削平されて残らないのである。

S B 597 建物跡 東西2間（柱間寸法180～255cm）、総長3.3m、南北2間以上（柱間寸法180cm）、総長3.6m以上の建物跡で東西柱列方向はN-33°-Eである。柱穴は一辺60～140cmの長方形で、深さは45～70cm、柱痕跡は30～55cmである。柱穴内より土師器壺、壺片、須恵器片、鉄鋒を出土している。S I 549 を切っている。

S B 604 建物跡 東西4間以上（柱間寸法203～209cm）、総長6.3m、南北2間以上（柱間寸法約200cm）、総長2m以上の建物跡で、東西柱列方向はN-33°-Eである。柱穴は一辺50～70cmの隅丸長方形で、深さは30～50cm、柱痕跡は15～20cmである。柱穴内より土師器壺、壺片を出土している。S I 607 を切っている。

S I 580 壁穴住居跡 東西長2.5m、南北長3mの隅丸長方形で、西辺方向でN-39°-Eである。壁は外傾気味に立ち上り、壁上端から床面までは25～35cmである。床面にはよい黄褐色粘土などによる貼床である。カマド、周溝、主柱穴等は検出されなかった。堆積土は黄褐色シルト、暗褐色、黒褐色シルト質粘土、灰黃褐色粘土などである。SK 592 を切り、SK 589、P 87に切られている。

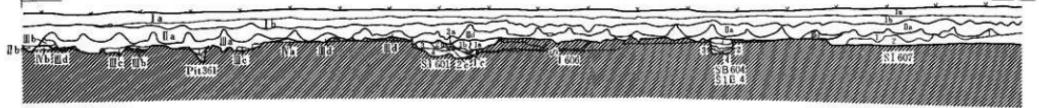
S I 581 壁穴住居跡 3.2m四方の隅丸の正方形で、北辺方向からN-33°-Eである。上部削平が著しく、一部床面が露出している。床面にはよい黄褐色シルトにより貼床である。カマドは東壁に施設され、造り替えが認められる。旧カマドは東壁北端にあり前面に焼土を含むピットがある。新カマドは東壁北寄りにあり、前面に焼土・炭化物が分布している。明らかに主柱穴と考えられるものはなかった。堆積土は暗褐色、よい黄褐色、灰黃褐色シルトで、土師器壺・壺片を出土している。さらに床面上より土師器壺、須恵器壺、新カマドより土師器壺片、須恵器壺片を出土している。SD 572 に切られている。

S I 586 壁穴住居跡 長辺3.8m、短辺2.7mの長方形で、短辺方向はN-45°-Eである。壁は外傾気味に立ち上り、壁上端から床面まで13～15cmである。床面にはよい黄褐色シルト質粘土などによる貼床である。カマドは南辺南寄りにあり、幅50cm、奥行50cmで両袖が遺存し、前面に焼土が分布している。周溝、主柱穴などは検出されなかった。堆積土は暗褐色、よい黄褐色、黒褐色シルト、よい黄褐色、黒褐色粘土質シルトである。堆積土中より土師器壺・壺片、床面上、カマド内より土師器壺、壺片を出土している。S I 587 に切られている。

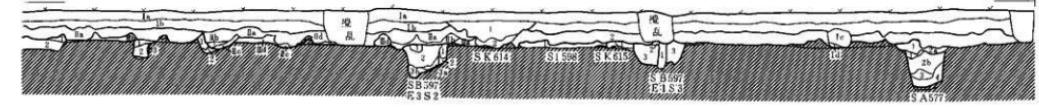
S I 587 壁穴住居跡 長辺3.4m、短辺2.2mの隅丸の長方形で、短辺方向からN-42°-Eである。壁は直立気味に立ち上り、壁上端から床面まで20～23cmである。カマドは東壁北端にあり前面に炭化物、焼土が分布している。周溝、主柱穴などは検出されなかった。堆積土は褐色、暗褐色、黒褐色、よい黄褐色シルト、褐色、よい黄褐色、灰黃褐色粘土質シルトである。堆積土中より土師器壺片を出土している。S I 586 を切り、SE 573 に切られている。

北壁断面

10.00m



10.00m

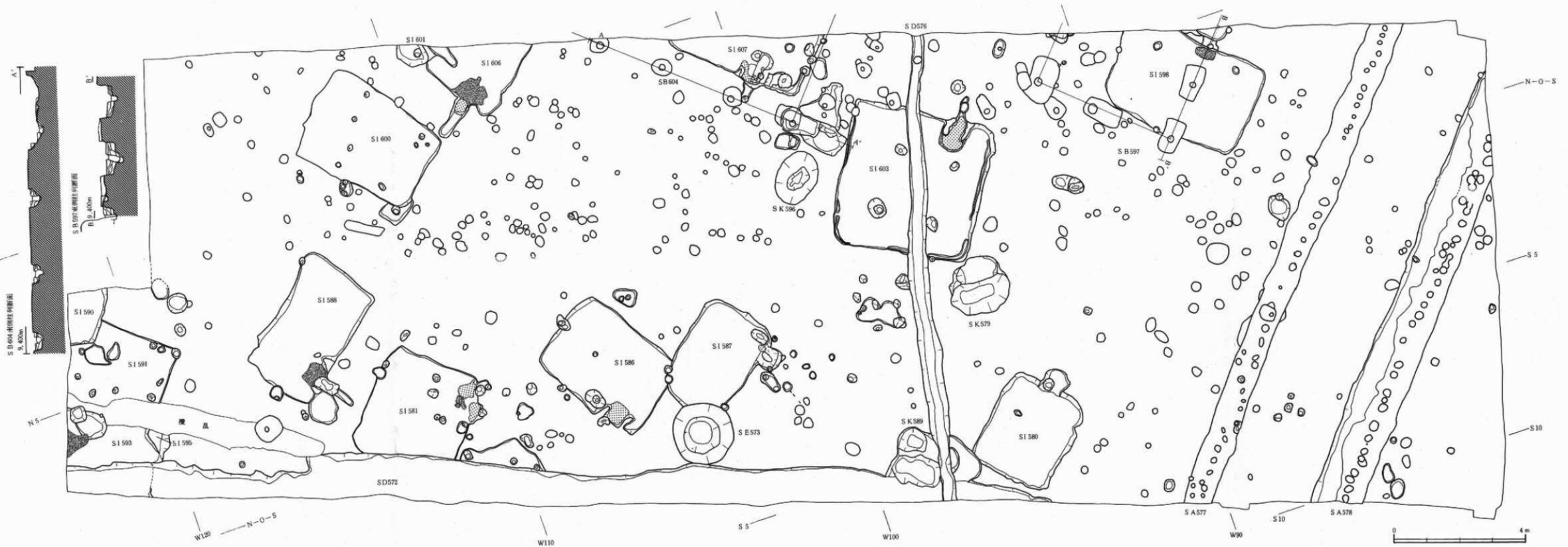


北壁土層

固有色・七色・土性・固有色

固有色	七色	土性	固有色
1a 10YR 5/6	褐色	シルト	
1b 10Y R 5/6	褐色	シルト	
1c 10Y R 5/6	褐色	シルト	
1d 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1e 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1f 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1g 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1h 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1i 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1j 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1k 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1l 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1m 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1n 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1o 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1p 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1q 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1r 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1s 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1t 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1u 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1v 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1w 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1x 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1y 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
1z 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
S.B. 494 S.1.4			
1 10Y R 5/6	黄褐色	シルト	マングン粒を含む
2 10Y R 5/6	黑褐色	シルト	
3 10Y R 5/6	黑褐色	シルト	
4 10Y R 5/6	黄褐色	粘土	酸化鉄を含む
S.1.5			
1 10Y R 5/6	褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	黄褐色	シルト	
P 216			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物・上緑色を含む
2 10Y R 5/6	褐 色	粘 土	マンゴン粒を含む
3 10Y R 5/6	暗褐色	シルト質粘土	粘土・マンゴン粒を含む
S.D. 500			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	マンゴン粒・酸化鉄を含む
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
P 361			
1 10Y R 5/6	灰褐色	粘土質シルト	マンゴン粒を含む
2 10Y R 5/6	灰褐色	シルト	マンゴン粒・酸化鉄を含む
3 10Y R 5/6	灰褐色	シルト	
4 10Y R 5/6	灰褐色	シルト	
S.1.3			
1 10Y R 5/6	褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	灰褐色	シルト	
3 10Y R 5/6	灰褐色	シルト	
4 10Y R 5/6	灰褐色	シルト	
S.1.2			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を多く含む
2 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を多く含む
3 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を多く含む
4 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を多く含む
S.1.1			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
3 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
4 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
S.1.0			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
3 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
4 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
S.1.3.2			
1 10Y R 5/6	ない青褐色	シルト質粘土	
2 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3.a 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3.b 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
S.K. 64			
1 10Y R 5/6	ない青褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	ない青褐色	シルト	
S.A. 277 E.3.2			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	マンゴン粒・酸化鉄を含む
2 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
P 194			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
S.B. 597 S.1.3			
1 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
2 10Y R 5/6	褐色	シルト	
3 10Y R 5/6	褐色	シルト質粘土	
S.A. 277 E.3.2			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
S.A. 372			
1 10Y R 5/6	ない青褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
4 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
S.1.3.2			
1 10Y R 5/6	ない青褐色	粘土	酸化物を多く含む
2 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
4 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
S.1.2			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
S.1.1			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
西壁土層			
固有色	土性	上性	固有色
S.1.0			
1 10Y R 5/6	ない青褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
4 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
S.1.0.1			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 2.5Y R 5/6	明黄色	シルト	酸化物を多く含む
4 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を多く含む
5 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を多く含む
S.D. 572			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3 2.5Y R 5/6	明黄色	シルト	
4 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	酸化物を少含む
S.1.0.2			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	明黄色	粘土	
3 10Y R 5/6	明黄色	シルト	
4 10Y R 5/6	明黄色	シルト	
S.1.0.3			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
S.1.0.4			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
S.1.0.5			
1 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
S.1.0.6			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を多量に含む
S.1.0.7			
1 10Y R 5/6	暗褐色	シルト	
2 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	酸化物と地緑を少含む
3 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	(無)
4 10Y R 5/6	暗褐色	粘土	(無)
西壁断面			
固有色			
10.00m			
1 10Y R 5/6			
2 S.1.593			
3 S.1.593			
4 S.1.593			

第36図 第48次調査区土層断面図



第37図 第48次調査区平面図

S I 588 壁穴住居跡 長辺4m、短辺2mの長方形で東辺方向はN-42°Eである。壁はゆるやかに立ち上り、壁上端から床面まで10~20cmである。床面は褐色粘土による貼床である。カマドは東壁南端にあり、煙道の長いものである。カマド前面に炭化物、焼上が分布している。周溝、主柱穴などは検出されなかった。堆積土は暗褐色シルト、粘土質シルト、褐色、灰褐色粘土質シルトで、床面上、カマド内より土師器壺片を出土している。S K 583に切られている。

S I 590 壁穴住居跡 調査区の西端で住居跡の一部を検出したのみで、詳細は不明である。壁は直立気味に立ち上り、壁上端より床面までは25cmである。床面はにぶい黄褐色粘土による貼床である。堆積土は灰黄褐色粘土、粘土で、土師器壺、壺片を出土している。S I 591を切っている。

S I 591 壁穴住居跡 調査区の西端で住居跡の一部を検出した。東西3.4m以上、南北2.4m以上で、東辺方向はN-33°Eである。上部削平が著しく、床も遺存せず、掘り方のみ検出した。掘り方底面には、凹凸があり、埋土は暗褐色シルトである。S I 590・593に切られている。

S I 593 壁穴住居跡 調査区の西端で住居跡の一部を検出したのみで詳細は不明である。壁は外傾して斜々に立ち上る。上部削平が著しく、掘り方とピットのみ検出した。ピットが主柱穴となるものかどうかについては判然としない。掘り方埋土は黒褐色シルト、褐色粘土質シルトである。S I 591・595を切り、SD 572に切られている。

S I 595 壁穴住居跡 調査区の西端で住居跡の一部を検出したのみで、詳細は不明である。壁は直立気味に立ち上り、壁上端から床面まで10~20cmである。床面は灰白色粘土で、厚さ2~4cmである。住居跡内の壁ぎわには、はられていない。床面上に炭化物、焼上の分布が見られる。堆積土は灰黄褐色、褐色、にぶい黄褐色粘土で、土師器壺、壺片を出土している。S I 593、SD 572に切られている。

S I 598 壁穴住居跡 長辺4.4m、短辺3mの隅丸長方形で、東辺方向はN-34°Eである。壁は外傾気味に立ち上り、壁上端から床面まで10cmほどである。カマドは北壁中央にあり前面に炭化物が分布している。周溝、主柱穴などは検出されなかった。堆積土は灰黄褐色、黄橙色、浅黄橙色粘土、灰黄褐色、黄橙色シルト質粘土である。堆積土中より土師器壺・壺片、鎌、床面上より土師器壺、壺片を出土している。S B 597に切られている。

S I 600 壁穴住居跡 長辺4m、短辺2.7mの長方形で、南辺方向はN-40°Eである。上部削平が著しく、壁の立ち上りも明瞭ではない。壁上端より床面まで2~10cmである。カマド、周溝、主柱穴なども検出されていない。堆積土は褐色、暗褐色シルトで、堆積土中と床面上から土師器壺、壺片を出土している。S K 609を切っている。

S I 601 壁穴住居跡 調査区の北西隅で住居跡の一部を検出したのみで詳細は不明である。

カマドは長い煙道を有するもので、袖も一部遺存している。堆積土はにぶい黄橙色粘土、黒褐色、黄橙色シルトなどで、土師器壺片を出土している。S I 606 を切っている。

S I 603 穫穴住居跡 4.3m 四方の隅丸の正方形で、東辺方向はN-25°-Eである。壁はほぼ直立気味に立ち上り、壁上端より床面までは30~40cm、掘り方底面までを含めると32~45cmほどである。床面は灰黄褐色粘土の貼床で、厚さ1~7cmである。カマドは北壁東寄りにあり幅35cm、奥行70cmで、両袖が良好に遺存し、前面に炭化物、焼上が見られる。周溝は掘り方底面において、各々径30~50cm、深さ50~63cm、断面形はU字形あるいはV字形である。堆積土はにぶい黄橙色、黒褐色シルト、灰黄褐色シルト質粘土で、土師器壺、壺片、須恵器平瓶片を出土している。S D 576 、ピットに切られている。

S I 606 穫穴住居跡 調査区の北西隅で住居跡の一部を検出した。東西2.6m、南北2m以上で煙道の方向はN-47°-Eである。壁は外傾気味に立ち上り、壁上端から床面まで15~20cmである。床面はにぶい黄褐色シルトによる貼床で、部分的には2枚にわたって認められる。カマドは南壁やや南よりにあり、前面に炭化物が分布している。周溝、主柱穴などは検出されなかった。堆積土はにぶい黄褐色、黒褐色シルトである。堆積土中より土師器壺、壺片、床面上より土師器壺、壺、カマド内より土師器壺、壺片を出土している。S I 601 に切られている。

S I 607 穫穴住居跡 調査区の北壁中央で住居跡の一部を検出した。東西4.4m、南北2m以上の長方形で、煙道の方向はN-33°-Eである。壁は外傾気味に立ち上り、壁上端より貼床上面まで15~30cmである。カマドは南壁東寄りにあり、片袖のみ検出され前面に焼上が分布している。周溝は幅15cm、深さ7~15cm程で、住居跡の東南隅にのみ見られる。住居跡内のピットが主柱穴となるかどうかについては判然としない。堆積土は褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどで、土師器壺、壺片を出土している。S B 604 に切られている。

S A 577 材木列 上幅90~100cm、底幅60cm、深さ80cmの布掘り中央に直径15~20cmの材木痕跡がみられる。方向はN-33°-Eである。調査区内で15.5mにわたって検出したが、さらに南北方向に続いていると見られる。埋土はにぶい黄橙色、明黄褐色、浅黄橙色粘土、黄褐色シルトなどで、土師器壺、壺片を出土している。布掘りの検出面上で、材木痕跡を観察できないことから、抜き取られたと考えられる。

S A 578 材木列 上幅80~90cm、底幅50cm、深さ90cmの布掘り中央に径15~25cmの材木痕跡がみられる。方向はN-34°-Eである。調査区内で14mにわたって検出したが、さらに南北方向に続いているとみられる。埋土は褐色シルト、粘土質シルトで、土師器壺、壺片を出土している。布掘りの検出面上で、材木痕跡を観察できること、西壁が乱れることなどから西側より抜き取られたと考えられる。抜き取り痕跡を含めると、S A 578 は上幅150cm程となる。

S K 579 土壙 1.8×1.7m、深さ70~80cmの不整円形で、底面には段差があり、南北断面形は逆台形で、一部隣がややえぐれている。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色、褐色、暗褐色粘土質シルト、黒褐色、にぶい黄褐色粘土などである。堆積土中より、土師器环、甕・甕片、須恵器壺・甕・蓋、鐵製品を出土している。

S K 582 土壙 2.6×0.9m以上、深さ10~20cmの不整形で、底面は凹凸がある。堆積土はにぶい黄褐色、黄褐色シルトなどである。S D 572 に切られている。

S K 583 土壙 1×0.9m、深さ9~12cmの不整形で、断面は扁平なU字形である。堆積土は暗褐色、明黄褐色シルトで、土師器甕片を出土している。S I 588 を切っている。

S K 589 土壙 2.8×1.7m以上、深さ15~45cmの不整形で、底面は著しく凹凸がある。堆積土は、暗褐色シルト、暗褐色粘土、にぶい黄橙色などで、土師器环、甕片を出土している。S D 572・576 に切られている。

S K 592 土壙 0.8×0.7m以上、深さ10cmで平面形などの詳細は不明である。堆積土は暗褐色シルトで、土師器甕片を出土している。S I 581 に切られている。

S K 594 土壙 1.55×0.7m、深さ15cmの不整形で、底面は凹凸があり、断面形は舟底形である。堆積土はにぶい黄褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルトで、土師器甕片を出土している。検出時においても上面より土師器环、甕片がまとまって出土している。

S K 596 土壙 1.6×1.2m、深さ35cmの梢円形で、断面形は壁中段に棱をもつ舟底形である。堆積土は褐色、黒褐色粘土質シルト、暗褐色、にぶい黄褐色、にぶい黄橙色シルト質粘土などで、土師器环、甕片を出土している。

S K 599 土壙 0.7×0.5m、深さ7cmの隅丸長方形で、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色、褐色シルトで、土師器甕片、須恵器甕片を出土している。

S K 605 土壙 0.8×1.2m以上、深さ37cmの不整長方形で、断面形は扁平なU字形である。堆積土は暗褐色シルト、黄褐色シルト質粘土で、土師器环、甕片を出土している。S K 608 を切っている。

S K 608 土壙 1.4×0.6m、深さ40cmの長方形で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色粘土などで、土師器环、甕片を出土している。S K 605・613 を切り、S B 604 に切られている。

S K 609 土壙 1×0.7m、深さ15cmの長方形と推定され、断面形は舟底形である。堆積土は暗褐色、黒褐色、にぶい黄褐色シルトで、土師器环、甕片を出土している。S I 600 に切られている。

S K 612 土壙 0.85×0.6m、深さ20cmの丸味をもったひし形で、断面形はU字形である。堆積土は暗褐色、黒褐色、灰黄褐色、褐灰色シルト、明黄褐色粘土質シルトである。

S K 613 土壌 1.3×1.3m 以上、深さ12cmの不整形である。堆積土は暗褐色シルトである。
S B 604、S K 605・608、P 228 に切られている。

S K 614 土壌 調査区北壁中で検出され、平面形などの詳細については不明である。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。

S K 615 土壌 調査区の北壁ぎわで検出され、平面形などの詳細については不明である。堆積土は灰黄褐色シルト質粘土である。

S D 572 溝跡 長さ30cm以上の溝跡で、平面形、規模などの詳細は不明である。方向はE—12°—Sである。堆積土は暗褐色、黄褐色シルトで、土師器坏、高坏、甕片、須恵器坏、蓋、壺、甕片、平瓦片を出土している。

S D 576 溝跡 長さ14m以上、上幅35~75cm、下幅20~30cm、深さ10~40cm、横断面形はU字形を呈し、方向はN—8°—Eである。堆積土は暗褐色粘土、黄橙色シルトで、土師器坏、甕片、須恵器甕片、鉄滓を出土している。S K 589、S I 603 を切り、S D 576 に切られている。

S E 573 井戸跡 直径1.8mの円形素掘りの井戸跡で、深さ3.3mである。除々にすぼまり、検出面より40cm程の深さで直径1.1mの「I」形になる。底面は直径50~65cmの円形を呈し、ほぼ平坦である。堆積土は暗褐色粘土質シルト、灰黄褐色、灰色、オリーブ黒色、暗青灰色粘土などである。堆積土中より土師器坏、甕片、陶器片、木製柵、曲物などを出土している。

3. 出土遺物

第48次調査による出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、金器製品、木製品、土製品などである。出土遺物の量は比較的少なく、S I 595などの住居跡から数個体分の土師器の他、土壌、溝跡からの破片資料が主である。以下遺構ごとに出土遺物を略述する。

S I 581 住居跡 床面からは体部中央に段をもつ須恵器H—251坏（第38図2）、堆積土中より土師器坏・甕、須恵器甕片、カマド内より土師器甕片が出土した他、ピット内より関東系の土師器坏片が出土している。

S I 586 住居跡 床面から外面ハケメ、ヘラケズリの長胴形を呈する土師器C—550 甕（第39図6）の他、堆積土中および床面上より関東系の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、須恵器坏・壺片の他、鉄滓が少量出土している。

S I 587 住居跡 堆積土中およびカマドから土師器甕の細片が出土している。

S I 588 住居跡 床面、カマドから七陣器甕片が出土している。

S I 590 住居跡 堆積土中から内外面とも全面にヘラミガキのみられる土師器C—558 梶（第39図1）の他、土師器坏・甕片が出土している。

S I 595 住居跡 堆積土中より土師器C—559 坏（第38図9）、床面よりC—573 坏（第38図7）、カマド焼土層上面より、内外面ヘラミガキを施し、漆の付着した土師器C—560 坏（第

38図8) の他、土師器壺、甕片が出土している。

S I 598 住居跡 堆積土中より金屬製品N-8錠(第38図12)の他、堆積土中および床面より土師器壺、甕片が出土している。

S I 600 住居跡 床面より内面ナデ、外面底部がヘラケズリの後ヘラミガキで半底の関東系とみられる土師器C-552壺(第38図10)、堆積土中より、体部球形を呈し、外面ハケメ、ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラナデの土師器C-554甕(第39図8)の他、土師器壺、甕片が出土している。

S I 601 住居跡 ピット内より土師器甕が出土している。

S I 603 住居跡 検出面より須恵器平瓶の底部片、土師器壺、甕片の他、堆積土中および床内より土師器壺、甕片が出土している。

S I 606 住居跡 床面より土師器C-556壺(第38図11)と関東系の土師器C-562壺(第38図13)の他、堆積土中および煙道内より土師器壺、甕片が出土している。

S I 607 住居跡 土師器壺、甕片がわずかに出土している。

S B 597 建物跡 柱穴掘り方埋土より土師器C-551甕(第39図3)の他、関東系を含む土師器壺、甕片や鉄滓が出土している。

S B 604 建物跡 土師器甕の細片が出土している。

S A 577 材木列 材木抜き取り溝より関東系を含む土師器壺、甕片の他、材木痕跡から上師器甕片が出土している。

S A 578 材木列 材木抜き取り溝より土師器壺・甕の細片が出土している。

S D 572 溝跡 関東系の土師器壺を含めた上師器壺・高壺・甕、須恵器壺・蓋・壺・甕片・平瓦片が出土している。

S D 574 溝跡 関東系土師器壺片を含む土師器壺・甕片が出土している。

S D 575 溝跡 上師器甕片、関東系土師器壺片が出土している。

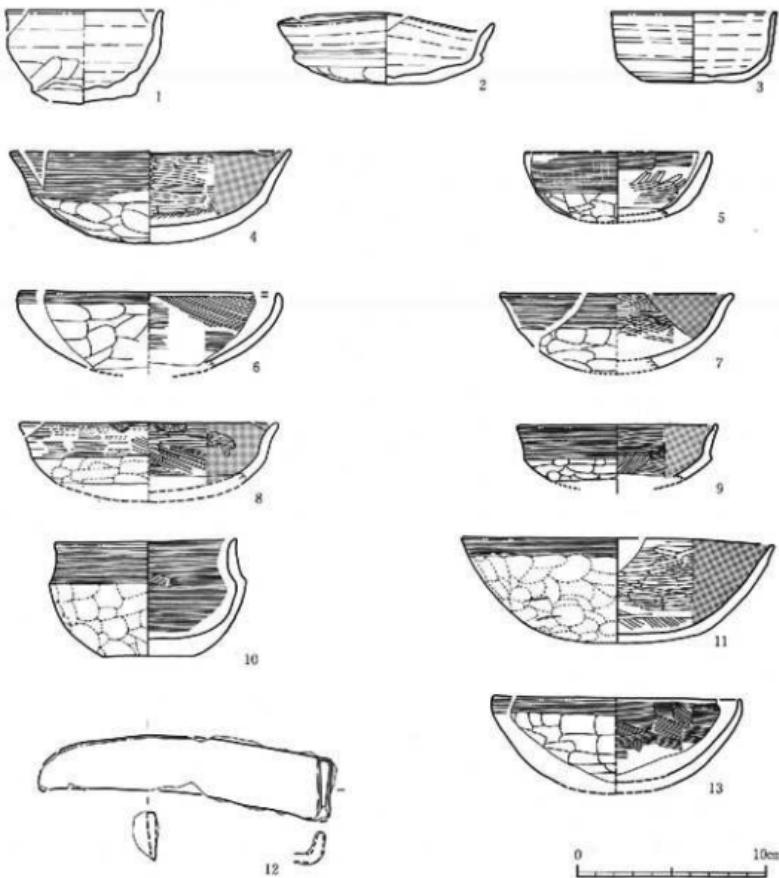
S D 576 溝跡 関東系土師器壺片を含む土師器壺・甕、須恵器甕片、フイゴ羽口片の他、鉄滓が少量出土している。

S K 579 土壙 内面に漆の付着した土師器C-561甕(第39図4)、関東系の土師器C-563壺(第38図6)の他、関東系を含む土師器壺・甕、須恵器蓋・壺・甕片、鉄製品が出土している。

S K 599 土壙 土師器・須恵器の甕片がわずかに出土している。

S K 602 土壙 土師器C-553・554・555甕(第39図7・8・9)が出土している。

S K 605 土壙 土師器C-571甕(第39図5)の他、関東系土師器壺を含む土師器壺・甕片が出土している。その他、S K 502・583・585・589・592・596・605・608・609土壙



番号	測量番号	種類	寸法	出土遺物	層位	外 観 溝 壁			内 観 溝 壁			法 尺	残存	厚 細
						口縁部	全体	溝	口縁部	全体	溝			
1	E-248	陶器	16		耕作土	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	5.0cm	5.3cm	5.4cm
2	E-251	陶器	16	S 190	耕作	ココロナド	ココロナド	多持ハラタズリ	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	2.8cm	11.3cm	40-2
3	E-251	陶器	16		耕作	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	2.8cm	11.3cm	40-7
4	C-357	土器	16	土器中型	土器	ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	4.5cm	15.0cm	40-4
5	C-370	土器	16		耕作土	ハナチ	ハナチ	ハナチ	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	3.8cm	11.3cm	40-5
6	C-503	土器	16	S K329		ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ナ	ナ	ナ	11.2cm	11.2cm	40-11
7	C-572	土器	16	S 159	耕作	ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	12.4cm	12.4cm	40-5
8	C-580	土器	16	S 158	耕作土	ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	12.8cm	12.8cm	40-10
9	C-589	土器	16	S 196	2.2	ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	ハラタズリ	10.4cm	11.3cm	50-6
10	C-592	土器	16	S 190	中型	ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ナ	ナ	ナ	4.2 cm	9.6cm	50-7
11	C-596	土器	16	S 196	中型	ココナド	ハラタズリ	ハラタズリ	ロコロナド	ロコロナド	ロコロナド	5.4 cm	15.4cm	50-9
12	N-8	陶器	鑑	S 196	長	15.4cm	刀切縁	1.5~3.0cm	基盤幅3.5cm	基盤幅3.5cm	基盤幅3.5cm	10.4~10.5cm	10.4~10.5cm	50-6
13	C-581	土器	16	S 196	中型	ココナド	ハラタズリ	ナ	ナ	ナ	ナ	12.2cm	12.2cm	50-8

第38図 第48次調査区出土遺物

で土師器壺・甕が各々わずかづつ出土している。L-7 梱、木製品 L-8 曲物などが出土している。多数の小柱穴、ピットからは土師器壺・甕、須恵器蓋・甕の細片がわずかづつ出土している。

造構検出面からは土師器C-557 壺（第38図4）、C-549 甕（第39図2）の他、関東系土師器壺を含む土師器壺・甕片が出土している。

表面探集および耕作土からは土師器C-570 壺（第38図5）、須恵器E-248、E-250 壺（第38図1・3）の他、関東系土師器壺を含む土師器壺・高壺・甕、須恵器皿・壺・蓋・高壺・蓋・甕、平瓦、羽口などの破片が出土している。

4. まとめ

発見された遺構は掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡15軒、溝跡3条、材木列2列、土塹15基、井戸跡1基、小柱穴・ピット約380などである。本調査区はⅡ期官衙仮想中軸線が通る位置にあたり、Ⅱ期官衙に係る重要な遺構の検出を目標としていた。しかし、発見された遺構のうち古代の遺構と考えられるものは、基準方向がN-33°-E前後振れた住居跡、材木列やN-40°-E前後振れた住居跡などである。Ⅱ期官衙に伴う遺構は発見されなかった。

発見された遺構の方向を見ると、

掘立柱建物跡 S B597 (N-33°-E)、S B604 (N-33°-E)

竪穴住居跡 S I580 (N-39°-E)、S I581 (N-33°-E)、S I586 (N-45°-E)、
S I587 (N-42°-E)、S I588 (N-42°-E)、S I591 (N-33°-E)、
S I598 (N-34°-E)、S I600 (N-40°-E)、S I603 (N-25°-E)、
S I606 (N-47°-E)、S I607 (N-33°-E)

材木列 S A577 (N-33°-E)、S A578 (N-34°-E)

となる。直接的な重複関係については、次のとおりである。

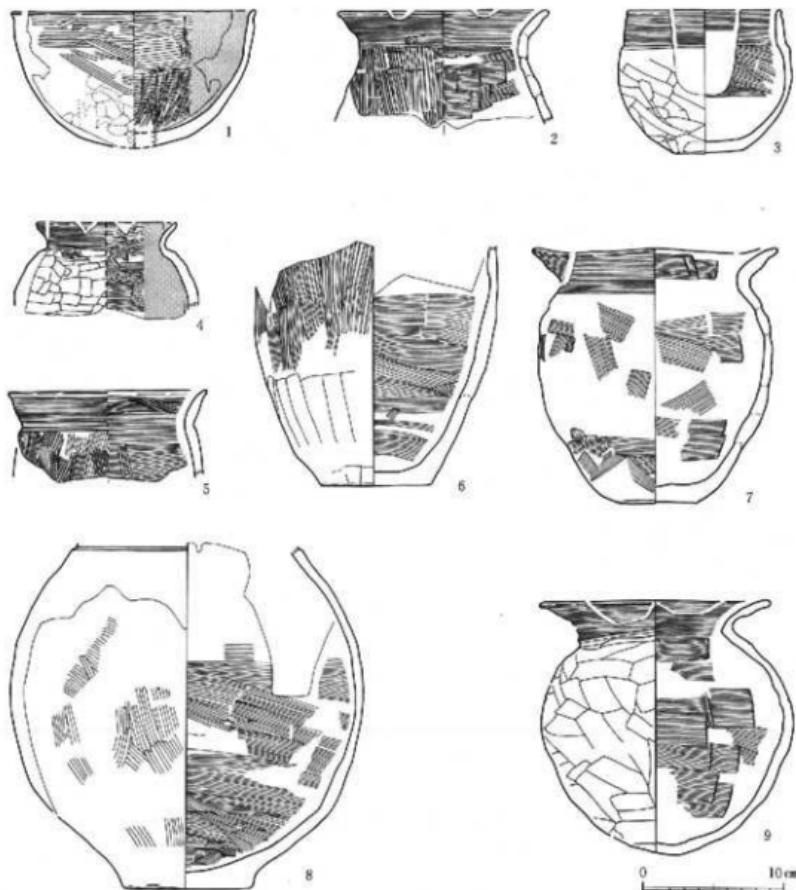
- | | |
|-------------------|----------------------------|
| • S I598 → S B597 | • S I586 → S I587 |
| • S I607 → S B604 | • S I591 → S I590 |
| • S I606 → S I601 | • S I595 → S I593 → S D572 |

この調査区の中で見る限り、方向の差異は重複関係の新旧をからずもしも反映していないようである。ただ方向の違いについて竪穴住居跡に関しては検討しておきたい。住居跡の方向をとてみると、N-33°-E前後のグループ(A)、N-40°-E前後のグループ(B)、その他(C)に分けられる。

(A) N-33°-E前後のグループ

S I581 (N-33°-E)、S I591 (N-33°-E)、S I598 (N-34°-E)

S I607 (N-33°-E)



番号	登録番号	材質	形状	出土遺物	年	外 観 図 構 成			内 観 図 構 成			法 量	規 格	写 真 図 構 成	
						口縁部	全体	底面	口縁部	全体	底面				
1	C-558	土器	円筒形	S1500	陶織土	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	17.3cm	N	03-4	
2	C-549	土器	筒	土器	土器	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	14.8cm	N	03-12	
3	C-528	土器	筒	S1501	陶土	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	10.4cm	11.5cm	4.8cm	01-1
4	C-548	土器	筒	S1502	陶織土	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	9.8cm	10.4cm	4.8cm	01-10
5	C-527	土器	筒	S1503	陶織土	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	14.2cm	N	N	01-10
6	C-539	土器	筒	S1504	陶土	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	7.5cm	N	03-3	
7	C-530	土器	筒	S1505	陶織土	ココナギ	ナ	ナ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	18.3cm	17.4cm	6.0cm	03-3
8	C-554	土器	筒	S1506	陶織土	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	ハコナギ	9.8cm	N	03-8	
9	C-560	土器	筒	S1507	陶織土	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	ココナギ	ハコナギ	ハコナギ	18.1cm	N	03-9	

第39図 第48次調査区出土遺物

(B) N-40°-E 前後のグループ

S 1580 (N-39°-E), S 1587 (N-42°-E), S 1588 (N-42°-E),

S 1600 (N-40°-E)

(C) その他

S 1603 (E-57°-S), S 1600 (N-47°-E)

S 1586 (N-45°-E, 長辺では E-49°-S)

(A) は掘立柱建物跡・材木列などと同様にⅠ期官衙に属すると考えてよからう。Ⅱ期官衙のものを除いて他の方向の住居跡については、第24次・35次調査の成果から、これまで第2段階に属する遺構群と考えてきた。しかしそれらの住居跡は、何軒かがまとまりをもって存在するものではなかった。第48次調査に至ってN-40°-E前後攝れた住居跡が複数存在するということは、これまで通り即第2段階に属すると考えてよいか疑問である。第24次調査の第2段階の遺構群は、重複関係からⅠ期官衙の遺構より古いことは明らかであったが、本調査区では重複関係がつかめていない。(B) の住居跡がⅠ期官衙の遺構と同じ空間の中で並立していたとしても不自然ではない。しかしながらこれまでⅠ期官衙に属する遺構は主にN-30~34°-Eの範囲で造られていた。以上のことから、現状では(B) の住居跡群がⅠ期官衙に含まれるとも、それ以前のものとも断定しない方がよきようである。今後の調査成果を待って検討したい。

材木列については、調査区内から2例発見されているが、2例とも抜き取りを受けている。とくにS A578は、西側よりのみ抜き取られている。2例の材木列を比較すると、S A578の材木痕跡の方が大きく、底面には白色の粘土が敷かれている。このようなS A578は、これまでの調査で発見した材木列と比べても大形のもので、Ⅱ期官衙外郭のS A33と比較しても、遜色のないものである。ただこれがⅠ期官衙の外郭になるかどうかについては、これより東から掘立柱建物跡などの遺構が発見されていないことから、可能性はあると考えられる。しかし、材木列より東側の地区的調査がもっと進まなければ決断は下せないのであろう。

なお、第48次調査区から出土した遺物で今後の調査において検討を必要とする遺物について指摘しておく。C-5521号は内面が黒色処理されずナデ調整のもので、いわゆる関東系の上飾器と呼ばれるものである。しかし、形態的には本遺跡でこれまでに出土した関東系と呼ばれるものとは若干異なっている。体部との境に緩い稜を形成しているが、口縁部までの立ち上がりが長く、他と比べて小形であるなどの点である。また、C-5517号は、在地のハケメを主体とする調整で、口縁部が「く」の字に聞く妻とは明らかに異なり、法量の点から在地の1号と比べてみても異質のものである。形態的には埼玉県地方に近いものがあるが、細部の不明な点や一部年代の異なる点があり、影響を受けた地域として特定するまでには至っていない。

IX 第49次発掘調査

1. 調査経過

仙台市水道局建設第二課より、都山二・三丁目地内において水道管埋設工事のため、昭和59年5月22日付で発掘届が提出されたので、昭和59年6月から8月まで、管理設工事と併行して造構確認調査を実施した。

調査区は2ヶ所にわたり、1ヶ所は推定方四町二期官衙城内の西側をほぼ南北に縦貫する市道敷内で、延長350m、他の1ヶ所は推定外郭北辺中央部付近の市道敷内で、推定北辺と2地区において横断交差するU字形迂回線で、延長150mである。管の埋設に伴う掘削は上幅70cm、深さ140cm程度で、明らかに造構検出面下層の地山まで破壊が及ぶことから、本調査以前に、南北線で7ヶ所、北辺迂回線で5ヶ所の試掘調査を行ない、既設水道管の位置を確認し、この旧水道管の埋設溝の中に新水道管を布設する様設計を若干変更することで、工事と調査を開始した。

調査は工事の工程上、1日平均30mづつ進めて行き、表土・擾乱土は重機で排除し、地山部分は手掘りで造構検出作業を行ったが、掘削幅が70cm、下端では40cm程度と狭くなっていることから、平面での造構検出は殆んどできず、主に旧水道管埋設溝の壁面を若干削りながらの断面観察に重点をおいて実施せざるを得なかった。



第40図 第49次調査区位置図

2. 発見遺構・出土遺物

南北線では北起点から110m程の位置で、溝状の落込みや柱穴を6ヶ所で確認した。これらの遺構は地表面下60cmの地山土上面で検出され、溝状遺構は3ヶ所で、上幅75~160cm、深さ40~55cm、断面形はJ字形ないし逆台形を呈している。柱穴は3ヶ所で、幅60~120cm、深さ30~80cmであるが、柱痕跡等の詳細は不明であり、出土遺物もないとことから、年代等も判然としない。

北辺回線ではⅡ期宮衙跡の外郭北辺を推定位置より5m程南側で確認、北辺も他の三辺同様材木列とその外側の大溝によって区画されていることが明らかになった。

S A 616 材木列 ごくわずかな部分を検出したのみであるが、東西方向に延びるもので、上部が著しく擾乱されており、布掘りの下端がわずかに遺存していた。布掘りは上幅80~85cm、下幅40cm、深さ40cm程で布掘り内のやや南側に直径20cmの材木痕跡を1本検出した。布掘り底面は現地表道路面より深さ1.4mで標高は10.4mである。布掘り底面から、外側に段を有し、ヨコナデ、ヘラケズリ、内面黒色処理、ヘラミガキの土師器碎片が1点出土している。

S D 617 溝跡 水道管埋設溝の断面で検出したが、材木列と平行して東西方向に延びるものとみられ、上幅5m以上、下幅1m、深さ90cm、断面形は南壁が北壁にくらべゆるやかに立ちあがる幅平逆台形を呈している。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は灰黄褐色粘土質シルト、3層は褐灰色粘土質シルトで、3層が厚さ60cm程を占めている。壁の立ちあがり状況からみて、上部はあまり擾乱を受けていないものとみられる。溝跡底面は現地表道路面から深さ1.5mで、標高10.3mである。S A 616 材木列からS D 617 溝跡底面中心まで8.7mである。

3. まとめ

発見されたS A 616 材木列とS D 617 溝跡は方四町と推定されていたⅡ期宮衙の外郭北辺にあたり、これまでの調査で明らかになっていた東・西・南の各辺外郭と構造・規模に関してほぼ同様のものである。この外郭北辺はわずかに一地点での確認であるが、この調査結果によつて、外郭四辺の位置が全て判明した。東西長は材木列の位置で4町、428.44m（1町=107m）であったことから方四町と推定し、北辺位置も南辺から428mの位置に想定していたが、S A 616 材木列はこの推定線より5m程南に位置し、S A 33南辺材木列からの算定距離は422.73mで、東西長より南北長は5.71m短い。

X 総 括

今年度は昭和57年度から実施されながら、これまで所在の確定されなかったⅡ期官術の政府の確認調査を主眼に、第44次・第48次調査を主に実施した。これまで、Ⅱ期官術の政府は官術域内の北側に存在したと推定し、57年度の第24次調査、58年度の第35次調査を行ってきたが、これらの地区ではⅡ期官術を構成していたと考えられる第4段階連構群（註10）が極めて少なく政府跡が官術域内北側には存在していないことが明らかになった。これらの成果からみてⅡ期官術政府は方四町東西仮想中軸線より南に位置していた可能性が強く、今年度は官術域内南側に調査の重点をおいた。さらにⅡ期官術外郭南辺にかかる地区と、寺院域内中央部において、住居建築に伴う発掘場が提出されていたことから、小規模な事前調査を2ヶ所において計画していたが、年度途中でさらに住宅建築ならびに水道管理設工事に伴う発掘場が3件提出され、Ⅱ期官術外郭西辺で1ヶ所（第47次）、同推定北辺から官術域内にかけて2ヶ所（第49次南北線、北巡回線）、方四町官術と寺院跡の中間地区で1ヶ所（第45次）の合計5ヶ所の地区で発掘調査を実施し、第43次調査では外郭の材木列と大溝の確認、第47次調査では外郭の大溝の確認、第49次調査では当初からの課題となっていた外郭北辺の材木列と大溝をほぼ推定位置で確認し、Ⅱ期官術が方四町で造営されていたことが判明、また第46次調査では寺院の推定講堂基壇跡の南側から多量の瓦を発見し、各々小規模な調査ではあったが、数多くの大きな成果を得ることができた。

1. Ⅰ期官術の調査

Ⅰ期官術を構成する遺構は第43・44・48次調査において発見された。

第43次調査ではⅡ期官術外郭材木別より古い掘立柱建物跡SB 490が1棟発見され、建物の全容は明らかでないが、梁行2間の東西棟で東・西に面に廻がついていたことも考えられる。この建物は柱列方向がN-38°Eを示し、これまでⅠ期官術建物と考えているものとやや角度のずれが見られるが、Ⅱ期官術連構との重複関係からみて、これもⅠ期官術を構成する建物跡とみておきたい。今回の調査では1棟しか発見されていないが、東に隣接して昨年度行なった第43次調査区の北側で柱穴が確認されていることから、周辺にいくつかの建物が存在していたものと考えられる。

第44次調査では掘立柱建物跡、堅穴住居跡、溝跡が発見され、いづれも方向はN-31°-36°-Eを示し、第24・35次調査で数多く発見された連構がN-30°-34°-Eを示していたとのわずかな差異が認められるが、これらの連構群がⅠ期官術を構成するものとみてよいだろう。掘立柱建物跡はSB 527は2間×2間の方形で向きが不明であるが、SB 507は2間×5間の南北棟、SB 528は2間×4間の東西棟、SB 534は2間×3間の東西棟と規模・方向で統一性がみら

れないもののいざれも倒柱のみの建物跡で官衙群と考えられる。また、新旧関係は明らかでないが、少くとも2時期以上の変遷が認められる。SD 536・552講跡も2本がほぼ平行して続いており、何らかの区画施設と考えられるが、同時併存したものでないことが明らかであり、これも2時期にわたる造り替えと考えられる。竪穴住居跡は遺存状況があまり良好でないが、方向性からみて、Ⅰ期官衙段階のものと考えられるものがあり、第35次調査の中で発見された竪穴住居跡（註11）と同様、官衙内で何らかの役割を担ったものと考えられ、特にSI 520はSB 507と並んで建っていた可能性が強い。

これらのことから、この地区にⅠ期官衙の遺構群が広がっていたことは確認できたが、建物等の配置関係やその性格については明らかにできなかった。

第48次調査では掘立柱建物跡、竪穴住居跡、材木列等が発見され、掘立柱建物跡や一部の竪穴住居跡については第44次調査と同様のものとみられる。材木列は2列発見されており、心心間隔4mで平行しており、新旧関係は明らかでないが、2時期にわたる増の造り替えと考えられる。両者とも布掘り検出面では材木痕跡が検出されず、上部埋土が乱れていることなどから、抜き取られたことが考えられる。

竪穴住居跡はこの調査区内で15軒検出されているが、全形・規模等のほぼ明らかなものに限れば、方向性の違いにより3つのグループに大別される。AグループはN-33°-E前後を示すもので、Ⅰ期官衙を構成するものとみられる。BグループはN-40°-E前後、CグループはN-45°-E以上を示し、第24次・35次調査においてはⅠ期官衙（第3段階）、Ⅱ期官衙（第4段階）に含まれない竪穴住居跡は他遺構の重複状況からも第2段階のものとしていたが、今回検出したB・Cグループの竪穴住居跡は出土遺物も極めて少ないうえに、他遺構との重複関係も殆んど認められず、第2段階遺構群と断定できない。また、Ⅰ期官衙を構成する遺構群の方向性もこれまで判明していたN-30°-34°-Eの基準方向の他にⅠ期官衙の細変遷ないしは同時期内の遺構にBグループのN-40°-Eを示すもの一群が存在する可能性も考えられる。これらのことから、このB・Cグループの竪穴住居群の所属段階は今回第2段階とも第3段階（Ⅰ期官衙）とも断定できなかったが、官衙内における竪穴住居の性格論とあわせ、今後の調査を待って検討してゆきたい。

2. Ⅱ期官衙の調査

Ⅱ期官衙を構成する遺構は第43・44・47・49次調査において発見された。

第43次調査では推定位置で外郭南辺の材木列と大溝を検出し、過去に実施した第4・7・23次調査と同様の結果を得た。材木列は約12mにわたって検出されたが、幅60~80cmの布掘り内の中央に直径25cm程のクリ丸材が密接して立て並べてあり、現況が畑地であったにもかかわらず遺存状況は良好であった。布掘りは南側壁上端部分が直立して立ちあがらず、テラス状に段

を形成して広がる部分が認められ、第4次調査A区で検出した二段布掘りと極めて類似した状況を呈しているものとみられた。布掘りの深さは検出土端からは120～150cm、段の落ち込みからは90～120cm、布掘り底面の標高も7,300mで第4次A区の布掘り下段部と数値の上でもほぼ一致し、この地区でも上部が1mないしそれ以上にわたって擾乱を受けたことが確認された。また、外郭大溝も堆積土の状況が他の地区とほぼ同様、大別して3層にわけられ、出土遺物が1層中に集中している点も類似している。土器類は上師器・須恵器の环・高杯が主体を占めており、土師器环は、東北南半における第5型式（栗岡式）から第6型式（国分寺下層式）にかけての特徴を持つもので、ここでは第6型式の中でも初期段階のものとみられる。須恵器环は、7世紀末葉から8世紀初頭段階と考えられ、共伴する上師器の年代観とも矛盾しない。また、2層中より出土の土師器C-500环は、これまで関東系土師器环としてきた一群の中に含まれるものである。第7次調査で大溝より出土した関東系土師器は4点で、2点は1層出土、1点は3層出土であるが、共伴遺物からみて1～3層の出土土器は、ほぼ一型式のものとみられ年代的に7世紀後半から8世紀初頭のものとみられる。1・2層には7世紀後半から8世紀初頭の土器が混在しているとみられ、土器群の最終年代から、この外郭大溝は8世紀の初頭頃に廃棄され、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。しかし、外郭材木列の検出状況からみて上部1m前後は擾乱もしくは削平されたことは前述の通りで、大溝も検出土面が旧表土ではなく、上部1m程が擾乱を受けているとみられるところから、土器群が一括して出土する1層も大溝堆積土の最上層ではなくむしろ中層に位置づけられ、大溝が上面まで人為的に埋め戻されたものか否か不明である。

第44次調査では掘立柱建物跡が1棟発見されたのみである。この建物跡は梁行2間（柱間寸法8尺）、桁行3間以上（柱間寸法8.5～9尺）の南北棟であるが、この調査区内では他にⅡ期官衙のものと考えられる遺構がなく、官衙内でこの一角がどのような性格を持っていたのか詳細は不明である。

第47次調査では推定位置で外郭西辺の大溝を検出した。この調査区は第7次調査区の北側に隣接しており、第7次調査区の北端では大溝の幅が5m程であったが、ここでは3.5m程であり、上層の削平・擾乱の程度により、上部は多少変動するが、大溝の上端ラインは所により出入がかなりあったものとみられる。また、ここでは大溝中央部を大溝と同方向の擾乱溝によって切られており、遺存状況はあまり良好ではなかった。しかし、外郭西辺も基本的には材木列の外側に大溝がめぐっており、第16次調査（註12）で大溝の状況が他の地区と若干異なり、溝外側の立ちあがりが検出されなかことについては今後さらに外郭西辺の確認調査の中で検討していく必要があろう。

第49次調査ではこれまで不明となっていた外郭北辺を検出することができた。外郭北辺は他

の三辺同様、材木列と大溝によって構成されていることを確認したが、水道管理設工事に伴う緊急調査であったことなどから、詳細な観察を行うことができず、わずかに管理設のための布摺り壁面で材木列と大溝の断面を観察したにとどまった。材木例と大溝の心心間隔は8.7mで南辺の状況と一致している。しかし、測量の結果では南辺から四町の推定線より5m程、短かい422.73mの位置に北辺材木列が位置していることが判明し、ごくわずかな部分での調査であり、今後の北辺確認調査により、多少数値のズレが生ずることは否めないが、Ⅱ期官衙の規模はおむね方四町（材木列での測量値は東西428.44m×南北422.73m）とみておきたい。

3. Ⅱ期併行寺院跡の調査

寺院城内での調査は第46次調査1件であり、調査面積が限定され、非常に狭い部分の調査で寺院を構成すると断定できる遺構はなかったが、この北方で実施した第12次調査（註13）で検出した基壇の検出南限から南に20m程の位置に基壇と方向を揃える真東西方向の溝跡を2条検出し、寺域内の区画もしくは構築物に伴うものと考えられた。これらの溝跡や上層の擾乱層中からは多量の瓦片が出土し、この地区に瓦葺き寺院建築物の存在していたこと示唆しているおり、軒丸瓦はこれまでの調査で出土したものと同様。全て8葉の単弁蓮華文であり、別種文様は今回も確認されなかった。またこれらの瓦類とともに鰐尾の破片がいくつか出土したが、第12次調査出土の鰐尾H-1と同一個体の破片とみられるのもある。

また、第44次調査区内では、郡山遺跡内で最も古い段階の遺構（第1段：古墳時代中期南小泉式廻）が検出される遺構検出面の下層より、弥生土器がやまとまって出土する状況がみられた。弥生土器片はこれまで第12・13次調査でも出土しており、寺院推定域とみられる遺跡の南側地区において若干確認されていたが、北側のⅡ期官衙域内で出土したのは初めてである。郡山遺跡の北西部には弥生時代の著名な遺跡として西台畠遺跡が隣接しており、弥生中期の樹形圓式期の墓地とみられている（註14）。今回出土の弥生土器は西台畠遺跡と同様、樹形圓式の範疇に捉えられるものであり、遺構の性格が、西台畠遺跡と一連のものとして捉えられるかあるいは集落跡等、他の性格を持っているのか今回は明らかにできなかったが、西台畠遺跡では土器組成の在り方が、壺類の完形土器が主体で、破片資料が極めて少ないとされる状況からみれば、墓地と考えられる西台畠遺跡とは連続する遺跡ではないものと考えられる。弥生土器包含層の調査の為には官衙遺構検出面が破壊されてしまうことから、今回は十分な調査ができなかつたが、弥生時代の遺構の存在も十分予想される。

XI 5ヶ年調査の総括

1. 調査に至る経過

郡山遺跡は仙台市郡山三丁目13-8に所在する諏訪神社北方の畠地を中心に瓦が散布する地区とさらにその北方の郡山三丁目地内に所在する土師器・須恵器が散布する郡山三丁目遺跡とが連続する形で知られていた。

大正3年、当時、名取郡茂ヶ崎村に属していたこの地区で、煉瓦工場による粘土採掘中に石製品・土師器・須恵器などが発見され、その中に漆液の入った須恵器平瓶が出土したことや、付近の地理的・歴史的環境や地名などから、この地に「郡家」の存在が考察された（註15）。また、これについては仙台市史の中で「北日古代聚落址」（註16）として詳しく報告されている。昭和25年頃にはこの土師器・須恵器の出土地区が、古瓦を出土する郡山遺跡とは別の北目集落遺跡として捉えられていたことが伺えるが、これらの土器出土地は現在の郡山三丁目地内にあたり、方四町Ⅱ期官衙城に位置するものと考えられる。

諏訪神社北方の瓦散布地については内藤政恒・伊東信雄両氏が早くから注目し、出土した重弁蓮華文軒丸瓦の瓦当文様からみて、内藤は平安中期のものであり、名取郡の所在地と推定（註17）、これに対し、伊東は平安初期を降らないものであり、寺院址の存在を推定している（註18）。

昭和54年、郡山三丁目205-1、206-1において宅地造成開発計画がなされ、地権者との協議により、記録保存の事前調査が、仙台市教育委員会により実施された。この調査地区は方四町Ⅱ期官衙の南東コーナー付近に位置しており、ほぼ真北基準による掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土壙などとともに多量の土師器・須恵器・円面鏡などの遺物が出土し、7世紀末から8世紀初頭の官衙跡と推定されるに至った（註19）。

この調査の結果、調査地区を含む一帯に、三町四方程の真北線を基準にした方形地割区画線が推定され、郡山という地名が残っていることなどからも郡衙跡と考えられるに至った。この地区は近年宅地化が急速に進行し、遺跡の現状保存が極めて困難であることから、関係各機関と協議のうえ、昭和55年度から5ヶ年計画で発掘調査を実施することになった。

これまで実施された発掘調査の概要是次のとおりである。

昭和54年度	宅地造成に伴う事前調査	920m ²
昭和55年度	第1～9次	1,344m ²
昭和56年度	第10～22次	1,688m ²
昭和57年度	第23～34次	2,825m ²

昭和58年度 第35~42次	2,164m ²
昭和59年度 第43~49次	2,408m ²
計	11,329m ²

2. I 期 宮 術

I期宮術については、調査が開始された当初はその存在すら全く知られていなかった。しかし、Ⅱ期宮術は真北線を造営基準方向としているが、この真北基準造構群とは明らかに区別される方向の建物跡や材木列が検出されたことによって、初めてその存在が明らかになった。調査2年次の昭和56年度第13次調査で2列の材木列が並行して検出され、次いで、57年度第24次、58年度35次調査でまとまつた造構群が検出され、大規模な宮術造構であることが確認された。それによるとI期宮術は後述するⅡ期宮術・寺院跡のほぼ全城にかかる範囲に広がっているものと考えられ、現段階では南北620m以上、東西400m以上にわたっている。造営の基準方向はこれまで検出された造構の方向がN-28°~34°-Eを示していたことからN-30°-E前後とみていたが、昭和59年度第43次調査で、N-40°-E前後の方向を示す建物跡が検出され、方向性にやや幅がみられる。方向性による造構のグルーピングは可能があるが、この方向性の差異が必ずしも造構の変遷を反映しておらず、造構の重複は多い部分で4回の変遷がみられるが、各小期の建物配置までは明らかにするに至っていない。

宮術を構成する造構群は掘立柱建物跡、竪穴住居跡、材木列、一本柱列、溝跡などであるが第2・24・35・31次調査区でまとまって検出され、現段階では造構群の北限であるが、検出状況からさらに北に延びていく。第2次調査SB14建物跡は桁行が8間以上、総長も15.5m以上と長大な建物で、国衙政府の脇殿ないしは郡衙政府をとり囲んで配される長屋(註20)に比定されるものと考えられ、この地区での造構の在り方は宮術の中心施設とは断定できないが、中心部に極めて近い地区と考えられる。また、建物群の配置は桁柱列を揃えるなど規則性が認められ、整然とした配置がなされたことが伺えるが、造構群全体の範囲が明らかでないことや造構の重複の相互関係が明らかでないことから、建物の配置関係は不明である。

検出された建物跡は全て掘立柱であるが、この地区では倉とを考えられる縦柱建物跡と、官倉と考えられる側柱建物跡が材木列による壁をはさんで、各々まとまっており、倉庫ブロックと宮術ブロックとにわけられる。倉庫ブロックはその範囲が明確でないが、直徑30cm以上、太いものでは70~80cmの柱を使用する建物によって構成され、特に太い柱を使用するものは柱穴の下部に多量の川礫を施設しており、柱の不等沈下を防止する機能を持っていたものと考えられる。また、これらの倉庫建物に使用した太い柱材は多くが抜き取られており、建物廃棄後、他に転用されたものと考えられる。また、官術ブロックは材木列・柱列で開まれ、判明した一区画は東西51~54m、南北60m以上の南北に長いもので、南辺は3回の堀の変遷がみられるが、東辺

は重複がなく、單一期である。南辺では二期の段階で東寄りの位置に、北に張り出しを持つ門が1棟、西辺では一期の段階で四脚門が1棟ついている。この区画内では開みの塀を含めて、2～4回の重複が認められる。さらにこの官衙ブロック内では独立柱建物と竪穴住居が並置されており、これらの竪穴住居は一般集落における住居跡とは明らかに性格を異にするものとみられ、厨・廁屋等の施設と考えられる。

I期官衙については不明な部分が多く、官衙の性格も判然としないが、(1)南北600m以上の広い範囲にわたって遺構群が広がっていること。(2)基準方向が真北から30°～40°東に片寄っていること。(3)官衙の院と倉庫の院がわかれて存在すること。(4)竪穴住居（竪穴遺構）も官衙の構成要員になっていること。(5)官衙内部の区画施設として材木列が多用されていること。などの特徴があり、官衙の存続年代は7世紀の中葉を上限とし、末葉を下限とする7世紀の後半代に限定されるものと考えられる。この中で少くとも3期程の変遷がみられ、次に続くII期官衙との間に、現段階では断絶期間を認め難く、II期官衙の造営に伴い、意図的に取りこわされた可能性が高いものと考えられる。

3. II期官衙

II期官衙は調査当初、現在の地形・地割からみて三町半四方程と推定されていたが、調査の結果、東西428m、南北422mのほぼ方四町の占地を行っていることが明らかとなった。造営の基準方向はN-0°-Sの真北方向をとっている。これまでの調査で外部の状況はその位置・規模・構造についてほぼ判明しているものの、官衙中枢の状況やその他内部の建物配置・変遷については不明な点が多い。

外郭は材木列とその外側の大溝から成り、材木列は遺存状況が良好な南辺の一部によれば、幅2.5m、深さ1.8m程の二段布掘りに直終30cm程のクリ丸材を密接して立て並べており、材は土中に埋設されたものではなく、少なからず地上に上部を出していたものと考えられる。材木はこれまでの4本の抜きあげ観察を行った中では芯持ち材ではなく（註21）、割材を手斧ではつって丸材に仕上げたものである。また、これまでの調査地区の中ではこの材木列は單一期の遺構であり、修築・抜き取りが行なわれた形跡が認められないことから、II期官衙の造営当初から施設されたものかは明らかでないが、官衙の廃絶段階まで機能していたものとみられる。外郭の調査はこれまで第1・7・8・9・11・14・16・18・22・26・42・43・47・49次の計14地区において実施したが、南半部分の調査が主であり、かつ極めて局部的な調査であることから、各辺に付設されたと考えられる門等の建物についてもその位置・数・構造等は一切不明である。しかし、南西コーナーと西辺の南1町20間の位置には、材木列と一体となった榾状建物があり、外郭の各コーナーおよび、各辺の要所にはこのような建物跡が付設されていたことが考えられるが、榾状建物の間隔、門との配置関係、およびこれら建物の性格については不明な点が多い。

材木列の外側には大溝がめぐっているが、材木列との間隔は心心間隔で8.5m～9m程度で、ほぼ30尺とみられる。この大溝は上幅・深さが調査地区により様々であるが、これは断面形が扁平なじ字形ないしは逆台形を呈しており、上部がかなり搅乱・削平を受けていることから、造営良好な地区では上幅5m、深さ80cmを超す部分もあるが、上幅が3m前後の部分もあり、造営当初の出入りもさることながら、後世の二次搅乱等により、一定していないものと考えたい。しかし、上幅に比して浅く、外部からの侵入を防ぐ機能を持っていたとはみられないもので、形式的な区画の溝とみておきたい。大溝内部の堆積土の状況からも底面上に水成堆積と考えられるものが認められず²、雨期に多少の漏水状況はあったものの、恒常に貯水したとは考えられない。あるいは機能期間中に意図的に底をさらいを行ったことにより、水成堆積が認められないことも考えられるが、いづれにしろ、地上に立ち並ぶ材木列に対して、この大溝は補助的な区画施設とみておきたい。また、この大溝内の遺物出土状況は第1層から比較的土器類の出土数が多いのに比して、下層および底面からの出土数が、これまでの調査では極めて少なく、わずかではあるが、1・2層の遺物が接合する状況などから、短期間のうちに人為的に埋め戻されたことも考えられる。大溝の機能的問題および廃絶時の状況については、さらに細部にわたる検討を要する。

官衙内部の遺物については昭和54年度の調査で、南東コーナー付近から、3期程の重複関係をもつて掘立柱建物跡が15棟程検出された（註22）他、第35次調査で、外郭南辺より北に3町の位置で東西方向に延びる一本柱列とその北側に建物跡3棟が重複し、さらに付近から井戸跡が1基検出されたが、その他には既穴住居跡や掘立柱建物跡が散在的にみられるのみで、内部の状況は殆ど解明されていない。官衙中枢のいわゆる政庁は方四町官衙域内でも東西中軸線より北側の北2町には存在しないことが、第24・35次調査の結果ほぼ明らかであり、また、第44・48次調査により、南1町にも政庁と考えられる遺構が検出されないことから、東北地方における城柵官衙遺跡のこれまでの定説通り、政庁が南北中軸上に位置しているものであれば、Ⅱ期官衙の政庁は南2町の範囲内に推定することができよう。

このⅡ期官衙は前述したⅠ期官衙の廃絶後、断続なく造営が開始されたものと考えられ、造営の上限は7世紀末葉、下限は外郭大溝1層出土の土器群、ならびに併設された寺院に使用された瓦の技法・文様などから陸奥国府多賀城跡の創建年代である養老から神龜年間の前後と考えられる。このⅡ期官衙も外郭については5ヶ年の調査で基本的部分については明らかになつたが、外郭付設の建物や政庁を含め、内部の状況が殆んど不明であり、詳細な検討を行なう資料が極めて乏しいと言わざるを得ないが、(1)南側に併設される寺院とあわせ、広範囲な土地区劃の上に造営されていること。(2)ほぼ整備されたと考えられるⅠ期官衙を廃棄し、造営基準方向を真北に合わせて全面的に造営していること。(3)材木列とは言え、整備された外郭施設に比

して、内部施設が極めて散在的であること。(4)存続期間が短かく、國府多賀城の造営時期に終末をむかえ、以後奈良時代後半から平安時代を通じ、人間の生活の痕跡が殆んどないこと。などが特徴としてあげられる。

4. II期官衙併設寺院

II期官衙の南側に、一町隔て、方二町程度と推定されるが、瓦の散布状況から、寺院中枢建物群は推定範囲の中でもその中心部の極めて限られた地区にあるものと考えられる。方二町の推定域は、東限がII期官衙の中軸延長線、西限が官衙西辺延長線、北限が官衙外郭南辺大溝より一町南の掘り割り線であるが、南限は二町ラインよりさらに南にみられる旧河道によって途切れる微高地の端部まで抜がることも考えられる。推定寺域線の調査は西辺で第13次調査、東辺で第15次調査が行なわれたが、西辺は上部攪乱のため不明、東辺では溝跡や抗列が検出されたが断定するに至っていない。また北辺の第33次調査では推定線上で溝跡を検出し、寺域内で若干地山が高まることを確認したが、これも寺域外郭施設と断定するに至っていない。

推定寺院域中心部からは東西32m以上、南北12m以上の範囲で基壇の版築を検出し、これで講堂跡と推定しており、この周辺からは多量の瓦類が出土している。軒瓦は八葉单脊蓮華文とロクロ挽き重弧文によるセットで、一様式のみである。また通常の瓦類にまじって、無文の鷲尾破片が多数出土している。さらに寺院域で検出した非戸跡より、「学生」「寺」銘や写経用定木（裏面に経文を書写）などの木簡が出土しており、寺院の存在を裏づけている。

これまでの5ヶ年の調査は主に官衙の様相を明らかにすることに主眼がおかれたため、この寺院の調査は極めて限られた地区でしか実施されておらず、寺院域はもとより、中枢伽藍の状況も明らかでないが、(1)II期官衙と同一地割に沿って造営されていること。(2)版築基壇による礎石建ち瓦葺きの建物が推定中軸線上にあること。(3)中枢部には鷲尾をのせた建物があること。などが特徴であり、造営年代はII期官衙と同様、I期官衙の終末と考えられる7世紀末葉を上限とし、軒瓦のセット関係が多賀城創建期の瓦より一段階古い様相を示していると考えられることから、8世紀初頭を下限としておきたい。

昭和54年に実施された事前調査を含めて、6ヶ年の発掘調査で、遺跡全面積の約1.5%しか終了しておらず、検討すべき課題は山積しているが、今後は遺構の確認調査の中で、細かな年代検討とあわせ、I期・II期官衙の性格や陸奥国古代史の中での位置づけ等についても考察を加えていく必要がある。

表3 I期宮衙建物跡計測表

建物番号	次数	台		渠			方		備考
		面数	柱間寸法(cm)	総長(m)	面数	柱間寸法(cm)	総長(m)	方	
S B63	1次	3	150~180		2~	150		N-31-E	向き
S B64	*	3	180~200					N-28-E	
S B13	2次	4	180	7.3	2	240	4.9	E-30-S	東西 縦柱。抜取り
S B14	*	8	210	15.5~	3(4)	240(180)	7.2	E-32-S	南北 中抜
S B15	*	1	240		1~	240		N-29-E	東西
S B16	*	3	210					E-39-S	柱列?
S B17	*	2	240~270	5	2	180	3.7	E-30-S	南北
S B31	4次	3	270	8.1	3	210	6.3	N-31-E	中抜
S B32	*	1	260	2.6	1	260	2.6	N-31-E	東西
SB279A-B	24次	4	250~270		2	210		E-32-S	東西 中抜
S B287	*	5	180~210	9.9	2	270~280	5.6	N-34-E	南北 縦柱
S B311	*	3	150+190+150	4.9	1	210	2.1	E-30-S	東西 門、抜取り
S B353	*	1	330	3.3	1	330	3.3	E-33-S	橋?
S B355	*	1	330	3.3	1	330	3.3	E-33-S	
S B278	*	5~	150~170	8.1~	2~	160~180	3.5~	E-32-S	東西
S B237	*	2	235~260	4.9	2	230~240	4.6	N-32-E	(東西) 桁柱。抜取り
S B245	*	2	(250~260)	(5.1)	2	(210)	4.2	N-32-E	(南北) 桁柱。柱穴石數
S B246	*	4	240	9.6	2	210	4.2	E-30-S	東西 中抜
S B256	*	4	190~200	7.7	2	230~240	4.8	E-32-S	東西 橋柱
S B264	*								抜取り。柱穴石數
S B373	*				2	240	4.5	E-32-S	(南北) 柱穴石數
S B344	*	3	270	8.1	2~	270		E-32-S	柱穴石數
SB361A-B	*	1~	240					E-32-S	
S B381	*				(2)	270~380		E-32-S	(南北)
S B424	35次	5	189~237	10.3	4	130~260	7.9	N-33-E	南北 床梁?
S B425	*	5	246~273	12.6~12.9	2	244~270	5.1	N-34-E	南北 中抜
SB432A-H	*	5	210~237	11.2~11.3	2	213~233	4.4	N-34-E	南北
S B421	*	東西2~	210		南北2~	227	E-33-S		
S B420	*	4	212~245	8.9~9.1	2	207~246	4.5	N-33-E	南北 中抜
S B473	*	東西2~	111~180		南北2~	149~190	E-31-S		
S B422	*	6	179~210	11.6	2	245~255	5	N-33-E	南北
S B426	*	2	256~274	5.2	2	162~192	3.5	E-37-N	
S B437	*	3~	220~245		2~	220~270		E-33-S	東西
SB438A-B	*	1	240	2.4	2	80~100 110~120	1.8~2.4	N-36-E	南北 四隅門
S B439	*	5~	210		2	205~219	4.4	N-36-E	南北
S B440	*	3~	190~210		2	200~220	4.2	N-34-E	南北
S B454	38次	3~	160~186		2~	186		E-30-S	
S B490	43次	2~	200	7~	2~	315	6	N-35-E	南北 桁柱、東西に廊?
S B507	44次	5	185~205	10	2	200~232	4.5	N-31-E	南北
S B527	*	2	171~201	4	2	179~220	4	N-35-E	
S B528	*	4	133~180	6.7	2	157~191	3.6	N-32-E	東西
S B534	*	3	240~247	7.3	2	216~233	4.5	N-36-E	東西
S B397	48次	2~	180	3.6	2	185~255	3.3	N-33-E	南北
S B604	*	3~	200~230	6.3	2~	(180)	3~	N-33-E	東西

表4 二期宮衙・寺院建物跡計測表

建物番号	次数	柱 行		梁 行		方 向		備 考
		間 数	柱間寸法(cm)	総長(m)	間 数	柱間寸法(cm)	総長(m)	
1号A・B	34次	5	248~280	13.2	3	172~195	5.5	E-1~N 東西 中抜、抜取り
2号A・B	*	2	230~260	5.1	2	200~240	4.4(4.1)	E-1~N (東西) 棚柱
3号	*	2~	270	5~	3	210	6.3	E-6~N 中抜
4号	*	3~	240	5.8~	2	210~230	4.7	N-1~W 西北 中抜
5号	*				3	220	6.6	E-3.5~N (南北) 抜取り
6号A・B	*	2~	240					E-3~N
7号	*	4~	250~270	9.4~	2~	280~300	2.8~	N-4~E 南北 中抜
8号	*	3~	210	4.2~	2	200	4	N-6~E (東西) 中抜
9号	*	4~	210~240	6.9~	2~	(210)	2.5~	N-3~E (南北) 中抜
10号	*	3~	(270)	7.3~	2~	(240)	2.6~	N-4~E (南北) 中抜
11号	*	2~	(240)	4.6~	2	(210)	4.2	N-5~E (南北) 中抜
12号	*	4~						(N-4~E) 7号と同列、同方向
S B51	7次	(2)	210	(4.2)	2	220	4.2	N-0~S 外部南北溝跡建物
S B100	12次			32~			12~	(E-2~S) 建築基礎
S B214	*	6	180~200	11.1	2~	225~240	5.3~	E-0~W 東西
S B163	15次	5~	190~220	10.2	2	180	3.6	N-5~E 中抜
S B134	16次	2~	180~205	4~	2	180~205	4	N-0~S 外部東西溝跡建物
S B208	20次							
S B113	13次	3~	250	6.2~	2~	250	3~	N-3~E 中抜
S D114	*	3~	210	5.2~	2	180	3.6	N-0~S 南北 中抜
S B115	*							
S B302	24次	1~	330				E-0~W	
S B265	*	1~	(300)				E-6~S	
S B434	35次	3~	172~208	5.3~	2	230~235	4.7	E-0~W 東西 中抜
S B435A・B	*	3~	150~230	4.6~	2	200~221	4.1	E-0~W 東西 中抜
S B526	44次	3~	252~274	6.9~	2	243~249	4.9	N-3~E 南北 中抜

表5 小柱穴建物跡計測表

建物番号	次数	相 行		梁 行		方 向		備 考
		間 数	柱間寸法(cm)	総長(m)	間 数	柱間寸法(cm)	総長(m)	
S B116	13次	2~	270		2~	370		N-19~E 中抜
S B234	24次	3	150~160	4.7	2	190	3.8	N-45~E 南北 棚柱
S B235	*	3	160~220	5.7	2	170~200	3.7	E-32~S 東西 中抜
S B282	*	3	110~160	4.1	2~	160~170	N-9~E	
S B383	*	3~	150~280	7.2~	2	180~190	3.5	N-36~F (南北) 中抜
S B300	*	3	190~230	6.2	2	180~210	3.7~4	E-32~S 東西 中抜

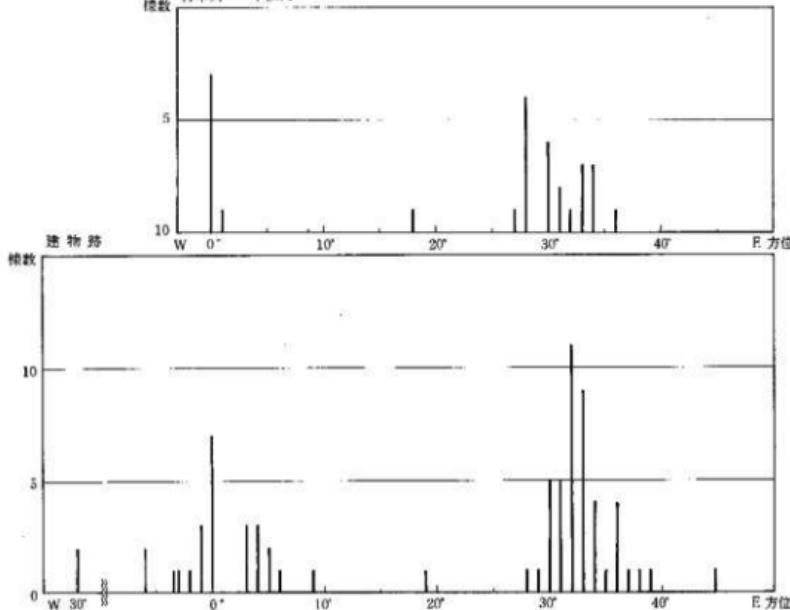
表6 材木列計測表

造樹番号	次數	在 前 方 向			備考
		幅(m)	高さ(m)	方位(度)	
S A33	古木	250	30~100	25	29 E-0°~W
S A45	2.0m	50~60	—	15~20	26 N-1°~E
S A74	11.3m	60	75	25	33 N-0°~S
S A128	13.3m	32~96	30~45	10	36~106 E-25~S
S A136	*	90~190	50~60	15~20	40~100 E-28~S
S A138	16.3m	70~80	110~130	25	28 N-0°~S
S A155	18.3m	40	35	25~29	36 N-0°~S
S A177	13.3m	40	40	10~15	26 N-0°~S
S A225	24.3m	50~75	85~45	10~15	10~20 N-34~E
S A272	25.3m	55~105	60~70	10~20	30~40 E-28~S
S A276	24.3m	50~60	12~32	10~15	15~50 E-31~S ?
S A277	*	30~70	80~90	15~30	20~65 E-30~S
S A292	*	50~70	20~40	12~30	30~110 E-30~S
S A306	*	50~70	50~60	10~15	30~40 E-31~S
S A408	33.3m	30~45	20~50	10~15	13~50 N-34~E S A333と一様
S A433	*	35~55	35~40	10~20	20~40 N-38~E S A408と一様
S A492	*	45~60	30~37	20	25~40 N-38~E
S A577	48.3m	80~110	80	13~20	25~35 N-32~E
S A578	*	80~90	90	15~25	30~45 N-34~E

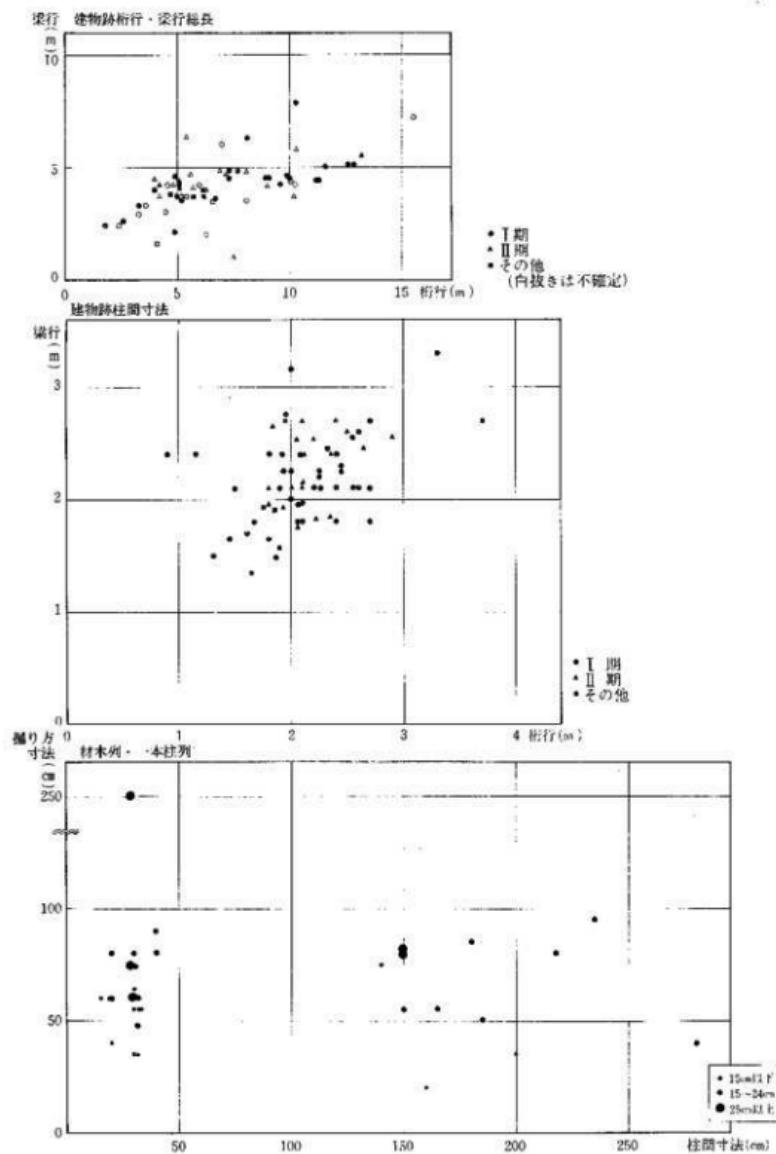
表7 一本柱列計測表

造樹番号	次數	在 前 方 向			備考
		幅(m)	高さ(m)	方位(度)	
S A34	4次	60~110	60~73	15~20	170~190 N-31~E
S A64	1次	40~70	15~30	15~20	120~200 N-38~E
S A123	3次	30~60	30~50	25	150 N-0~S
S A215	15次	40~60	8	20	140~190 E-0~W
S A218	13次	60	10	13~20	280 N-18~E
S A329	24次	60~75 幅 100	10~100	25	150 E-30~S S A302と一様
S A343	*	60~75 幅 100	70~100	25	150 E-30~S S A358と一様
S A383	*	30~40	20	10	180~220 E-32~S
S A394	*	30	10~15		150~170 E-31~S
S A396	35次	80~110	20~75	15~20	22~240 E-0~W
S A423	60~80	20~30	15~25	210~400 N-20~E S A302と一様	
S A475	50~100				150~300 E-27~S

材木列・一本柱列



第41図 建物跡・材木列・一本柱列方向グラフ



第42図 建物跡・材木列・一本柱列計測グラフ

注

- 註1 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957
＊ 「陸奥国分寺跡出土の丸底盆をめぐって」『山形県の考古と歴史』 1967
- 註2 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡I」 仙台市教育委員会 1981 P・29の第18回第7次調査区出土遺物大河内20・22・23・24は、遺物登録番号E-19・20・21・22に対応する。
- 註3 「清水遺跡」 宮城県文化財調査報告書第77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」宮城県教育委員会 1981
- 註4 「御物堂遺跡」宮城県文化財調査報告書第83集「東北自動車道遺跡調査報告書VI」宮城県教育委員会 1982
- 註5 「多賀城跡」庁跡一回目調査報告書 宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所 1980
- 註6 内藤政恒 「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(Ⅲ)」『歴史考古』第12号 1964
- 註7 「名生越遺跡I」 多賀城関連遺跡発掘調査報告第6回 宮城県多賀城跡調査研究所 1981
- 註8 「腰浜廃寺」 福島市史編纂準備委員会 1965
- 註9 「黒木田遺跡」 福島県柏崎市教育委員会 1977
- 註10 仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡III」IV 4. P.48~53 仙台市教育委員会 1984
- 註11 ＊ 第64集「郡山遺跡IV」III 4. P.52 仙台市教育委員会 1983
- 註12 註2と同じ
- 註13 仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡II」V. P.50~55 仙台市教育委員会 1982
- 註14 ＊ V. P.14~21 ＊
- 註15 山中 椎 「漆波を容れたる陶器」『考古学雑誌』第五卷第五號 1915. 1
- 註16 伊東信雄「仙臺市内の古代遺跡」「仙台市史」第3巻別編1 1950. 8
- 註17 註16と同じ
内藤政恒「東北地方發見の重輪蓮花文鏡瓦についての一考察」『實芸』第22回
- 註18 註16と同じ
- 註19 仙台市文化財調査報告書第23集「年報I」「郡山遺跡発掘調査概報」 仙台市教育委員会 1980
- 註20 竹内理三編 「平安遺文」第9巻「上野国交替實錄帳」のうち新田郡の記載条項に
都應
- 東□□壹字 四長屋壹字 南長屋壹字 一丁口壹字 公文屋壹字 房 壱字
- とあり、郡には東西南北に1棟づつ長屋と称する建物があったことが記載されており、発掘調査では筑後國御原郡家跡と推定される福岡県三井郡小郡遺跡、美作國久米郡家跡と推定される岡山県久米郡宮尾遺跡をはじめ、全国各地の郡街跡と推定される遺跡での発見例がある。
- 註21 「郡山遺跡I」V.4 (P. 30) の中で、……樋木は材木芯材を加工して……と記述したがその後、年輪測定のスライスサンプルをとった際の観察の結果、芯持ち材ではなく、割材であることが判明したことから、ここで訂正しておきたい。
- 註22 註19と同じ

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

月 日		担当職員	主 催
4. 27	第43次調査報道発表	早坂・金森	
4. 28	現地説明会	木村・金森	
5. 29	遺跡見学会	木村・長島	中田老人クラブ
6. 5・7	郡山中学校郷土クラブ見学会	木村	
6. 6	遺跡見学会	木村	大阪・舍廊房
6. 8	遺跡見学会	木村・長島	八木松小学校
6. 14	講座「郡山遺跡の発掘調査」	木村	東長町小学校 社会学級
6. 14	遺跡見学会	木村	八木山小学校
6. 15	仙台市施設見学会	木村	仙台市
6. 15	遺跡見学会	木村	中田老人クラブ
8. 2	遺跡見学会	長島	中田中学校
8. 10	遺跡見学会	木村	
8. 21	仙台市文化財保護委員見学	木村	
10. 7	東北史学会「郡山遺跡の調査」	木村	東北史学会
10. 18	遺跡見学会	木村	宮高教歴史部会
11. 16	遺跡見学会	木村	長町公民館

仙台市博物館 文化財ビデオ撮影 4月26・27日、8月20・30日、10月8・9日

東北放送「伸びゆく仙台」「幻の城櫓 郡山遺跡」 10月27日

2. 主 催 事 業

文化財講座「郡山遺跡と多賀城」

期 日 7月14日(土)

会 場 東長町小学校

講 師 東北歴史資料館研究部長 桑原 勝郎

参加人員 120名

考古資料展「幻の城櫓—郡山遺跡展」

期 日 8月2日(木)～7日(火)

会 場 仙台市民ギャラリー

観覧者数 827名

展示内容 床面積約220 m²の会場に写真・解説・図等のパネル約60枚、出土遺物160点の他、材木辦の用材、現況模型等を展示した。

また、これまでの調査成果をまとめたパンフレット（B5判、8ページ）を作製し、観覧者に無料配布した。

公開シンポジウム「古代東北と郡山遺跡」

期 日 8月4日(土)

会 場 読売ホール

コメンティター 伊東信雄 東北学院大学教授

岡田茂弘 国立歴史民俗博物館教授

桑原滋郎 東北歴史資料館研究部長

進藤秋輝 宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長

司 会 工藤雅樹 宮城学院女子大学教授

参加人員 150名

文化財めぐり「郡山遺跡と多賀城跡」

期 日 8月18日(土)

コース 郡山遺跡、東北歴史資料館、多賀城跡

講 師 東北歴史資料館 桑原滋郎

仙台市教育委員会 木村浩二

参加人員 50名（中学・高校生対象）

文化財めぐり「古代の役所と寺院跡をたずねて—郡山遺跡」

期 日 10月14日(日)

コース 郡山遺跡内（全行程徒歩）

講 師 木 村

参加人員 70名

2. 調査成果執筆

『郡山遺跡の性格について』『東北史学会』 木村

『宮城県郡山遺跡』『日本考古学年報35』1982年度版 日本考古学協会 木村・長島

3. 調査指導委員会の開催

第11回郡山遺跡調査指導委員会 7月23日

○昭和59年度の調査計画について

○第44次調査の中間報告

付章 檻木材による年輪年代学の研究

奈良国立文化財研究所 光谷 拓実

はじめに

郡山遺跡では、丸く加工した材を密に立て並べた柵木列の遺構が発見されている。柵木列は、遺跡の外郭線上に設けられた施設で、平均直径約25cmの丸太材が使用されている。したがって遺存状況のよい発掘区では、多量の柵木材の出土が期待できる。このような遺跡は、多くの資料を必要とする年輪年代学の研究に好適な資料を提供し、成功する可能性を秘めている。

当研究所は、5年前から日本における年輪年代学の確立を目指して現生木、古建築部材、半城宮跡、藤原宮跡等の遺跡から出土した柱根類を主な資料の扱として年輪年代学の研究を進めってきた。これまでのところ、ヒノキとコウヤマキの2樹種が本研究に適していることが判明した。さらに、その他の樹種についてもその可能性について検討している。

1982年3月、1984年5月の2度にわたり、仙台市教育委員会より郡山遺跡出土の柵木材4点を送っていただき、年輪年代学の研究をおこなう機会を得た。今回は、柵木材の使用樹種を明らかにし、年輪年代学が成功するかどうかその可能性について調べた結果の概略を報告する。

I. 年輪年代学

肉眼でヒノキ、スギ、マツなどの針葉樹材の横断面（木口面）をみると、色調の濃淡によつて1本1本の生長輪を認めることができる。これが年輪である。この年輪をよく見ると、広い年輪幅の年があつたり、狭い年輪幅の年がある。年輪幅は樹種、樹齢、立地条件、気象条件、病害虫の発生、結実などによって影響を受ける。なかでも、気象条件の変動は年輪構成に大きくかかわり年輪幅に反映される。しかも他の要因にくらべて広い地域にまたがり、同年代の同時期に生育した樹木ならば、樹種ごとに共通する変動パターンを描がくことが知られている。この様な性質をもつた樹種ならば、年輪幅の変動パターンを手がかりにして同年代に生育した木材かどうかの判定をおこなうことができる。このことから、現生木、古建築部材や遺跡出土木材などから年輪データを収集し、同じ年輪変動パターンをもつ部分を照合しながら得られる限りの最古の資料の時代までさかのぼって、年輪に実年代を与えることができる。この様にして年代づけされた標準年輪グラフが準備されると、古建築部材や遺跡出土木材などの年代未知の資料に実年代をあたえることが可能となり、これを手がかりに遺跡の年代、古建造物や板絵などの年代を推定できる。また、こうして年代づけされた年輪は、過去何千年前までさかのぼろうと毎年の季節的な気象状況を記録しており、気候復元が可能となる。こうした研究が年輪年代学であり、年輪気候学である。

従来、この種の組織的研究は1,900年代のはじめにアメリカでおこなわれ、今日ではヨーロッパ各国を中心に世界20ヶ国以上で実施されており、広汎な分野で多くの成果をあげている。

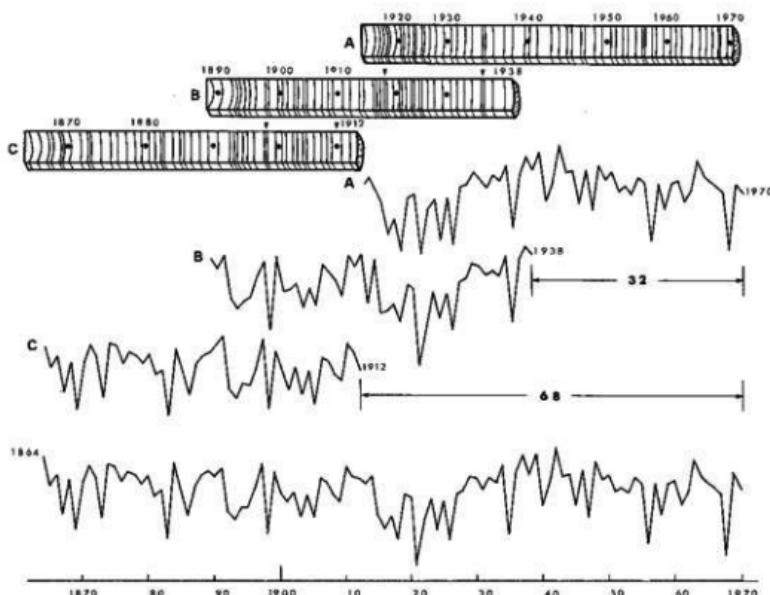


図-1 年輪年代学の原理

II. 年輪年代学の原理

図-1は、年輪年代学の原理を模式的にあらわしたものである。右上の資料Aは、1970年秋に伐採された樹木から採取したもので、最終年輪の年代は明らかである。年輪幅の測定は、外側から中心に向って順次精確に読みとり、下図のような年輪グラフを作成する。つぎに、Aより古い建物からBの資料を得たとする。これもAと同様に年輪幅を測り、年輪グラフを作成してAと重ね合わせ、両者の年輪グラフのパターンが最もよく類似しているところを見つけ出す。この場合、Bのグラフは1938年で一致している。この結果、AとBの資料から1970年から1879年までの年輪グラフができたことを示している。同様にして、Bより古い建物からCの資料を得たとする。BとCのグラフのパターンは、1912年で一致している。従って、A、B、Cの3資料から1970年から1864年までの年輪グラフができたことを示している。こうした一連の作業をクロスデーターティング(crossdating)という。このように伐採年代の明らかな資料をもとにし、年代未知の資料をつぎつぎに重ね合わせていくことにより得られる限りの最古の年輪にまで実年代を与えることができる。ちなみにアメリカでは、現代から8200年前まで、西ドイツでは6000年前までの標準年輪グラフが完成しているという。

III. 資料と方法

1) 檜木材の樹種と年輪グラフの作成

柵木材4点の樹種は、鑑定の結果すべてクリ (*Castanea crenata* S. et Z.) である。(写-1)。クリ材は、多賀城跡でも多量に出土している。世界的にみて、年輪年代学の研究に用いられている樹種は、年輪界の明瞭な針葉樹が主であるが、ヨーロッパでは広葉樹のなかでも比較的年輪界の明瞭なカシ類 (*Quercus petraea*, *Quercus robur*) を用いて成功している。クリ材は、環孔材で年輪界は明瞭である。その分布は、北海道（西南部）、本州、四国、九州にかけての広い地域にまたがり、しかも樹齢が長く遺跡からの出土例も多い。

柵木材4点は、良好な年輪データを得るために下端から約10cm上りのところで輪切りにしたものである。ここで4点を仮にA、B、C、Dとする。AとBはともに心去り材で、CとDは心持ち材である。材の直径は、Aからそれぞれ28cm、25cm、28cm、25cmである。材自体の遺存状況は良好であるがすでに1,000年以上も地中で経過しており、その色調は暗黒色をしている。その為、切断した木口面から直接年輪幅を測ることは困難であることがわかった。そこで、4点とも2~4方向の測線を設定したのち、これにそってカッターナイフ等で薄く削り、つぎに白いチョークの粉末を塗布した。粉末は、年輪界にそって配列している大道管や孔隙外の小道管に入りこむ結果、年輪界は明瞭となり、測定しやすくなつたことを報告しておく。

年輪幅は、中心からどの方向を測るにしても毎年の生長量にはバラツキがある。この為、資料の形態にもよるが基本的には、2方向以上の測線を設け、各測線の測定結果を各年ごとに合計し、算術平均したものを年輪データとして用いることにした。年輪幅の測定は、アメリカ製の年輪読取器（ヘンソン社製、双眼実体顕微鏡付、0.01mmまで読みとり可能）を使って、外側の年輪から測定を開始して中心に至る。測定データは、直ちにコンピュータに入力し年輪幅の変動グラフを作成する。

年輪グラフの表現法には、いくつかの方法があるがここではヨーロッパの例にならい片対数グラフを用いることとした。このグラフは、横軸には5mm間隔で左から右に向ってふつうの数列で年代を入れ、縦軸はmmであらわした年輪幅の対数値をプロットしたものである。このグラフの利点は、広い年輪幅は相対的に縮小され、狭い年輪幅は拡大される結果、微細な年輪幅の変化を表現するのに適している。グラフ用紙は、半透明のトレース紙が便利である。

2) 年輪パターンの相關分析

相互の年輪パターンの類似度を肉眼で判断するのは、主観的な要素が入りこみやすく客觀性に欠けるきらいがある。そこで当研究所では、この作業にコンピューターを使って自動的に打ち出した結果をもとに、透視台の上で相互の年輪グラフを重ねあわせて肉眼的にその重複位置を決定する方法をとっている。コンピューターによる年輪データの解析法は、時系列分析の手

順に従うことが多い。

年輪幅は、同年度に形成されたものでも樹種、樹齢、各種環境条件の違いにより差が生ずるためにこうしたばらつきをすこしでも除去し標準化する必要がある。この標準化処理には、各種の方法があるが、ここでは不規則な変動を除去して大きな周期を検出するのに適した5年移動平均法を採用した。この基線で標準化した年輪指標をもとに相関の有無を検討した。

年輪指標 (X_i) は、次式によって求まる。

$$X_i = 500c / (a+b+c+d+e) \quad 1)$$

このとき、 a 、 b 、 c 、 d 、 e は連続する年輪データである。したがって X_i は、連続する5年間の平均値と c すなわち3番目の測定値との百分比である。次には、この計算を1年ずつずらしながら行い、順次各年における百分比を求めていく。ここで得られた値は、自然対数 $\log e$ に変換し、相関係数 r を計算する。相関係数 r は次式によって求まる。

$$r = \frac{\sum ixy - N\bar{x}\bar{y}}{\sqrt{(\sum ix^2 - N\bar{x}^2)(\sum iy^2 - N\bar{y}^2)}} \quad 2)$$

次いで、こうして求めた相関係数 r の有為性を調べるために t 検定をおこなった。

$$t = r \sqrt{(N-2)/(1-r^2)} \quad 3)$$

ヨーロッパにおける研究では、 t 値が 3.5 以上ならば 2 つの年輪データの間に相関があるとみなしている。このときの危険率は 0.1% である。そこで実際に 2 つの年輪データを比較した場合、 t 値が 3.5 以上をしめす位置が数回以上あることが少なくない。こうしたときには、最大の t 値を示すところが 2 つのグラフの重複位置であるとみなす。しかし、最大の t 値が必ずしも真的重複位置を示すとはかぎらない。最終判断は、コンピューターで検出した結果をもとに、透視台の上で 2 つのグラフを重ねあわせて肉眼的に再確認する必要がある。

IV. 結果と考察

柵木材 4 点の年輪数は、A-179年、B-134年、C-65年、D-86年であった。4点のうち、比較的安定した生長パターンを示したもののは A である。そこで、A の年輪データを基準にして他の 3 点との相関係数を調べ t 検定をおこなった結果を表-1 に示した。このうち特に図-2 は、樹齢が 100 年をこす良好なデータを得ることができた A と B との重複位置を示したもので

表-1 資料Aとのt値表

遺跡名	資料番号	樹齢	t 値	最外年輪との差	樹種名
CORIYAMA SITE	B	134	4.11	53	クリ
※	C	65	4.13	62	クリ
※	D	86	4.49	112	クリ

ある。資料4点の相関は、Aを基準パターンとした場合いずれも有効であることが判明した。資料4点のうち最も新しい年輪をもつAの最外年輪とBとの差は53年、Cとの差は62年、Dとの差は112年とでた。これは、柵木材4点がそれぞれ丸く加工されており、さらに腐朽程度がちがうことなどから生じた年輪差と考えられる。

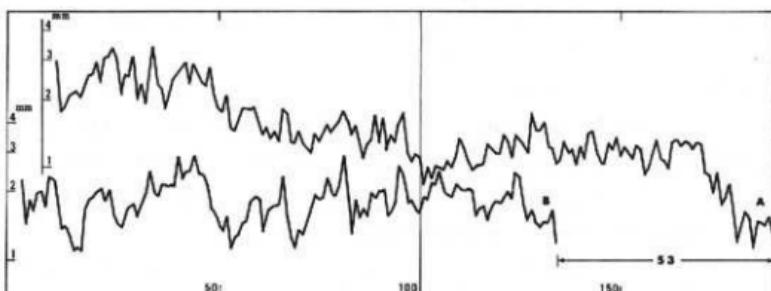


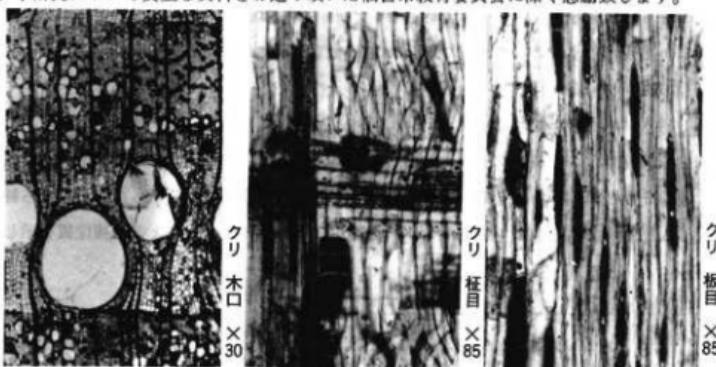
図-2 資料AとBとのクロスデーターティング

むすび

以上述べたことは、クリ材4点から年輪年代学が可能かどうかを検討した結果である。資料数が少ないながらも、クリ材が本研究に適した樹種であるとの若干の見通しを得るにいたった。今後、資料数を増やして同様な検討をおこなっていくことが必要である。さらに、クリ材による共通な年輪パターンの地域的な広がりや年輪幅と気候との関係が究明されなければならない。

最後に、本研究について貴重な資料をお送り頂いた仙台市教育委員会に深く感謝致します。

写-1
参考文献



- 1) M. G. L. Baillie & J. R. Pilcher : "A Simple Crossdating Program for Tree-Ring Research", TREE-RING BULLETIN, vol. 33, (1973)

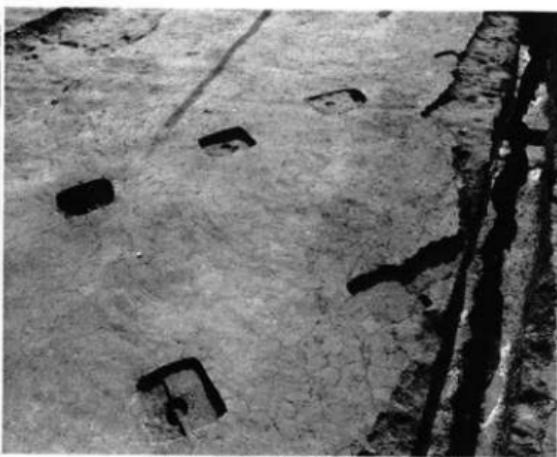
写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真



図版2 第43次調査区全景(北より)



図版4 第43次調査区 S B 490建物跡(東より)

図版3 第43次調査区
S A 33材木列・
S B 490建物跡(西より)

図版 5 第44次調査区(東)
全景(西より)



図版 6 第44次調査区(東)
全景(東より)



図版 7 第44次調査区(東)
東半全景(南より)





図版 8 第44次調査区(東)
西半全景(南より)

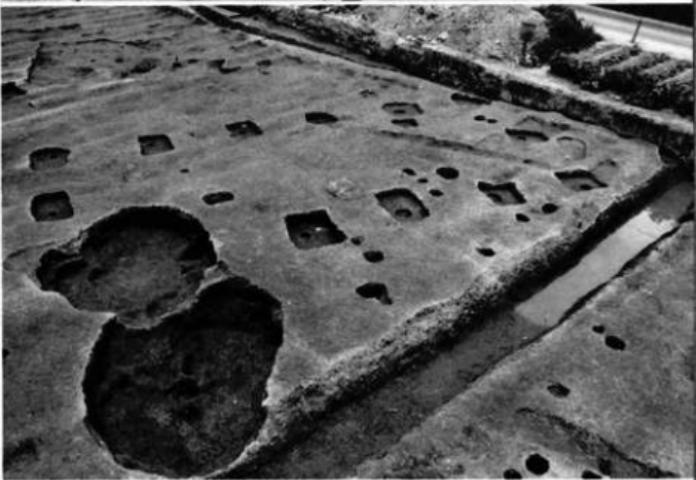


図版 9 第44次調査区(東)
東端全景

図版10 第44次調査区
SB 534建物跡
(南より)



図版11 第44次調査区
SB 534建物跡
(東より)



図版12 第44次調査区
SB 534・507・528
建物跡(南より)

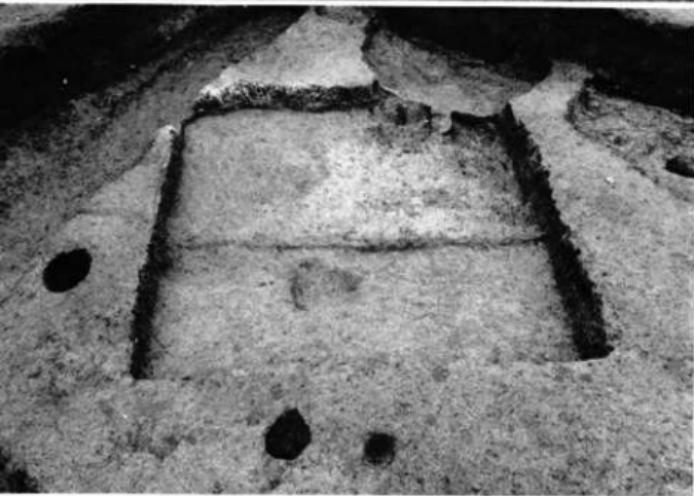




図版13 第44次調査区
S B 526建物跡
(北より)



図版14 第44次調査区
S B 527建物跡
(北より)



図版15 第44次調査区
S I 498住居跡
(西より)

図版16 第44次調査区(西)
全 景



図版17 第44次調査区(西)
東半全景

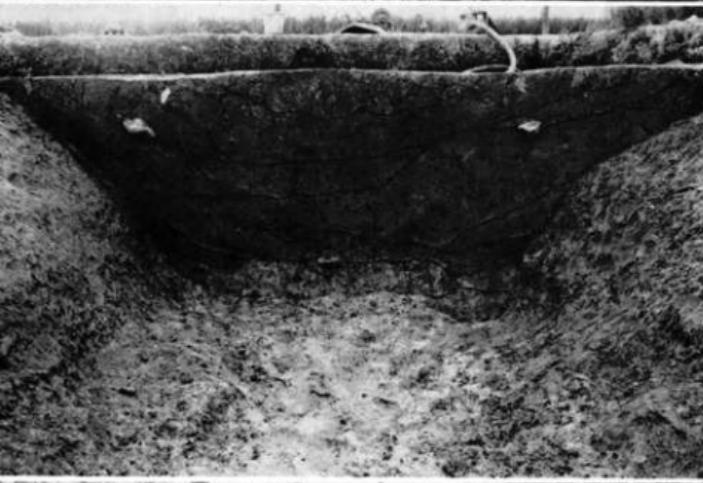


図版18 第44次調査区
S I 549住居跡
(東より)





図版19 第44次調査区(西)
SD 536・SD 552溝跡



図版20 第44次調査区
SD 552溝跡土層
断面(北より)



図版21 第44次調査区
SD 536溝跡土層
断面(北より)



図版22 第44次調査区
S X 546
性格不明造構
(西より)



図版23 第45次調査区
全 景



図版24 第46次調査区B区
全 景 (東より)



図版26 第46次調査区
SD532清跡遺物
出土状況(北より)



図版27 第47次調査区
全 景



図版28 第48次調査区
北半全景(東より)





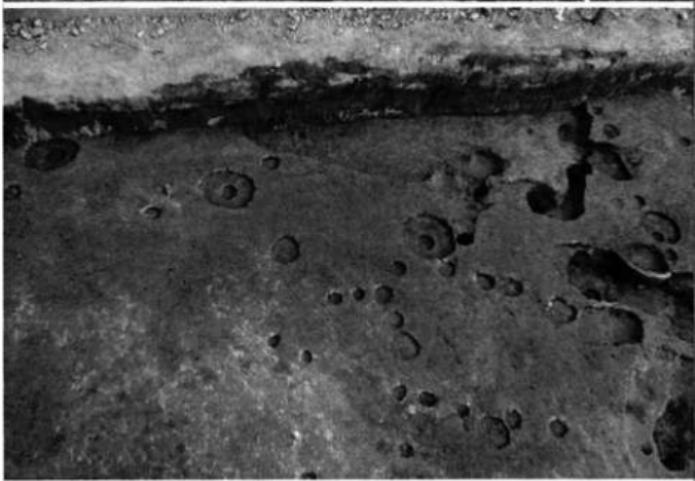
図版29 第48次調査区
北半全景(西より)



図版31 第48次調査区
S B 597建物跡
(南より)



図版32 第48次調査区
S B 604建物跡
(南より)

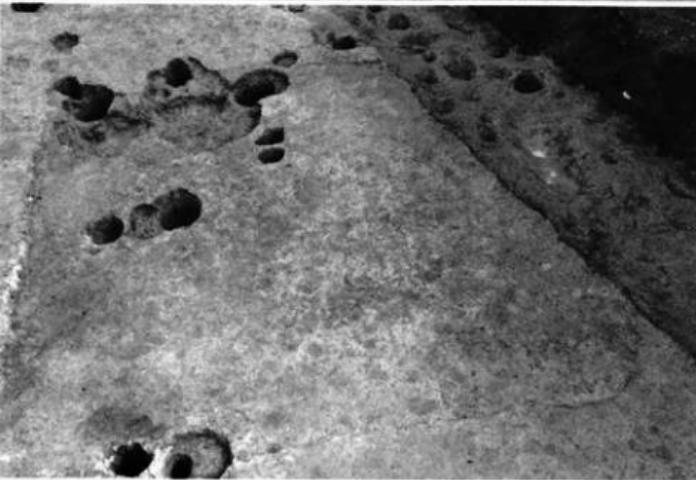


図版33 第48次調査区
S I 580住居跡
(北より)





図版34 第48次調査区
SI 581住居跡遺物
出土状況（北より）

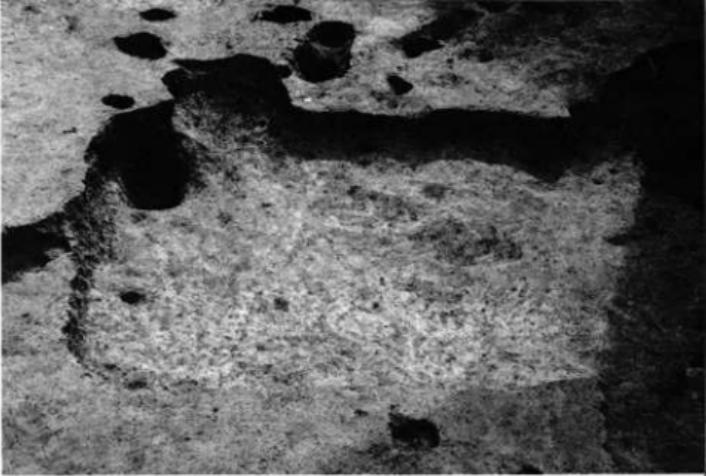


図版35 第48次調査区
SI 581住居跡
(西より)



図版36 第48次調査区
SI 586住居跡
(北より)

図版37 第48次調査区
SI 587住居跡
(西より)



図版38 第48次調査区
SI 586・587住居跡
(北より)



図版39 第48次調査区
SI 588住居跡
(西より)



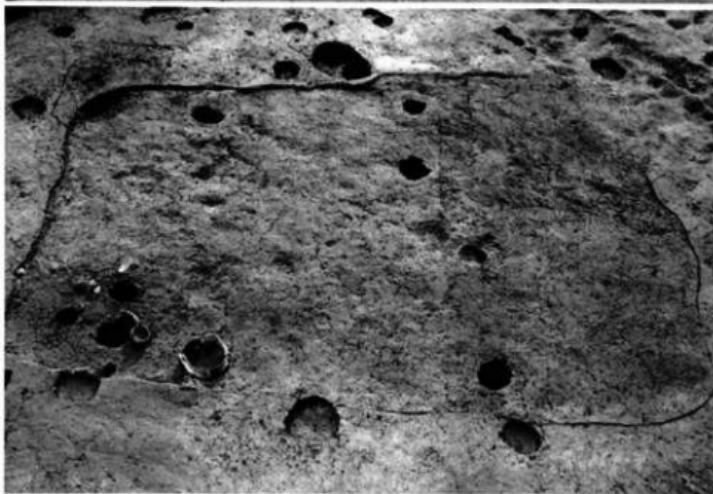
図版40 第48次調査区
S I 1590・591・593・
595住居跡(北より)



図版41 第48次調査区
S I 598住居跡
(南より)



図版42 第48次調査区
S I 600住居跡
(北より)



図版43 第48次調査区
SI 600住居跡
遺物出土状況
(北より)

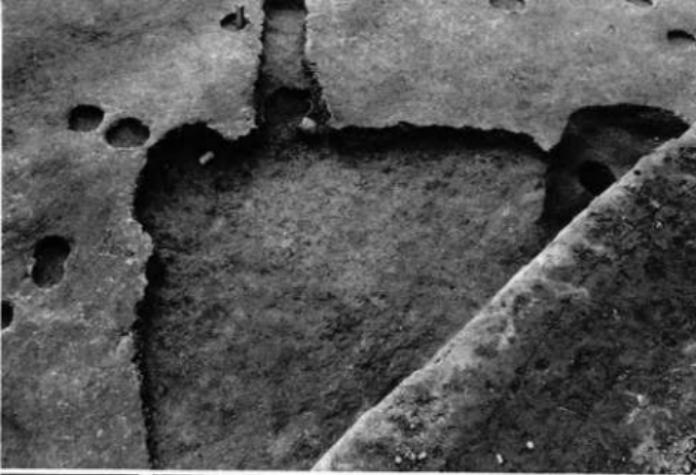


図版44 第48次調査区
SI 601住居跡
(南より)



図版45 第48次調査区
SI 603住居跡
全 景 (南より)





図版46 第48次調査区
SI 606住居跡
(北東より)



図版47 第48次調査区
SI 607住居跡
(北より)



図版48 第48次調査区
SE 537井戸跡
(西より)

図版49 第48次調査区
S A577材木列
(南より)



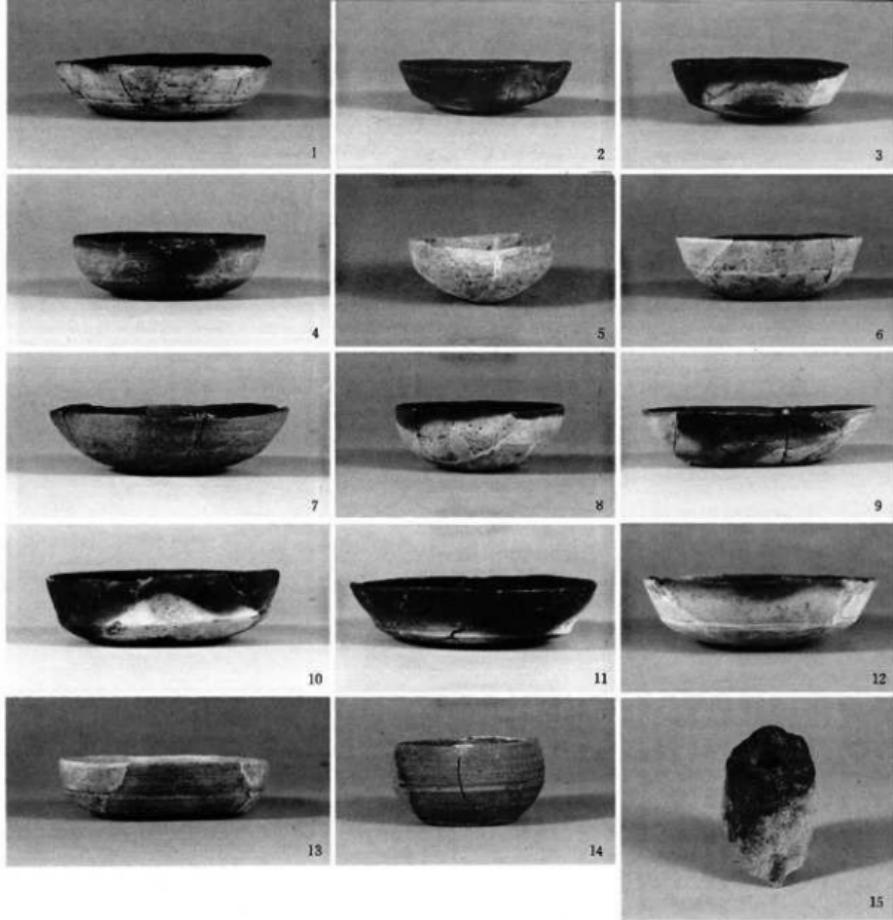
図版50 第48次調査区
S A578材木列
(南より)



図版51 第48次調査区
S A 577・578材木例
(南より)

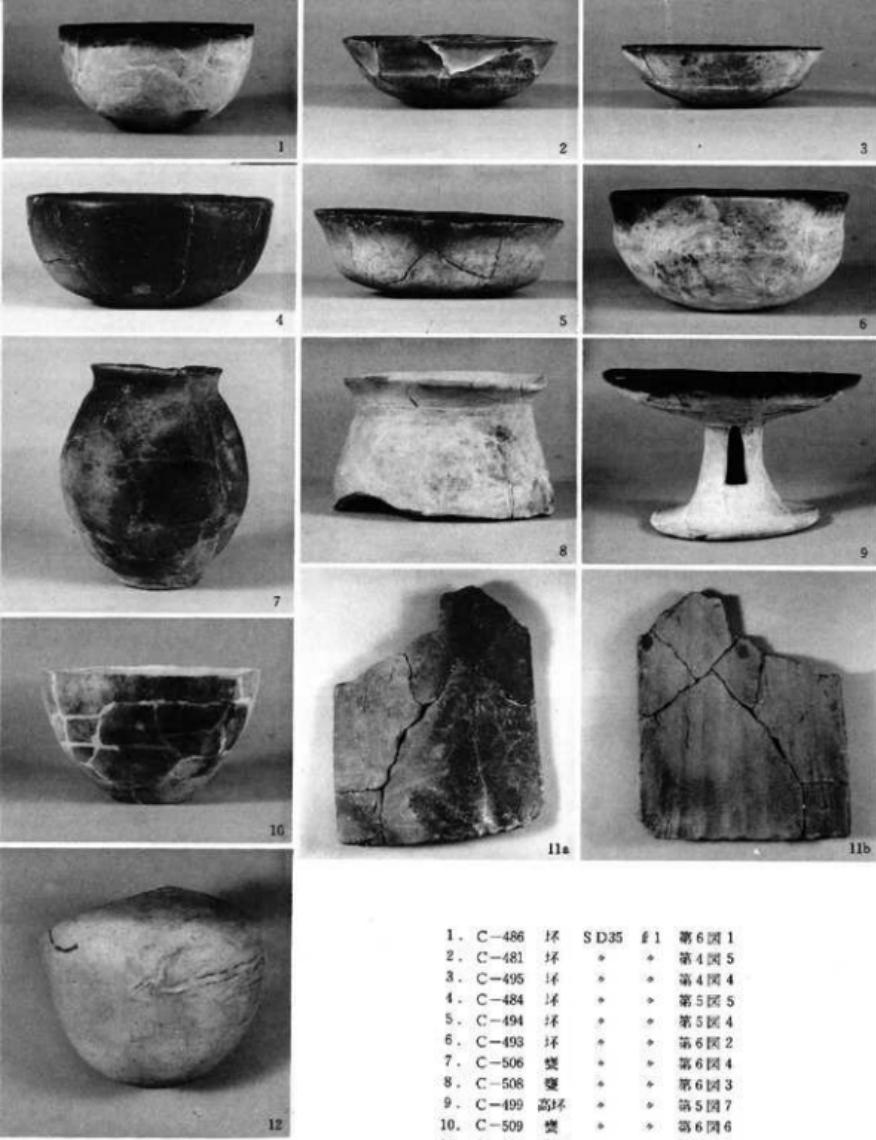


図版52 第48次調査区
S A 577・578材木例
(北より)



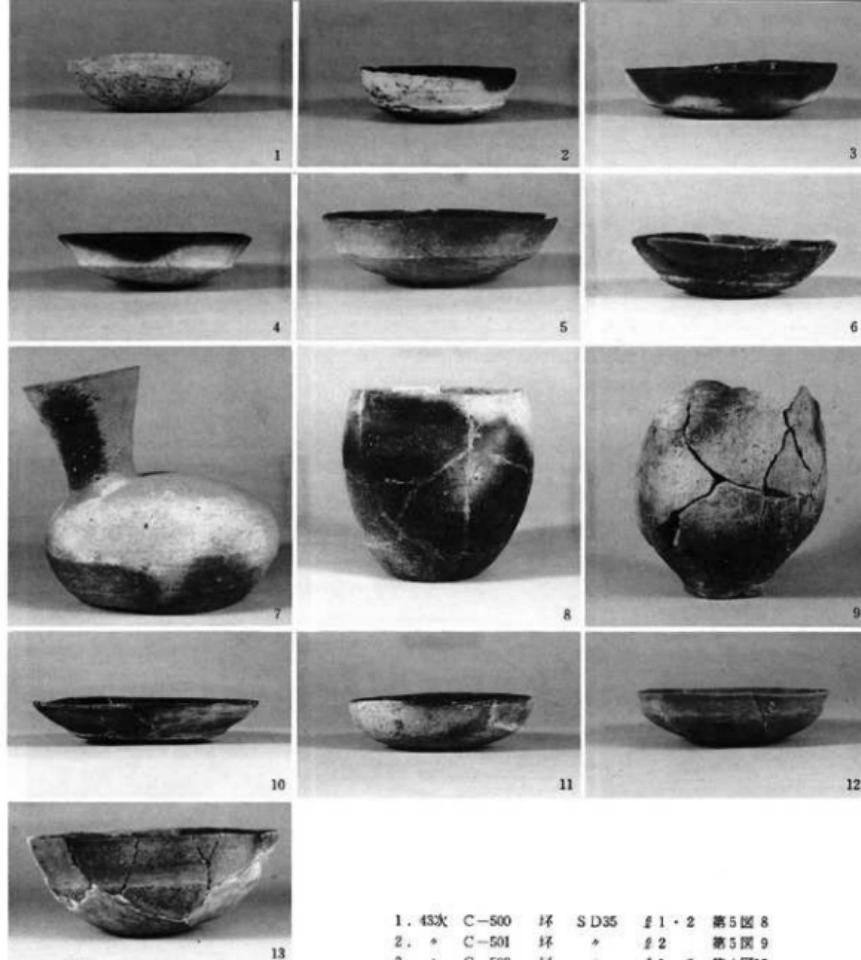
- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. C-479 罐 SD35 #1 | 9. C-480 罐 SD35 #1 |
| 2. C-483 罐 * | 10. C-491 罐 * |
| 3. C-496 罐 * | 11. C-485 罐 * |
| 4. C-488 罐 檻面 | 12. C-497 罐 * |
| 5. C-492 罐 * | 13. E-223 罐 * |
| 6. C-482 罐 * | 14. E-224 罐 * |
| 7. C-487 罐 * | 15. P-12 刃口 * |
| 8. C-498 罐 * | |
- 第4图 9 第4图 11
 第4图 1 第4图 6
 第4图 8 第4图 14
 第4图 13 第4图 7
 第4图 2 第5图 1
 第4图 12 第5图 2
 第5图 3 第5图 3

图版53 第43次調查区出土遺物



- | | | | | |
|-----------|----|-------|-----|-------|
| 1. C-486 | 环 | S D35 | # 1 | 第6回 1 |
| 2. C-481 | 环 | * | * | 第4回 5 |
| 3. C-495 | 环 | * | * | 第4回 4 |
| 4. C-484 | 环 | * | * | 第5回 5 |
| 5. C-494 | 环 | * | * | 第6回 4 |
| 6. C-493 | 环 | * | * | 第6回 2 |
| 7. C-506 | 甕 | * | * | 第6回 4 |
| 8. C-508 | 甕 | * | * | 第6回 3 |
| 9. C-499 | 高环 | * | * | 第5回 7 |
| 10. C-509 | 甕 | * | * | 第6回 6 |
| 11. G-22 | 平瓦 | * | * | 第6回 7 |
| 12. E-222 | 甕 | * | * | 第6回 5 |

図版54 第43次調査区出土遺物



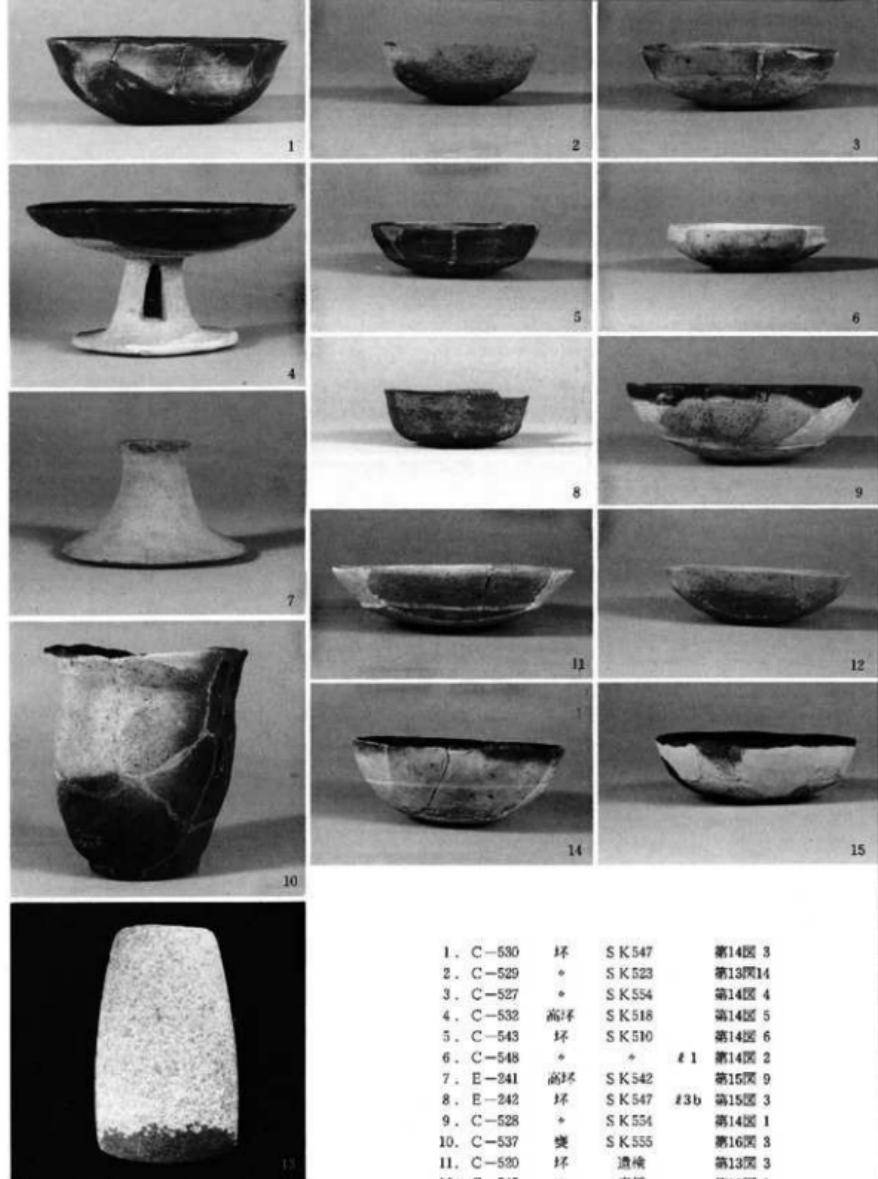
1. 43水	C-500	环	S D35	# 1 · 2	第5图 8
2. *	C-501	环	*	# 2	第5图 9
3. *	C-503	环	*	# 1 · 2	第4图15
4. *	C-511	环	S K489	# 1	第5图10
5. *	C-502	环	S D35	# 2	第5图 6
6. *	C-489	环	*	# 1 · 2	第4图10
7. *	E-225	平底	S K489	# 1	第5图11
8. 第44	C-538	甕	S I500		第16图 4
9. *	C-531	甕	S I549	床面	第16图 5
10. *	C-536	甙	S I498	*	第13图 6
11. *	C-515	环	S B507	E 1 N 3	第13图 8
12. *	C-544	环	*	E 3 N 2	第13图 7
13. *	C-525	环	S I549	床面	第16图 1

图版55 第43·44次調査区出土遺物



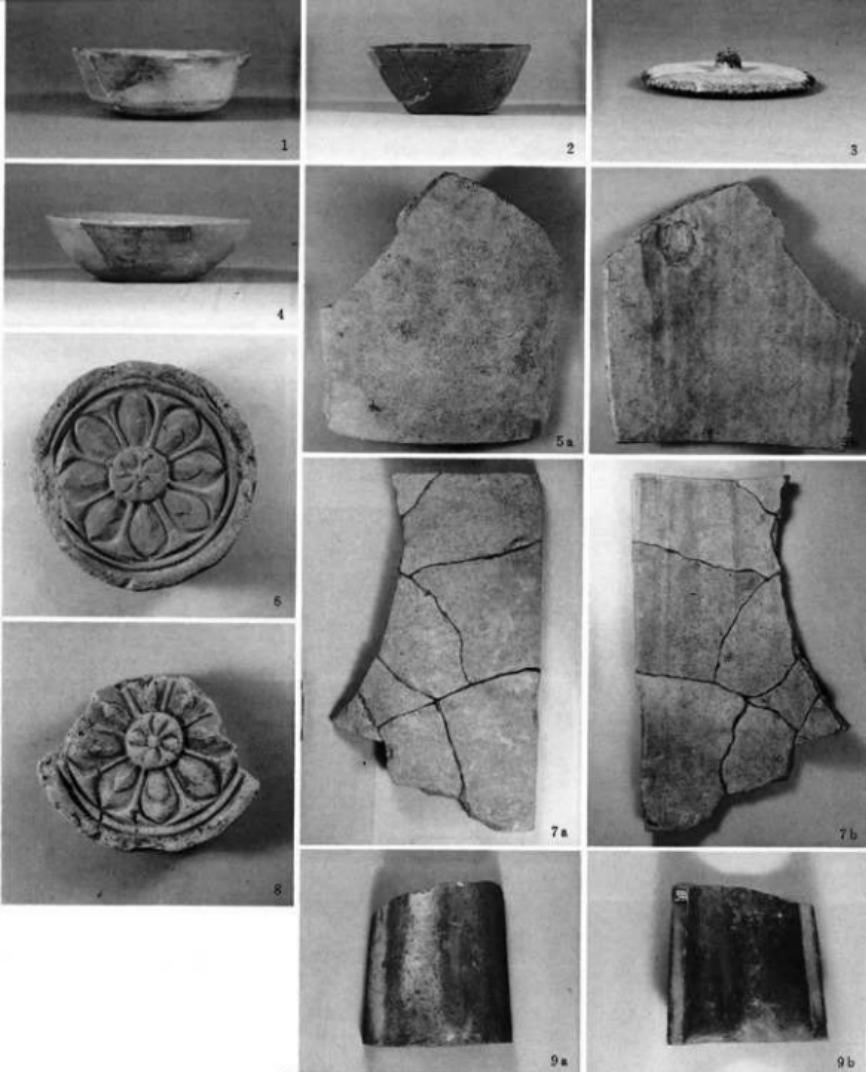
- | | | | | | | | | | |
|----------|----|--------|-----|--------|-----------|-----|--------|-----|--------|
| 1. C-522 | 环 | S D552 | # 1 | 第13图12 | 8. C-539 | 高环 | S D552 | # 1 | 第14图 9 |
| 2. C-519 | * | * | * | 第13图11 | 9. C-540 | * | * | * | 第14图 7 |
| 3. C-524 | * | * | * | 第13图10 | 10. E-229 | 平底 | * | * | 第15图11 |
| 4. C-514 | * | * | * | 第13图13 | 11. E-231 | * | * | * | 第15图 5 |
| 5. C-523 | * | * | * | 第13图15 | 12. E-230 | 长颈瓶 | * | * | 第15图10 |
| 6. C-535 | 甕 | S D536 | # 2 | 第16图 2 | 13. C-547 | 环 | S D492 | * | 第13图 9 |
| 7. C-518 | 高环 | S D552 | # 1 | 第14图 8 | 14. E-233 | * | S D552 | * | 第15图 7 |

图版56 第44次调查区出土遗物



图版57 第44次調查区出土遺物

1. C-530	环	S K547	第14区 3
2. C-529	*	S K523	第13区 14
3. C-527	*	S K554	第14区 4
4. C-532	高环	S K518	第14区 5
5. C-543	环	S K510	第14区 6
6. C-548	*	*	第14区 2
7. E-241	高环	S K542	第15区 9
8. E-242	环	S K547	第15区 3
9. C-528	*	S K534	第14区 1
10. C-537	甌	S K555	第16区 3
11. C-520	环	遗物	第13区 3
12. C-545	*	表探	第13区 1
13. K-12	石斧	S K446	第23区 6
14. C-521	环	遗物	第13区 4
15. C-567	*	*	第13区 5



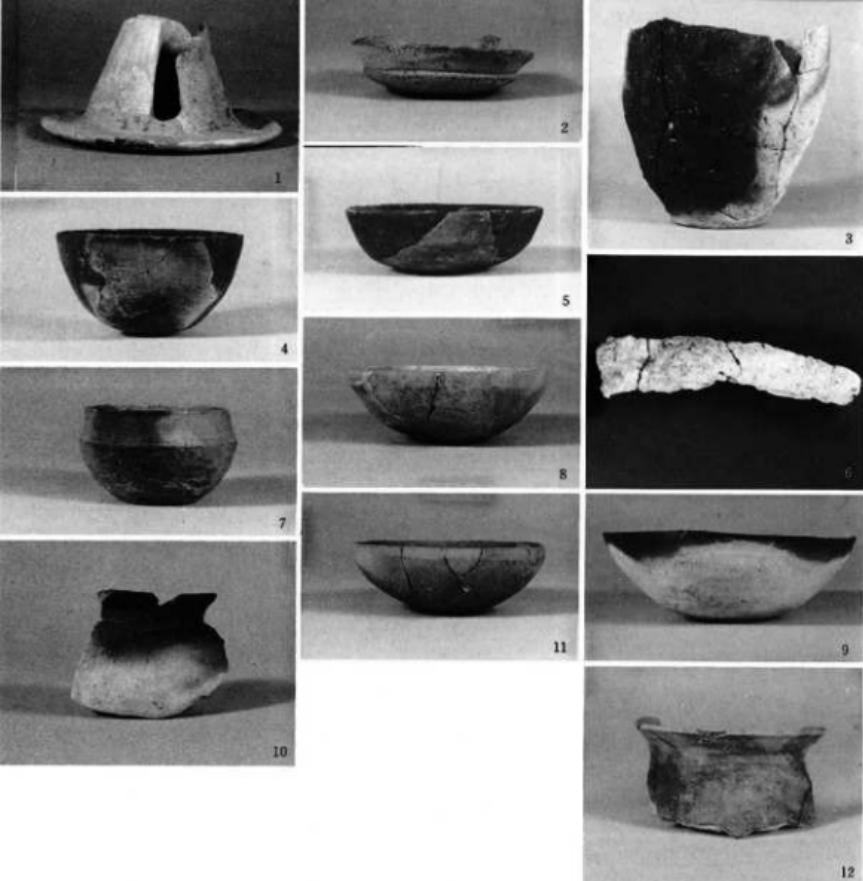
1. 44次	E-244	环	耕作土	第15图2	6 46次	F-34	軒丸瓦	SD562	第28图1
2. 44次	E-243	环	Pit130 埋土	第15图4	7 46次	G-24	平瓦	SD562	第29图1
3. 44次	E-252	盖	陶 框	第15图6	8 46次	F-32	軒丸瓦	SD562	第28图3
4. 44次	D-1	环	耕作土	第13图2	9 46次	F-29	丸瓦	耕作土	第28图7
5. 46次A区	G-23	平瓦	遺物西側	第29图5					

图版58 第44·46次调查区出土遗物



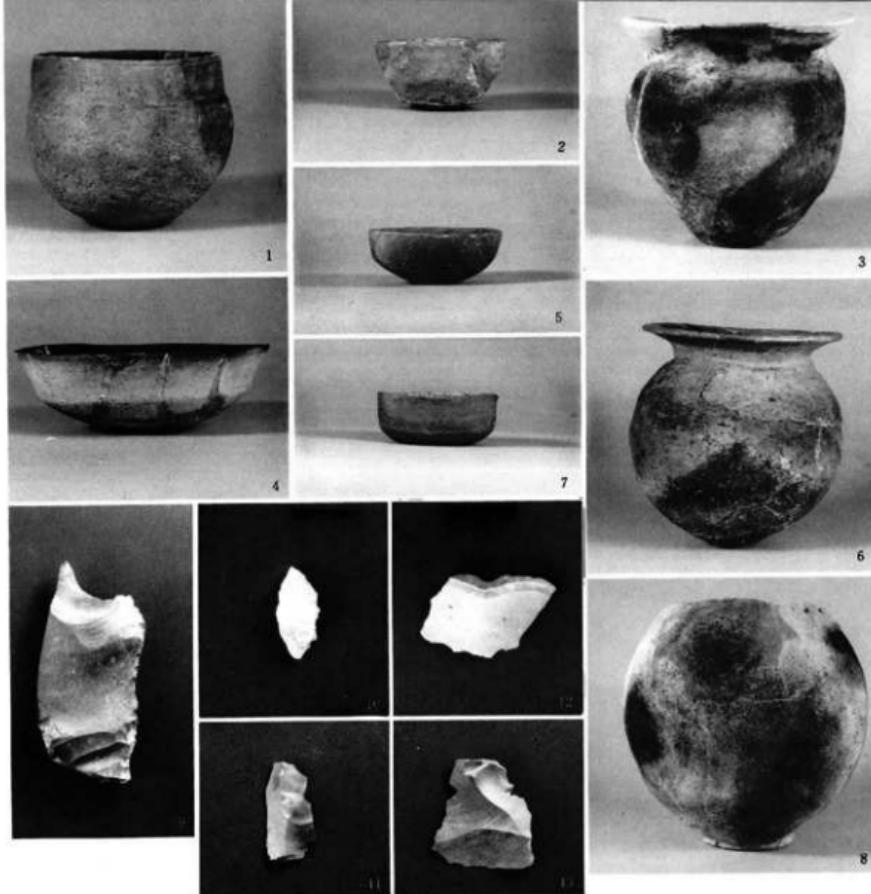
- | | | |
|---------------------------------|--------|---------------------------------|
| 1. 46次 G-26 平瓦 SD562 | 第29图 4 | 6. 48次 C-559 环 S I 595 2 第38图 9 |
| 2. 46次 G-28 平瓦 耕作土 | 第29图 3 | 7. 46次 F-33 轩丸瓦 SD562 第28图 2 |
| 3. 46次 G-27 平瓦 SD562 | 第29图 2 | 8. 46次 F-31 轩丸瓦 SD562 第28图 4 |
| 4. 47次 C-569 环 SK571 2 a 第34图 2 | | 9. 47次 C-564 环 撒乱溝 第34图 3 |
| 5. 46次 F-30 丸瓦 通检西侧 | 第28图 6 | |

図版59 第46・47・48次調査区出土遺物



- | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|-------------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------|-----------------------|-----------------|---------------------|
| 1. 47次 C-565 高环 S D35 | 2. 48次 E-251 环 S I 1581 | 3. + C-550 瓢 S I 586 | 4. + C-558 环 S I 1590 | 5. + C-573 + S I 595 | 6. + N-8 瓢 S I 1598 | 7. + C-552 环 S I 600 | 8. + C-562 + S I 606 | 9. + C-556 + + | 10. + C-561 瓢 S K 579 | 11. + C-563 环 + | 12. + C-549 瓢 土器集中部 |
| 第34图 1 | 第38图 2 | 第39图 6 | 第39图 1 | 第38图 7 | 第38图 12 | 第38图 10 | 第38图 13 | 第38图 11 | 第39图 4 | 第38图 6 | 第39图 2 |

图版60 第47·48次調查区出土遺物



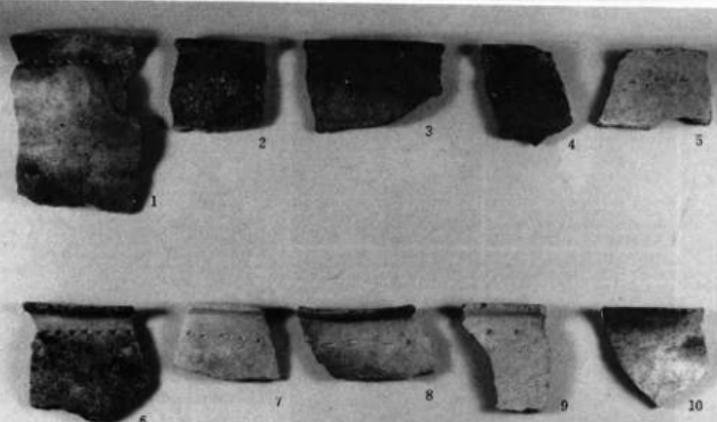
- | | | | |
|--------------|----------|--------|--------|
| 1. 48次 C-551 | 钵 S B597 | E1S2 | 第39回-3 |
| 2. 48次 E-248 | 环 | 耕作土 | 第38回-1 |
| 3. 48次 C-553 | 甕 | S K602 | 第39回-7 |
| 4. 48次 C-557 | 环 | 土器集中部 | 第38回-4 |
| 5. 48次 C-570 | 环 | 耕作土 | 第38回-5 |
| 6. 48次 C-555 | 甕 | S K602 | 第39回-9 |
| 7. 48次 E-250 | 环 | 搅乱 | 第38回-3 |
| 8. 48次 C-554 | 甕 | S K602 | 第39回-8 |
| 9. 44次 K-13 | | S K518 | 第23回-1 |
| 10. 44次 K-15 | | 耕作土 | 第23回-4 |
| 11. 44次 K-17 | | 耕作土 | 第23回-5 |
| 12. 44次 K-14 | | 透镜 | 第23回-3 |
| 13. 44次 K-16 | | 耕作土 | 第23回-2 |

图版61 第44·48次调查区出土遗物



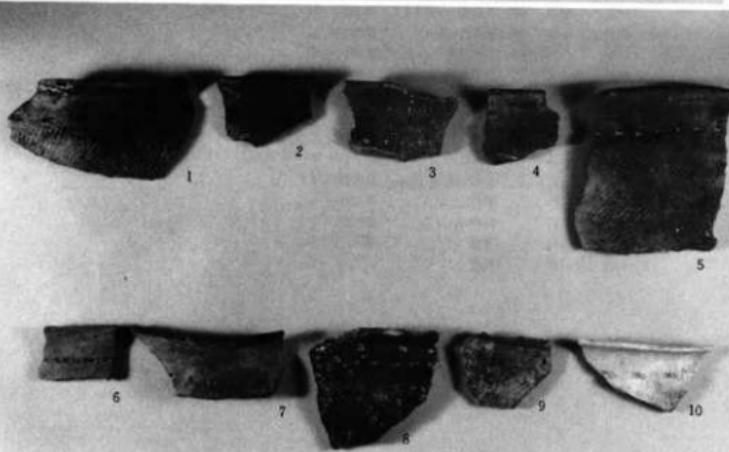
1. B-12
2. B-72
3. B-70
4. B-67
5. B-53
6. B-39
7. B-46
8. B-33
9. B-23

図版62
第44次調査区出土遺物



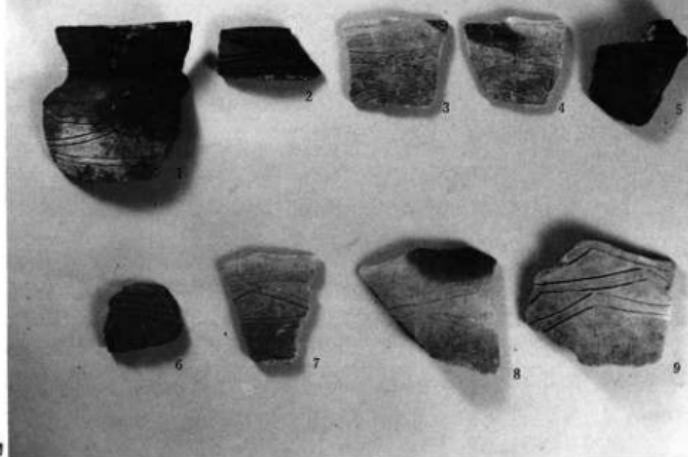
1. B-78
2. B-79
3. B-81
4. B-82
5. B-75
6. B-80
7. B-83
8. B-84
9. B-85
10. B-39

図版63
第44次調査区出土遺物

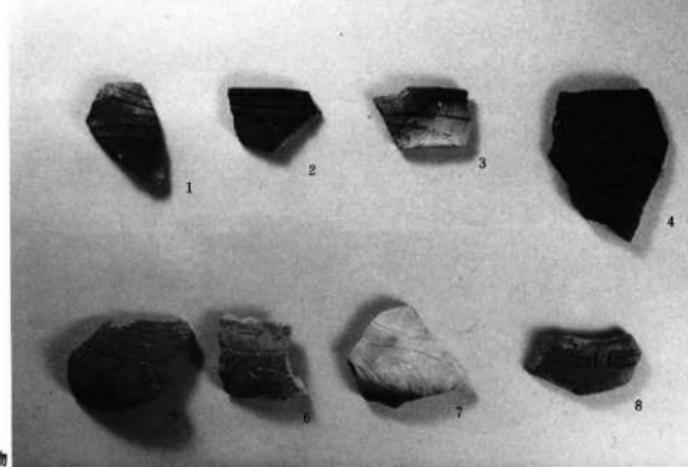


1. B-11
2. B-8
3. B-20
4. B-31
5. B-10
6. B-40
7. B-73
8. B-74
9. B-76
10. B-77

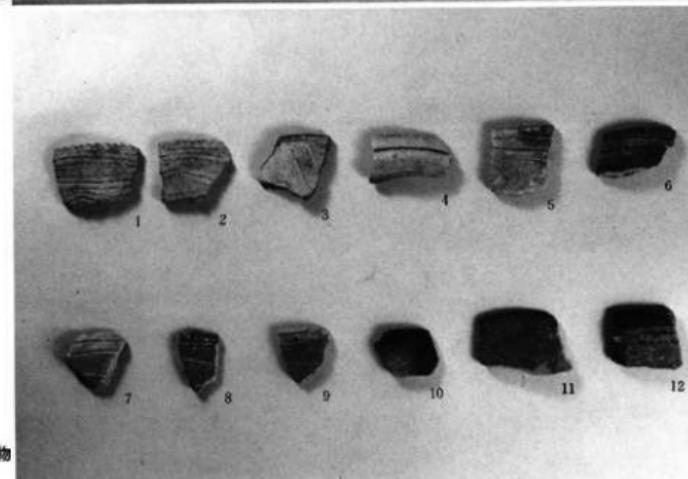
図版64
第44次調査区出土遺物



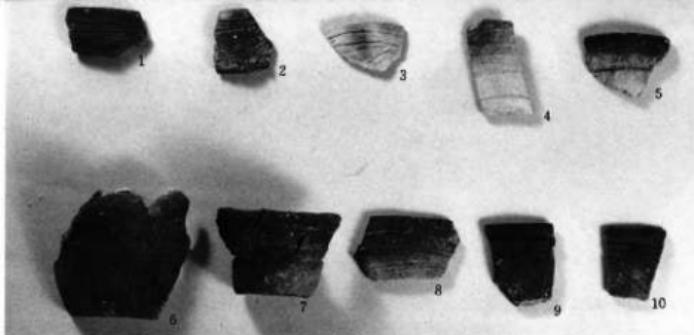
図版65
第44次調査区出土遺物



図版66
第44次調査区出土遺物

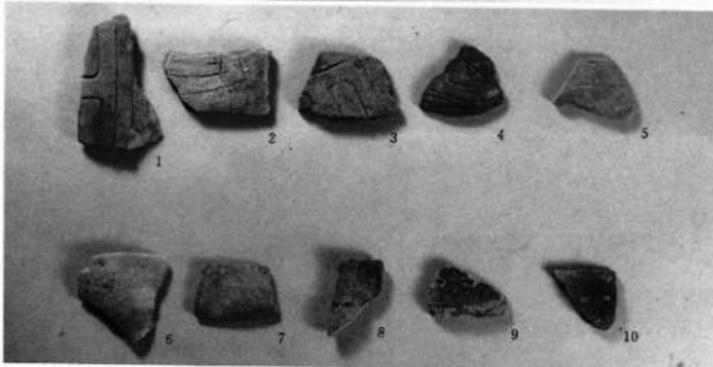


図版67
第44次調査区出土遺物



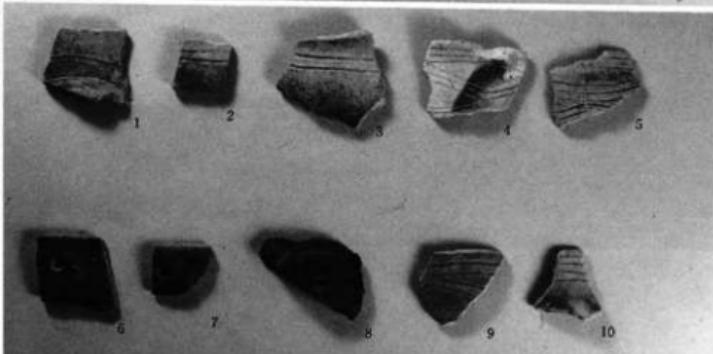
1. B-38
2. B-16
3. B-60
4. B-62
5. B-25
6. B-86
7. B-66
8. B-24
9. B-15
10. B-37

圖版68
第44次調查區出土遺物



1. B-97
2. B-96
3. B-98
4. B-101
5. B-112
6. B-99
7. B-100
8. B-106
9. B-103
10. B-93

圖版69
第44次調查區出土遺物



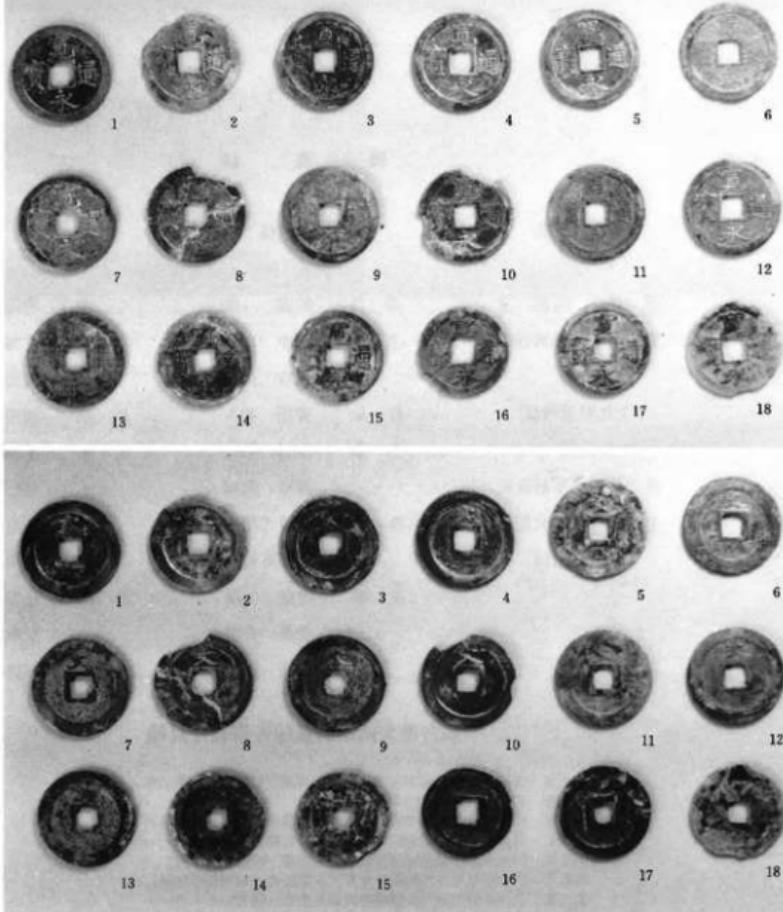
1. B-54
2. B-94
3. B-68
4. B-52
5. B-19
6. B-21-2
7. B-21-1
8. B-44
9. B-42
10. B-69

圖版70
第44次調查區出土遺物



1. B-104
2. B-105
3. B-102
4. B-110
5. B-108
6. B-111
7. B-71
8. B-71
9. B-107
10. B-109

圖版71
第44次調查區出土遺物



1	N-9	寛永通寶	第30回 1	10	N-22	寛永通寶	第30回10
2	N-10	*	第30回 2	11	N-23	*	第30回11
3	N-13	*	第30回 3	12	N-25	*	第30回12
4	N-15	*	第30回 4	13	N-26	*	第30回13
5	N-16	*	第30回 5	14	N-11	*	第30回14
6	N-17	*	第30回 6	15	N-12	*	第30回15
7	N-18	*	第30回 7	16	N-14	*	第30回16
8	N-19	*	第30回 8	17	N-20	*	第30回17
9	N-21	*	第30回 9	18	N-24	*	第30回18

図版72 第46次調査区 S K559出土古銭

職員録

社会教育課

文化財調査係

課長	阿部 速	係長	佐藤 隆	主事	吉岡恭平
主幹	早坂春一	主事	田中 刑和	〃	工藤哲司
		〃	結城 慎一	〃	渡部弘美
文化財管理係		教諭	青原 和夫	教諭	渡辺 誠
		主事	木村 浩二	主事	主浜光朗
係長	佐藤政美	〃	藤原 信彦	〃	斎野裕彦
主事	岩沢克輔	教諭	小野寺和幸	〃	長島栄一
〃	山口 宏	〃	佐藤美智雄	〃	及川 格
		主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		〃	金森 安孝	〃	松本清一
		〃	佐藤 甲三	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物蘆原下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
 第2集 仙台城（昭和42年3月）
 第3集 仙台市燕波善応寺横六古墳群調査報告書（昭和43年3月）
 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
 第5集 仙台市小泉法隆寺古墳群調査報告書（昭和47年8月）
 第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
 第7集 仙台市宮沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
 第9集 仙台市根岸町宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備子備調査概報（昭和51年3月）
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次子備調査概報（昭和52年3月）
 第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
 第14集 畠邊跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備子備調査概報（昭和54年3月）
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
 第17集 北堀遺跡（昭和54年3月）
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
 第19集 仙台市地下鉄開渠分布調査報告書（昭和55年3月）
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備子備調査概報（昭和55年3月）
 第21集 仙台市閑院関係遺跡調査報告書1（昭和55年3月）
 第22集 稲ヶ峯（昭和55年3月）
 第23集 年報1（昭和55年3月）
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備子備調査概報（昭和56年3月）
 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 年報 2 (昭和56年 3月)
第29集 鶴山遺跡 I -昭和55年度発掘調査概報一 (昭和56年 3月)
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年 3月)
第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ (昭和56年 3月)
第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第33集 山II遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年12月)
第35集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年 3月)
第36集 北前遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第37集 仙台平野の遺跡群 I -昭和56年度発掘調査報告書一 (昭和57年 3月)
第38集 郡山遺跡 II -昭和56年度発掘調査概報一 (昭和57年 3月)
第39集 焙沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 I (昭和57年 3月)
第41集 年報 3 (昭和57年 3月)
第42集 鶴山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一 (昭和57年 3月)
第43集 乗道跡 (昭和57年 8月)
第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和57年12月)
第45集 茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第46集 郡山遺跡 III -昭和57年度発掘調査概報一 (昭和58年 3月)
第47集 仙台平野の遺跡群II -昭和57年度発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第48集 史跡蓬萊塚古墳群と57年度環境整備予備調査概報 (昭和58年 3月)
第49集 仙台市文化財分布調査報告 I (昭和58年 3月)
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第51集 仙台市文化財分布地図 (昭和58年 3月)
第52集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告 (昭和58年 3月)
第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第54集 神明社裏跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第55集 南小泉遺跡一青葉女子学園移転新當工事地内調査報告 (昭和58年 3月)
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 II (昭和58年 3月)
第57集 年報 4 (昭和58年 3月)
第58集 今泉城跡 (昭和58年 3月)
第59集 下ノ内浦遺跡 (昭和58年 3月)
第60集 南小泉遺跡一倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第61集 山口遺跡 II -仙台市体育館建設予定地一 (昭和59年 2月)
第62集 焙沢遺跡 (昭和59年 3月)
第63集 史跡隆奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報 (昭和59年 3月)
第64集 鶴山遺跡 IV -昭和58年度発掘調査概報一 (昭和59年 3月)
第65集 仙台平野の遺跡群III -昭和58年度発掘調査報告書一 (昭和59年 3月)
第66集 年報 5 (昭和59年 3月)
第67集 富沢水田遺跡 -第一番 -泉崎前地区 (昭和59年 3月)
第68集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第3次調査報告 (昭和59年 3月)
第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 III (昭和59年 3月)
第70集 戸ノ内浦跡発掘調査報告書 (昭和59年 3月)
第71集 後河原遺跡 (昭和59年 3月)
第72集 六反田遺跡 II (昭和59年 3月)
第73集 仙台市文化財分布調査報告書 II (昭和59年 3月)
第74集 山口遺跡 V -昭和59年度発掘調査概報一 (昭和60年 3月)
第75集 仙台平野の遺跡群IV (昭和60年 3月)
第76集 仙台城二ノ丸跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第77集 山田上ノ台遺跡 -昭和59年度発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第78集 中田畠中遺跡 -第2次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第79集 欠ノ上 I 遺跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第80集 南小泉遺跡 -第12次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第81集 南小泉遺跡 -第13次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 IV (昭和60年 3月)
第83集 年報 6 (昭和60年 3月)
第84集 仙台市文化財分布調査報告書 III (昭和60年 3月)

仙台市文化財調査報告書第74集

昭和59年度

郡山遺跡V

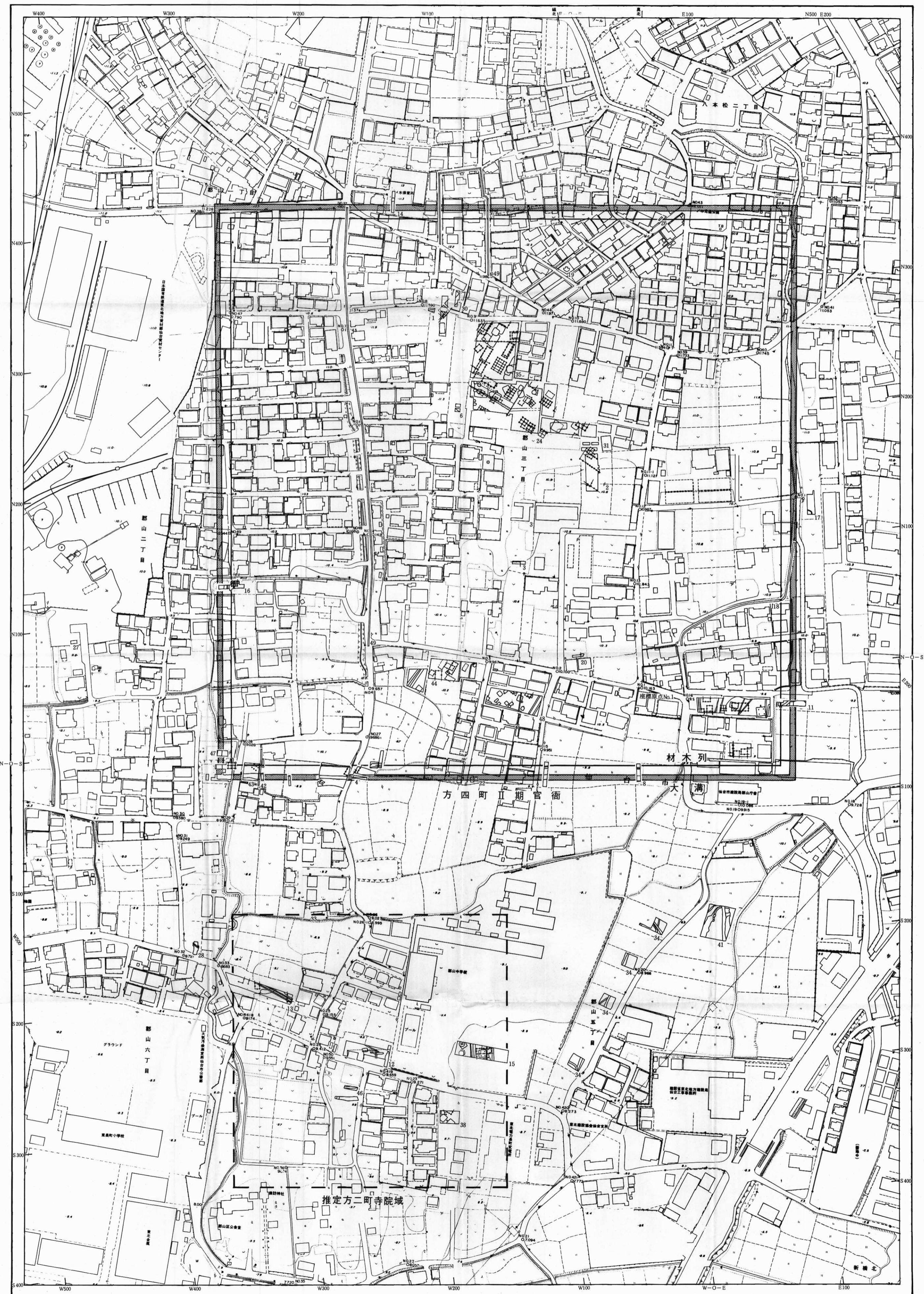
—昭和59年度発掘調査概報—

昭和60年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市西四丁目3-7-1

印刷 横 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町21-24 TEL 63-1166

郡山遺跡 V



郡山遺跡現況平面図

解説 昭和56年8月 フラニマートII・ステレオフローターAK
座標系 No.1(X=0,Y=0)を通る緯北緯を基準としてある
等高線開閉 1m

1:1,000

